

---

# 『僕のアスカ。太陽のような君。』 & 『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セット

朝陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『僕のアスカ。太陽のような君。』 & 『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セット

### 【Nコード】

N1124L

### 【作者名】

朝陽

### 【あらすじ】

第十二使徒レリエルとの戦いで、勝負を焦ったアスカはレリエルの本体部分であった黒い影に式号機ごと飲み込まれてしまう。

シンジもアスカを助けるために初号機で駆け付けたが、同じように飲み込まれてしまい、さらに脱出は不可能だった。

そして、使徒レリエルの体内は異次元空間に通じていたのだ。

シンジとアスカの二人がたどり着いたのは剣と魔法の力が支配する不思議な世界。

湖の真ん中に居た二人は遊撃士のカシウス・ブライトに拾われ、ブライト家の家族として扱われる。

ブライト家では自分達に似ている姿と年頃の二人、ヨシユアとエステルと出会う。

後にリベール王国史に残るダブルバカップルの英雄伝説が幕を開けるのだった。

以前に他のエヴァンゲリオン小説サイトに投稿させて頂いた当時のタイトルに戻させて頂きました。告知と謝罪については連載中の注意書きをご覧くださいませ。

こちらの2つの作品は2009〜2010年に他の投稿サイトに投稿していたのですが、諸事情により投稿サイトの管理人様に事情を話してこちらで掲載させて頂く事になりました。

## 第零話 エヴァンゲリオン、消滅（前書き）

あたし〃エステル視点 アタシ〃アスカ視点 僕〃ヨシユア視点  
ボク〃シンジ視点

四人も主人公格が居てややこしいことこの上ないですが、ご了承ください。

## 第零話 エヴァンゲリオン、消滅

### 《第三新東京市》

突如、市街地の中心部に現れた空に浮かぶ巨大な白黒縞模様の球体。ネルフの作戦部は使徒と断定し、エヴァンゲリオン初号機、弐号機、零号機の三機による迎撃を決定した。

迎撃作戦の内容は、先日シンクロテストで一番の好成績を残したシンジの乗る初号機が最初に攻撃し、零号機と弐号機は後方で待機して様子を見るというものだった。

ネルフの作戦部長である葛城ミサトがシンジにライフルによる遠距離からの攻撃の指示を下そうとする直前、アスカの乗る弐号機が初号機の前をさえぎり、使徒の元に突撃した。

ナンバーワンのエヴァパイロットはアタシなの！  
バカシンジなんかじゃないわ！

あの使徒をアタシが倒せばミサトもアタシがナンバーワンだと認めるはずよ！

『アスカ、あなたはバックアップのはずよ、戻りなさい！』

ミサトの怒号が通信スピーカーから聞こえたけど、アタシは無視した。

アタシは兵装ビルに用意されていたスマッシュ・ホーク（斧状の武器）を手に取ると、使徒の本体だと思った黒い球体を斬り裂くために駆けだした。

すると突然、足元が沈み込んで行く感覚がした。

足元を見ると黒い影が周囲の兵装ビルと共にアタシの式号機を飲み込んで行くのが見えた。

「ちょ、ちょっと、コレ、どうなってんのよ!？」

アタシはそう叫びながら、あかくように右腕を頭上に突き出していた。

シンジがマグマの底に沈むアタシを引き上げてくれたときのように後で思えば、アタシはシンジが助けてくれる事を心の奥底で願っていたのかもしれない……。

ボクは出現した使徒が何もしてこないまま、にらみ合いがしばらく続いたので、緊張の糸が切れそうになるのを抑えていた。すると、突然大きな足音が聞こえて式号機が目の前を駆けて行ったんだ。

アスカの命令は待機のはず。

アスカが命令違反をするなんて！

ボクはそこまでアスカを追いつめていたのか、とショックを受けて、式号機が使徒に接近するまで見ていただけだった。

目の前で式号機は黒い影に沈みこんでいく。

通信スピーカーから聞こえるアスカの戸惑った声に気がついて、ボクは式号機の居る場所に全力で走った。

ケーブルから式号機を引き上げて助ける事は考えられなかった。

だって、あのマグマに沈み込むアスカを助けたように、直接この手でアスカの手をとって助けたいとおもったからだ。

よし、掴んだ！

ボクは式号機の手首をつかむ事に成功した。

でも悪い事に黒い影は広がって、ボクの乗る初号機の足元まで来た

んだ。

『シンジ君！式号機を離して撤退しなさい！あなたまで巻き込まれるわ！』

通信スピーカーから聞こえるミサトさんの命令。

でもボクは絶対に離さない、アス力を見捨てるなんてできないよ！ボクは式号機の腕をつかむ手に力を込めて、式号機を抱き上げるように引き寄せた。

その時ボクの視界は式号機以外ほとんど黒く染まっていた。

落下していく中、何かに強く腕を掴まれる感覚に、アタシは頭上を見上げた。

アタシの視線の先には式号機の腕を掴む初号機の姿が見えた。

シンジ、また助けに来てくれたんだ。

アタシは感激のあまり、目にうつすらと涙が浮かべた。

『シンジ君！式号機を離して撤退しなさい！あなたまで巻き込まれるわ！』

通信スピーカーからミサトの声が聞こえた時、またアタシの心に絶望が広がった。

でも、シンジは、アタシを見捨てなかった。

初号機はさらにアタシの乗る式号機を引き寄せ、黒い影の中で式号機を抱きしめてくれた。

アタシはなんだか直接シンジに抱きしめられている感覚が感じられて、とても暖かった。

アタシは初号機に抱きしめられながら、黒い空間を落ちていく感覚

を味わっていた。

しばらくすると、眩しい光と共に白い空間に包まれた。そして、青い空間が広がる。

アタシは上空数百メートルの空間にいるのに気がついた。式号機の脚が着水する衝撃を感じる。

アタシの式号機と、抱きついた形の初号機は、

胸のところまで水に沈み込んだところで安定していた。

内部電源がカラになって、全くエヴァは動かせない。

アタシは仕方がないので、エントリープラグから降りる事にした。

どうやら初号機のエントリープラグもイジェクトされたようだ。

シンジものそのと初号機から出てきた。

アタシはシンジが助けに来てくれて嬉しいと正直に言えずに不貞腐れたような顔でシンジに文句を言ってしまった。

「な、なんで余計な事するのよ……」

「ご、ごめん……」

シンジはいつもと同じように、怒ったアタシに対して謝った。

お互いの心が落ち着いた後、アタシとシンジはエヴァの肩の上にたつて、周りを見回す。

透き通るような青い空、周囲に広がる緑の山々。

しかし、山々に高層ビルのような建物は見当たらない。

「湖のようだけど、芦ノ湖、じゃあないわよね……？」

とても大きな湖で、岸から数キロ離れているから、泳いで岸に渡るのは無理そうだ。

諦めたアタシたちは、黙って座り込んで湖を眺めていた。



ボクは大きな水音がこちらに近づいてくるのに気がついた。

水音がした方向を見ると、一隻の木製のボートがエンジン音を立てて、高速で近づいてくる。

そのボートの舳先には中年のおじさんが乗っていて、手には長い棒を握っている。

もつと驚いたのはその服装だった。

何かの映画に出てくる、昔のヨーロッパっぽい服を着ている。

「湖の側で釣りをして居たら、大きな波が立って、何かと思つて様子を見に来てみれば……」

そのおじさんはボートから降りて、エヴァの肩に乗ると、独り言をいいながらボクたちに近づいてきた。

隣に居るアスカが怯えた様子でキュツとボクの手を握る。

ボクはアスカを守るように立ちはだかつて声をかけた。

「誰ですか、あなたは」

そのおじさんは宥めるように、手をブラブラさせて、軽い調子でこう言った。

「やれやれ、そんなに警戒しないでくれよ。俺はカシウス・ブライト。遊撃士だ」

「何よ（ですか）遊撃士って？」

ボクとアスカは合わせてそう答える。

言ってカシウスと名乗ったおじさんはちょっと首をかしげて、目を丸くした。

「遊撃士を知らないのか？」

カシウスさんは考え込みながら初号機と貳号機の顔を見つめながらボク達にまた質問をする。

「この湖に落ちて来たデカ物は君達のものか？」  
「……」

ボク達はカシウスさんに即答できなかった。

「取り合えず、地域の平和と民間人の保護って事で君達を連れていく。さあ、ついてこい」

と言ってカシウスはウィンクする。  
突然ついて来いって言われてもわからないよ……。  
せめてアスカだけでも守らないと。  
ボクはカシウスさんを見つめあったまま、動けないでいた。

「時間が無いんだ。すまん。」

カシウスさんは、そう呟くと素早い動きで、間合いを詰めると、持っていた棒でボクとアスカの急所に一撃を加えた。  
ボクは体中がしびれて動けなくなつて、立って居られなくなつてしまった。

アスカも同じようだった。

カシウスさんは、ボクたち二人をかついでボートに乗せた。

「エッチ、バカ、変態……」

アスカは弱々しい声で反論したけど、カシウスさんは聞く耳持たず、

ボクたちのプラグスーツを隠すように毛布をかぶせた。  
ボートが発進すると、カシウスさんは穏やかな声で話しかけてくれた。

「すまなかったな。あのままあそこに居たらお前たち、不審者として王国の警備艇に捕まって牢屋行きだったぞ。あの湖に不時着した巨大な兵器に関係してるんだろ？」

やっと、苦痛が治まってきたボクは身を起してカシウスさんに問いかける。

「あの、カシウス、さん……王国とかわけがわからないんですけど、これからボクたちどうなるんですか？」

「そうだな、とりあえず、ほとぼりが冷めるまで俺の家に居てもらうことになるな。」

カシウスさんは少しだけ考える仕草をしてそう答えた。

「何ですって！？ アタシたちはエヴァンゲリオンのパイロットなんだから、ネルフに帰らないといけないのよ！」

体の調子が回復したアスカが、身を乗り出して、カシウスさんに怒鳴った。

ボクたちはエヴァのパイロットして使徒と戦わなければならない。  
アスカの言う事は当然だ。

「……ネルフ？ 聞いたことが無いな。お前たち、帰る方法はあるのか？」

カシウスさんはネルフを知らないようだ。

世界中に支部があり、超法規的組織として存在しているネルフを知らないなんて考えられない。

「……アタシ、ミサトの命令に違反して弐号機と初号機をダメにしちゃったんだ、ネルフには帰れないんだった。」

アスカが自嘲気味にそう呟いた。

そうだ、一番傷ついているのはアスカなんだ。

ネルフに戻ってもアスカは傷つくんだ。

……でも、ミサトさんも許せない。

アスカを見捨てるだなんて。

ボクはそういう命令を出したネルフにはもう戻りたくないと思った。アスカをこれ以上ネルフに居させたら心が壊れてしまう、連れ出して逃げるなら今しかない。

前向きにエヴァから逃げ出すのはこれで初めて最後だ。

そう決意したボクは、拳を握りしめてカシウスさんに告げる。

「ボクたちは二人とも、ネルフから脱け出します。もう帰るところはありません。」

アスカが驚いて息を飲む。

アスカはボクがまだネルフにパイロットとして認められているのになぜ、と思っっているだろう。

この時ボクはまだアスカをずっと守ると思っていなかった、ただ逃げ出そうと思っただけ。

カシウスさんはその言葉を聞くと、ボクたちに同情するように大きくため息をついた。

「お前たちもヨシユアと同じように謎の結社とかに追われようになるのか、かわいそうにな」

この時ボクはカシウスさんの眩きの意味が全く分からず、頭をひねった。

その後アタシたち三人は無言のままボートは岸に着いた。

ボートがついた棧橋の近くには小さなペンションのような建物があった。

ああ、今日は疲れたわ。

エントリープラグの中で長い間LCLに浸かっていたせいかな体中がベトベトして気持ち悪い。

シャワー浴びたい。

と、思ったんだけど。

カシウスっておっさんはアタシたちの姿を見られるとまずいから、すぐにここから離れないといけない、と言う。

アタシたちはそのペンションから出て、近くにある古い石造りの塔、

《琥珀の塔》にしばらく隠れる事にした。

塔の入り口からこっそり街道を眺めると、鎧を着た兵士たちがエヴ

アが落ちた場所へ向かっているのが見えた。

アタシたちは本当にタイムスリップしてしまったの？

それとも別世界に飛ばされたの？

アタシは状況が理解できず、驚くしかなかった。

アタシたちは塔の一階で一夜を明かす事になった。

男二人と一緒に同じ部屋で寝るなんて！

アタシはまだ完全にカシウスっておっさんを信用してなかった。

「へ、部屋が狭いんだから近くで寝るんだからね！勘違いしないでよ！」

「はっはっはっ、二人に間違いが起こらないように俺が見張ってお

いてやるから安心しろ」

カシウスっておっさんのからかう声が聞こえる。

アタシはシンジから顔をそむけて横になった。

疲れていたのか固い石畳の上だったのにすぐに寝てしまった。

次の日の朝、カシウスっておっさんの話しかけてくる態度がさらに優しくなった気がする。

昨日までは距離を置いて話しかけてきたのが、今日はまるで家族に接するように細かい事まで気を使ってくれる気がする。

まあ、『カシウスっておっさん』から『カシウスさん』に格上げしてあげてもいい。

昨日の夜何かあったのかな？

そういえば、カシウスさんに寝顔をすっかり見られたんだ、あー恥ずかしい。

そろそろ王国軍の警戒網も薄れてきたという事で、アタシたちはカシウスさんの家に向かう事になった。

でも、カシウスさんの姿も目撃されて、エヴァ関係で注目されても困るので、街道ではなく獣道を進む事になった。

途中アタシたちは常識では考えられない、人を襲う大きな動物や巨大植物のようなものに遭遇した。

『魔獣』と呼ばれる怪物らしい。

武器も戦う力も無いアタシたちはカシウスさんに守ってもらうしかなかった。

カシウスさんが信用できなかったらシンジと二人で逃げるってことも考えたけど、これじゃあ諦めて一緒に行くしかない。

魔獣っていう異進化を遂げた生物がいるあたり、ここは地球じゃないのかな、とアタシは考えていた。

アタシとシンジは、エヴァが不時着した《ボース地方》から、カシウスさんの家のある《ロレント地方》に着くまでの間、この世界の地理の事、歴史の事、電気に似た『導力』の事などをカシウスさん

に教えてもらっていた。

### 第三者視点 -

#### 《ロレント郊外・ブライト家》

ロレントの市街から少し離れた森の空き地に、一軒だけ建っている木造の二階建ての家。

カシウス・ブライトが十五年前に建てた家である。

この家の一階のダイニングキッチンで、一組の少年少女が夕食をとっていた。

一人は、黒髪で琥珀色の瞳を持つ少年、ヨシユア・ブライト（14歳）。

もう一人は、赤い髪とルビー色の瞳をもつ少女、エステル・ブライト（14歳）。

二人は11歳の時、カシウスがヨシユアを拾ってきてから一緒に家族として暮らしている。

あたしがヨシユアと一緒に夕食を食べていると、街道の方から家の方に向かって人の話し声と足音が近づいてくる。

だんだん近くに聞こえてくる声の一つがカシウス父さんだとわかると、あたしは出迎えるために玄関に向かった。

玄関の扉の向こうから、カシウス父さんの声が聞こえる。

「ここが俺の家だ。良い家だろう？」

「ふーん、まあまあね」

その女の子の声は大きい声だったので、中に居るあたしとヨシユア

の二人にも聞き取ることができた。

あたしはその声に聞き覚えが無かった。

とにかく後で紹介してもらおうと思って、ドアを開いて父さんのいる方を見た。

あたしの前にはニヤニヤする父さんと、仁王立ちする少女と、伏し目がちにこつちをみる少年が居た。

あたしの事をみると父さんはこう言い放った。

「土産だ。」

そのセリフは、父さんがヨシュアを三年前に家に連れてきた時と同じだった。

あたしは父さんを睨んであの時と同じセリフを一句変わらず叩きつけてやった。

「どーゆー事か、説明してもらいましょうか？」

これがあたしの妹と弟となる、アスカとシンジとの出会いだった。



## 第一話 次女アスカ、次男シンジ

《リベール王国 ロレント郊外 ブライト家》

ボクとアスカは、カシウスさんの家のダイニングキッチンに迎え入れられた。

テーブルの上には、ほとんど食べ終わった食器が並んでる。

「わかった、わかった。これから説明するから、とりあえず夕食を作ってくれないか」

カシウスさんは、手を体の前に押し出して、家の中に居た女の子をなだめると、ボクとアスカに向かって、ニヤリと笑って、こう言った。

「この家ではな、エステルが一番の古株なんだ。逆らうとこの家に居られなくなるぞ」

エステルって言う女の子は、席に座ってこのやり取りを眺めていた黒髪の男の子に向かって、声高らかに命令をする。

「じゃあ、ヨシユア。料理よろしく」

「今日の当番はエステルだよ？」

ヨシユアって言う男の子はそう言いながら呆れた顔をして、ツッコミを入れた。

「あたしは父さんの話を聞く義務があるのっ！」

でも、エステルは腰に手を当てて、自信満々の顔で答えた。

するとヨシユアはため息をついて、ガタガタと席を立ちあがり、台所で料理を始めた。

ボクもアスカに押し切られて言う事を聞いてしまつよなあ、とヨシユアに同情した。

「あたしはエステル。これから家族になるんだから、あんたたちの名前も教えてもらつわよ」

エステルは僕たちに明るい笑顔を向けてきた。

この子の笑顔も可愛い……でもアスカの笑顔も可愛いんだよな。

サファイア色の瞳と金色の髪が日に映えてキラキラしていた。

この子の体はアスカよりスレンダーな感じだ。

脚も健康美っていうのにふさわしい。

でもアスカの方が胸、太もも、ふくらはぎがいい感じで……。

はっ、ボクは何をトウジたちみたいないやらしい想像しているんだ！？

でもアスカをボーイツシュにした感じの似ている子なんだよね。

ボクがエステルを眺めて、長い妄想をしている間にアスカが発言した。

何かにイラついているような声だった。

「アタシはアスカ。こいつはバカシンジ」

「よろしく、アスカ、バカシンジ」

ボクの前でエステルとアスカは握手をしていた。

妄想から現実の世界に帰ってきたボクは慌てて叫ぶ。

「ボクの名前はシンジだよ！なんでアスカはいつもポンポンポンン！」

「なによ！うるさいわねバカシンジ！」

ボクとアスカの口喧嘩が始まってしまった。  
でもボクはすっかりアスカがいつもの調子に戻ったみたいで嬉しかった。

最近ボクを無敵のシンジ様などといって、憎んでいるように見えたから。

そして、カシウスさんたちの前で、アスカは猫を被っていない。  
年相応の態度をとっている。

距離を置いていない証拠だ。

もちろん、強気な態度は自分の弱さを隠すための演技ってところまでは、その時のボクにはまだ分らなかったけど。

「あんたたち、いい加減にしなさい！」

アタシたちの喧嘩は、エステルの叫びによって中断された。  
静まり返った食卓に、ハンバーグのいい香りが漂ってくる。

ヨシユアがハンバーグを料理したみたいだ。

冷凍の肉に余裕があったからしいけど、何の肉かな？

魔獣とかじゃなければいいんだけど。

カシウスさんに聞くと、アタシたちがいつも食べている牛と豚の合挽き肉だった。

安心して食べられる。

シンジのハンバーグに比べると手慣れた感じがするわね。

大きさも整ってるし、玉ねぎも適量みたいだし、焦げもないし……  
でも何か物足りないな。

シンジは自分より端正のとれているハンバーグに気落ちしているようだ。

「ヨシユアって、料理がうまいんだね。ボクじゃあこんなに上手く作れないよ。今度教えてよ」

アタシはその言葉に危機感を覚えて、向こうの世界ではプライドが邪魔して言えなかった事を言ってしまった。  
そう、心の叫び。

「アタシはシンジが作ってくれるハンバーグが好きよ！ そのままがいいんだからね！」

アタシはシンジの作るハンバーグに最初は文句を言っていた。  
細かい注文を付けたりしていた。  
いつしかシンジのハンバーグはアタシの専用の味のハンバーグになっていたんだ。

「アスカ、いつもみたいにまあまあ、じゃなくて美味しいって……好きっていつてくれたの!？」

シンジは破顔一笑した。  
その笑顔を見たアタシは、アタシは否定することなく、首を縦に振って頷いてしまっていた。  
アタシ、シンクロ率を抜かされた時から、シンジを見る度に嫌な気持ちになっていたのに、またシンジと一緒にいると心地よい、昔の関係に戻ってる。

「あんた、シンジを今までどーゆー扱いしてたのよ。美味しいって言ってあげないなんて」

エステルがジトーとした目でアタシを見てる。

その後は他愛も無い話をしながら、夕食を食べ終わった。

ボクは夕食の後、解散となったため、緊張をほぐすために庭に出てみることにした。

周り一面森に囲まれ、夜風が心地良い。

水音が聞こえたので行ってみると、裏の大池で釣りをしているエステルが居た。

「エステル、何してるの？」

「シンジか。夜釣りだよ」

ボクにそう答えたエステルの竿にアタリが来たようだ。

数分に渡るバトルの末、エステルの勝利。  
大物が釣れたようだ。

「やったー 見て見て」

満面の笑みでボクに魚を見せるエステル。

その笑顔を見たボクは、こう想像していた。

エステルの笑顔……輝いてる。まるで太陽みたいだ。

……アスカの笑顔も眩しかった。蒼い瞳が輝いて。

最近見てないな、アスカの笑顔。

また見たいな。

エステルは、延々と釣り上げた大物のすごいところをボクに喋っていたらしいけど、ボクは全然その話を聞かずに妄想の世界に入っていた。

それに気づいたエステルが膨れっ面でボクの肩を突いた。

「シンジ、あたしの話を聞いてないでしょ。何を考えていたの？」

ボクは思っていた事をエステルに打ち明けようと思った。

「アスカの事なんだ。最近、アスカが落ち込んでいて、笑顔になつてくれなかったんだ。原因はアスカのシンクロ率が落ちてるからなんだ」

「ふーん、シンクロなんかはよくわからないけどさ、なんでシンジはアスカの事が好きなの？ あの子、いつもシンジをいじめてる感じじゃない？」

エステルは釣りの手を休めて、ボクの話聞いてくれていた。

「違うよ。アスカはボクを励ましてくれてるんだ。でも、ボクはアスカを傷つけるだけで、笑顔にさせるなんて無理なんだ」

「諦めるんじゃないわよ！ シンジが諦めたら終わりなんだから！諦めない限り大丈夫よ！」

エステルは力一杯落ち込んだボクを励ましてくれた。

まるでアスカが励ましてくれるみたいだ。

ボクはエステルにアスカの姿を重ねて見つめてしまった。

「シンジ？ なによ、そんなにあたしを見つめちゃって！ あははははっ！ 他の女の子だったら、完全に誤解してるところだって。シンジって、将来絶対、色恋沙汰で苦労するタイプよね。はっ。お姉さん、心配になってきちゃった」

当のエステルも相当鈍いんじゃないだろうか、ヨシユアに同情するよ……と思ってしまうボクだった。  
でもエステルの気持ちは伝わって来た。

「うん、諦めないよ。」

ボクがエステルの瞳を見据えて返事をする、エステルは満足げにうんうんと頷いて、また釣りを再開した。

アタシは慣れない環境で疲れがたまつたのか、夕食の席に座つたままテーブルに突つ伏して居眠りしていた。

気がつくとアタシの体には毛布が掛けられていた。

薄眼を開けると、ワインを静かに飲むカシウスさんと、ヨシユアが凄い深刻な顔で話してる。

アタシが目覚めた事には気づかないみたい。

「やっぱり、決意は変わらないのか？ エステルはお前が居なくなると悲しむぞ」

「うん。この家を離れる事になつても、エステルを守るなら仕方が無いよ。それが僕の誓いだから」

アタシはヨシユアのこの言葉が聞こえた時、カッとなった。

椅子から一気に起き上がつてヨシユアの胸倉をつかんで問い詰めた。

「誓いつてどーゆー事よ！ 離れるってどういうことよ！」

カシウスさんとヨシユアは一瞬顔を歪めたけど、何でもないってすつととぼけた。

アタシの明晰な頭脳は真実に近い仮説を立てて、論理的思考で二人を追いつめる。

逃げようとした二人に、エステルにこの事をばらすと脅かしたらお

となしくなった。

アタシはカシウスさんにヨシユアがした誓いの内容を聞き出した。ヨシユアはある秘密結社の暗殺者で、三年前にカシウスさんの命を狙ったが、返り討ちに遭い、家族として暮らすことになった。でも、結社の追手がヨシユアに迫ってきたら、迷惑をかけないため、エステルを守るために姿を消すという誓いをその時したようだ。

「アンタ、バカア！？ 女の子の気持ちを全くわかって無いんだから！ 見捨てられた方は凄い傷つくのよ！」

アタシはそう居ながら、ヨシユアに何回も平手打ちを喰らわしていた。

そして目に少し涙を浮かんできた。

「ヨシユアが迷惑って言うなら、アタシもこの家から出なくちゃいけないじゃない！ もう嫌！ 三回目！」

アタシは、振り下ろした両手をグツと握りしめて、大声で喚いた。

「今までそんなに辛い別れを経験してきたのか、可哀想にな……」

そんなアタシの姿を見たカシウスさんの、優しく呟くような言葉に、アタシは下を向いて消え行くような細い声で答えた。

「うん、ママと、その次はアタシの保護者になってくれたミサトって人……」

カシウスさんはアタシの頭を優しくなでながら、ヨシユアの方に顔を向けて言う。



「ヨシユア、俺たちは女性の心情には鈍かったようだな。あの時の誓いを、撤回してもらうぞ？」

「うん、わかったよ父さん。」

ヨシユアはカシウスさんを毅然とした表情で、しっかりと頷いていた。

もう、大丈夫。女の子を泣かせるなんて、許せないんだからね！

ブライト家には客間が無い。

さすがに放任主義のカシウスも14歳の多感な少年少女を同じ部屋で寝かせるわけにもいかず、シンジ・ヨシユアでヨシユアの部屋、アスカ・エステルでエステルの部屋の組み合わせで寝ることになった。

### 《エステル部屋》

あたしはアスカにベッドを譲ることにした。  
慣れない環境で疲れてるだろうし。

アスカもアスカでベッドに寝ることを当然だと主張した。

あたしはなんて生意気な女だ、とムツとしたが初日から喧嘩はしたくない、とこらえることにした。

あたしたちは無言でさっさと寝ようとしていたけど、しばらくするとベッドの方からすすり泣く声が聞こえた。

あたしは急いでベッドに駆け寄って行った。

アスカは涙を流しながらあたしの方を見て謝る。

「エステル……起しちゃった？　うるさくてごめんね……」

あたしはアスカを傲慢な女だと思っていたけど、それは誤解だと思  
った。

強がっていただけなんだと。

「アスカ、なにかあったの？」

あたしがアスカに問いかけると、アスカは涙声でボソボソと話し始  
めた。

「うん、アタシ怖い夢をよく見るの。ママが目の前で首を吊って死  
んじゃう夢。そしてパパも知らない女の人と一緒にアタシを捨てて  
どこかにいっちゃう。そしてアタシの側から誰も居なくなるの」

あたしは、母親が目の前で死ぬという言葉に驚いた。

アスカはあたしとそっくりだ。

まるであたしの分身だ。

あたしはアスカに自分の過去をさらけ出すことにした。

「あたしも目の前でお母さんがガレキの下敷きになって死んじゃっ  
たんだ。あたしの身代わりになって。あたしも自分が母さんを殺し  
たって思っただけの時もあった。」

目の前でアスカが驚いて息を飲むのがわかる。

たぶん、アスカもあたしと同じことを思ってるんだ。

「あたしは父さんが居てくれたからよかったけど、アスカはずっと  
寂しかったんだね？」

あたしがアスカの手を握って優しく語しかける。

「ねえ、これからはベッドと一緒に寝てくれる？」

するとアスカは涙に濡れた目で、下からあたしを見上げるように上目遣いをお願いしてきた。

あたしは、そんなアスカを可愛いと思ってしまった。

アスカはあたしの妹に決定。

「んもう、可愛いわね。じゃあお姉さんと一緒に寝ましょう」

あたしはベッドの中でアスカをぎゅっと抱きしめた。

アスカはすっかり安心したのか、アタシに笑顔を見せてくれた。

部屋は薄暗かったけど、わずかな月明かりに照らされたアスカの笑顔は綺麗に見えた。

「ふふっ、シンジがあたしにアスカの笑顔をもた見たいって言うたのがわかる気がする。今の笑顔を見せれば、シンジは喜んでくれるわよ」

あたしの言葉を聞いたアスカは顔を真っ赤にして俯いてしまった。そしてぼそぼそと、あたしに言い返してきた。

「エステルだって、いい笑顔してるわよ。ヨシユアがずっと側に居たいって言うてるし」

「ずっと一緒に居るって、姉弟だから当然じゃない」

あたしは平然と、そう答えると、アスカはため息をついていた。何か変な事いったかな。

その後あたしたちは少し窮屈なベッドで眠りについた。

アスカって柔らかいのね、胸も大きいし。  
変な気起きちゃいそう。

# 《ヨシユアの部屋》

「やっぱり僕が下で寝るよ」

僕はベッドに寝ながら、床で寝ているシンジに向かって言う。

「いいよ、ボクが居候させてもらっているんだから」

シンジは僕の言葉を拒否して床に寝転がっていた。  
そして静寂が訪れた。

「まだ、起きてる？ヨシユア」

「起きてるよ、シンジ」

そろそろ睡眠に入ろうと思っていた時にシンジから声を掛けられて、  
返事をした。

「部屋に案内される少し前に、食卓でアスカとヨシユアとカシウス  
さん三人で話していた事、聞いちゃったんだ」

僕はカシウス父さんがワインを飲んで酔った勢いとはいえ、食卓で  
あんな話をしてしまった迂闊さに後悔していた。

「大丈夫。ボクは家に入ろうとしたときに聞こえたから。池で釣り  
をしていたエステルには聞こえていないと思うよ」

シンジの言葉を聞いて僕は安心した。  
誓いの内容をエステルが知ったら傷つくことになるからだ。

「聞かれたら仕方がない。僕は暗殺者として仕込まれた忌まわしきこの力を使つてでも、側で守る事に決めたんだ」

「ボクはただの中学生だ。魔獣と戦ったりする力なんてない。大切なものを守ることすら無理なんだ」

シンジはかなり弱気で震えた声で、そう呟いた。  
僕はシンジに、出来るだけ優しく聞こえるようにこう言った。

「諦めちゃだめだよ。諦めたらそこでおしまいだ。諦めない限りきつとできるようになるよ」

「エステルにも、同じ事言われたよ」

シンジは感心したようにそう答えた。

「エステルは僕の太陽。僕の暗い人生を眩しすぎるくらいに照らしてくれた。だから守るんだ。」

僕は自分に言い聞かせながらそう呟いた。

「ヨシユア、僕はアス力を守るくらいに強くなりたい」

「……じゃあ、遊撃士を目指すといいよ。戦闘訓練とかは、僕や父さんも協力できると思うよ」

「ありがとう」

そう答えたシンジは安心したのか、ぐっすりと寝息を立てて居た。  
僕も寝ようかと思った時、意識を失ってしまった。

シンジが寝静まった頃、ヨシユアの部屋から人影が飛び出した。  
その飛び出した黒髪で琥珀色の瞳の少年は、家から出た後、人気の  
無い道を素早い動きで駆け抜けていく。

その黒髪の少年の琥珀色の瞳の焦点は全く定まっておらず、白目を  
剥いているかのようだった。

少年は目的地に着くと、カッコンと人形のように立って待っていた  
眼鏡をかけた青髪の学者風の青年の前に膝まづく。

「さて、執行者ナンバー13。定時報告をしてもらおうか」

学者風の青年がそう告げると、黒髪の少年は機械的に言葉を紡ぎ出  
す。

「カシウス・ブライトの家に引き取られた子供二人は、先日ヴァレ  
リア湖に墜ちた巨大な機械兵器に深い関係があるとおもわれます」

「ふふ、興味深い報告ですね。彼らの秘密を探り続けなさい。……  
他には？」

学者風の青年は眼鏡をいじって先を促す。

「引き取られた子供二人は互いに依存関係にあるとおもわれます」

ヨシユアのその言葉を聞いた青年は醜悪な笑みを浮かべる。

「何と。それはそれは……。ではその絆を断ち切れば、『人形』を  
作る事が出来ますね。まずは、邪魔なカシウスを引き離す事にしま  
すか」

## 第二話 壊れたマリオネット

《ロレント郊外 ブライト家》

アタシは部屋の外から聞こえてくるハーモニカの音で目が覚めた。  
今までこんなに心地よく目が覚める事は無かった。

やっぱり、安心して眠れたからかな。

エステルも目を覚ましたみたい。

「おはよ。アスカ」

「おはよう、エステル。ハーモニカの音が聞こえて来るんだけど？」

アタシは疑問を口にした。

「ああ、ヨシユアが吹いてるのよ」

アタシとエステルはあまり物音をたてないように部屋を出ると、シンジも部屋から出て、廊下につつ立って居た。

アタシたち三人が庭に出てきた時に、ちょうどヨシユアのハーモニカの演奏が途切れた。

パチパチパチ

アタシたち三人はヨシユアに向かって拍手をしていた。

「いい曲ね」

「本当、感動したよ」

アタシとシンジは素直な感想を述べた。

「星の在り処って曲なんだ。小さい頃から知ってる曲」

ヨシユアが照れ臭そうにそう答えた。

「ボクも、弾いてみたいな」

「シンジも、楽器が弾けるの？」

「うん、チェロだけだね」

「そっか、今度ロレントの街に行ったら探してきてあげるよ」

アタシは、シンジのチェロがまた聴けると聞いて、嬉しくなった。

「ところで三人とも」

ヨシユアは盛り上がっていたアタシたち三人を諭すように言う。

「寝巻のままだよ。着替えてきたら？」

「「「あー！！！」」」

アタシ、シンジにパジャマ姿を見られちゃった。

恥ずかしい。

ヨシユアって結構冷静に的確にツッコミを入れるのね。

あだ名は恐怖のツッコミ男に決定。

シンジには落ち着いた男性になってほしいけど、ヨシユアのこういうところには似て欲しくないな。

シンジとアスカがこの世界に来ての生活が始まった。

今までエヴァンゲリオンのパイロットとして、ネルフ中心の生活を送って居た二人にとってここでの生活は新鮮だった。

朝食前には、体力トレーニングとカシウスの元で戦闘の指導。



エヴァンゲリオンに乗る以外は、至って普通の中学生であったアスカとシンジの二人は、基礎体力から鍛える必要があった。そして朝食当番。

今まで、まったく料理をしようとしなかったアスカも、エステルに小突かれて料理をするようになった。

昼間はエステルが中心となって裏庭の池で釣りを楽しんだり、エステルが森の中で採ってきた虫（どう見ても魔獣の一種）を見せられたり、活発なエステルのペースに巻き込まれていた。

アタシはシンジと二人でテラスの柵に寄りかかって星を見て居た。

「こんなにたくさんの星空……綺麗。ね、シンジ」

アタシは何の気も無しにシンジに話しかけた。

「うん、そうだね……。綺麗だ」

そう答えるシンジは星空を見ていない。

まるでアタシの方を見ているようだ。

ま、まさかアタシが綺麗だっていつてるの？

いやーん。

「ア、アスカ！こ、こんな事を言ったら怒るかもしれないけど、話があるんだ！」

突然顔を真っ赤にして喋るシンジを見てアタシは、こう思った。  
も、もしかして愛の告白……！？  
た、確かにムードは悪くないし。

シンジにしては気が利くわね。

と、アタシの方も頬が紅潮してくる。

そしてシンジから発せられる次の言葉を待った。

「アスカはエヴァに乗れなくて平気なの？」

「はあ！？」

期待はずれのセリフにおもいつきり脱力するアタシ。

思わずシンジに対して罵倒するセリフと手が出そうになるけど、ここは堪えた。

「だって、アスカはエヴァのパイロットになるために十年近くも努力してきたわけだし。前のシンクロテストの時に、ミサトさんがあんな事を言ったから、アスカは無理をしたんだろうつて思ってた」

そう言われて、アタシもその事をすっかり忘れていた事に気づく。

しかし、アタシの心はもうすっかりエステル達のおかげで落ち着いていた。

「確かに、今まで努力してきたセカンドCHILDRENとしての誇りはあった。それはアタシの存在を一人でも多くの人に認めてもらいたかったから。でも、エステルたちはアタシをアスカとして見てくれる。セカンドCHILDRENじゃなくて一人の人間として。アタシを見てくれる。それに気づいたの。…もちろん、シンジもね」

アタシは自然に優しい微笑みを浮かべたと思う。

こっちを見ているシンジの顔が嬉しそうだったから。

アタシはシンジの前に右手を差し出す。

「じゃあ、握手しましょう。誓いの握手よ。これから、お互い遊撃

士を目指してスタートラインに立ったんだから」

今は、友達としての握手で我慢してあげる。  
でも、きつといつかはそれ以上の事をしたい……待ってるよ、シンジ。

それから二年の間、ブライト家の家族、長女エステル、長男ヨシユア、次女アスカ、次男シンジの四人は本格的に遊撃士協会で訓練を受ける事になった。

エステルが筆記の授業をさぼって、スニーカー集めに走ったり、アスカが優秀な成績を修めて、さらには導力技術の開発までしたり。ヨシユアがその才能を報道に発揮し、シンジは料理に強い関心を持っていた。

## 《ロレント 遊撃士協会》

「じゃあ、今日は準遊撃士の最終試験を行っわ」

遊撃士協会でボクたちの指導担当になったのは、ロレント支部の先輩遊撃士、シエラザート・ハーヴェイさん。

ボクたちはシエラさんと呼んでいる。

準遊撃士というのは、遊撃士の見習いみたいなようなもので、16歳以上なら試験に受ければなる事が出来る。

ボクたちの居た世界でも、義務教育期間が終了する年と同じぐらいだし、ボクたちも大人への一步を踏み出したわけだ。

「えー！試験なのー！？」

シエラさんの言葉に対して、エステルが大きな声を上げた。

「エステル、試験が筆記とは限らないよ。……それと、逃げようと思わないでね。」

「うっ。」

ヨシユアの鋭いツツコミが入った。

ヨシユアはエステルの先の行動まで読めるんだなあ。

ボクはアスカの気持ちはまだ読めない。

もう、ボクの事を嫌ってはいないとは思うけど。

「そうそう、今回は筆記試験じゃないわ。実戦よ」

「わあい！早く始めようよ！」

シエラさんがそう言うのと、エステルはとたんに元気になった。

## 《ロレント 地下水道》

### 『実地研修・宝の回収』

あたしたち四人は試験の内容を確認して地下水路に降りて行った。

ヨシユアの索敵能力によって不意打ちを受けることなく、あたしたちは順調に地下水道を進んでいった。

地図を確認して、目的の部屋の前に魔獣の巣があるのを発見した。あたしたちは、魔獣が巣の中で固まってうごめいているのを見て、あたしたち四人の必殺技、『チェインクラフト』を実戦で試してみ

る事にした。

『チェインクラフト』はあたしたち四人で息を合わせて攻撃する技。一定の範囲内の敵に大ダメージを与える事ができるの。

これは、アスカとシンジが戦闘訓練をしていたときに、二人で飛び上がってキックをしてきたのを見て、カシウス父さんがあたしたち四人の訓練メニューにいれたのよ。

「みんな、行くわよ！」

「了解！」「」

あたしの号令の元に、あたしたち四人は攻撃を開始した。

アスカとシンジは導力銃で、一点集中砲火！

その攻撃が命中する瞬間、あたしの棒が標的を突き、ヨシユアが標的を斬り払う！

大きな爆発音が響き渡る。

巢の中に居た魔獣たちは、あたしたちのこの一撃で全滅した。

「やった、やったよ、シンジィー！！」

アスカは飛び跳ねて喜んでいる。

子供っぽいけど、かわいいじゃない。

そして、アスカは目的の部屋に駆けこんで行った。

あたしたちは浮かれるアスカを追いかけて部屋に入った。

部屋には小さめの宝箱が四つ置かれていた。

でも、そのうちの一つは、すでに開封されていた。

先に入ったアスカが、開けてしまったらしい。

宝箱の中には準遊撃士のバッジが入っていたみたい。

アスカはバッジを胸に付け、腰に手を当てて仁王立ちしていた。

残るあたしたち三人は天を仰いでため息をつき、へたり込んでしまった。

「ねえ、アス力。今回の依頼には中身の確認までは入って居ないんだよ。」

とヨシユアにツツコミを入れられたアス力はうなだれた。

地下水路から脱出したあたしたち四人は、うなだれ続けるアス力を引きずるように連れて、シエラ姉の待つ遊撃士協会に向かった。

朝から始まった試験だけど、陽は傾きかけていた。

シエラ姉はあたしたち四人から宝箱を受け取ると、うつむいてるアス力を見た後、あたしたち四人に向かってこう言った。

「みんな、お疲れ様。三人は合格ね。アス力は今回……不合格。理由はわかってる？ 冷静に人の話を聞く事も遊撃士にとっては大事なことよ」

シエラ姉はアス力が謝りもせず黙りこんでいるのを見て、言葉を続ける。

「このままじゃあ、アス力は準遊撃士になれなくて、置いてきぼりになっちゃうわね」

シエラ姉は冗談混じりの一言が、アス力の心の堤防を決壊させたみたい。

「グス……置いてかないでよ……シンジイ、シンジイ……う、う、うわぁーん」

両手で顔を覆って泣き出すアス力。

慌てて抱きしめるシンジ。

シエラ姉と、受付にいたアイナさんは、いきなり泣きだしたアス力

を見て呆然としたみたい。

「ご、合格よ！　そこまで深く反省してるなら二度としないと思うし！　四人とも準遊撃士よ！　だから泣くのを止めて〜！」

とシェラ姉は慌ててフォローしていた。

アタシは、準遊撃士試験に不合格と聞いた時、目の前が真っ暗になるほどショックを受けた。

せっかく、シンジと一緒に遊撃士として歩んで行こうって誓ったのに。

でも、不合格が冗談と聞いてほっとした。

アタシが泣き終わった時、シンジに抱きしめられている事に気がついた。

照れ臭くなって、慌てて離れたけど、シェラさんがニヤニヤした顔でこつちを見ていた。

こりゃ、酒の肴になっちゃったわね。

アタシはため息をついた。

「そうそう、カシウスさん宛てに手紙が届いていたわ」

受付カウンターの奥で、書類整理をしていたアイナさんが、エステルに便箋を渡しているのを見た。

アタシたちは、カシウスさんに準遊撃士になった報告をするため、街の郊外にある家に帰った。

《ブライト家 ダイニングキッチン》

その日の夕食当番はアタシだった。

料理は下手ながらなんとかできるようになったけど、まだ少しシンジに手伝ってもらっていた。

こうしてお揃いのエプロンで居ると、新婚夫婦みたいね。

まあ、エステルとヨシュアともお揃いだけどさ。

シンジって鈍感だから気づいていないんだろうな。

こうしてアタシとシンジが仲良く夕食を作っていると、カシウスさんが部屋に入ってきた。

「急に大きな仕事が入ってな」

カシウスさんはそこで言葉を濁して、探るような視線でアタシの方を見た。

もしかして、アタシが心配でいいだせないのかな。

「アタシは大丈夫よ、パパ」

アタシはカシウスさんを初めてパパと呼んだ。

カシウスさん、これからはパパと呼ぼう、は安心したように話を続けた。

「明日から家を長く空ける事になった。それで俺が引き受けていた仕事をお前たちに任せようと思う。なに、難しい仕事はシエラに任せるからな。保護者が居ないってのはめをはずすじゃないぞ」

アタシはパパに引き取られてからの二年間、アタシたちの事を優先して、仕事を断っているのを知っていた。

……今までありがとうパパ。



## 《ロレント 空港》

翌日の朝。ボクたち四人はカシウスさんを見送りに空港に来た。まだ発車時間まで時間があるようだ。

搭乗ロビーに集まった、ボクたち五人のところへ駆けてくる人がいた。

無精ひげを生やして煙草をくわえている男の人と、ソバカスが印象的な、カメラを持った若い女の人だった。

「カシウスさん、突然出張なんてヒドいじゃないですか。護衛の依頼はどうなるんですか」

リベール通信の記者、ナイアル・バーンズと名乗った男の人は、名刺をカシウスさんに渡しながらそう言った。

「悪い悪い。でも、俺の自慢の家族であり、直伝の弟子である、こいつらが代わりに行く。まだまだ新米の準遊撃士だが、筋はいいぞ」

ナイアルさんは、ボクたち四人が若すぎるのに驚いたみたいだったけど、ニヤリと笑って頷いた。

「カシウスさんの弟子なら、将来有望かもしれないっすね。おい、ドロシー。写真を頼む」

ボクたちブライト家の家族五人は、集合写真をとる事になってしまった。

「はい。楽しい事を考えてくださいねー」

ドロシーさんはカメラを構えながらボク達に話しかける。

ボクはアスカの後ろに立ちながら、ブライト家での楽しい日々を思い浮かべていた。

「はい、いい写真が撮れましたよー」

どうやらオーバルカメラはポラロイドカメラのように、すぐに写真が出てくるものようだ。

ボクはその写真を見て驚いた。

前に居るアスカとエステルのような笑顔が、それに照らされるように明るいボクとヨシユアの笑顔が、カシウスさんの包み込むような穏やかな笑顔が、十二分に表現されていた。

「ドロシーの写真は、なぜか素晴らしい出来になるんだよな」

ナイアルさんも写真の出来に満足したようだ。

ボクはその写真が欲しいと思っていると、後で街の《メルダース工房》で全員分焼き増ししてくれるそうだ。

ボクは宝物を手に入れる事が出来た。

## 《ロレントの街の北方 翡翠の塔》

僕たちは、ナイアルさんとドロシーさんが、翡翠の塔の屋上から風景を撮りたいということで、護衛の依頼で同行していた。

僕たちが翡翠の塔の屋上に着いたとき、物陰に人が隠れている気配がした。

なぜかとても冷たい感じがした。

体も心も震えそうな……。

僕は震えを抑えながら、物陰に居る人物に声をかけた。

「そこに居る人、隠れてないで出てきてくれませんか」

すると物陰から、学者風の青年がゆっくりと出てきた。

「私はアルバ。考古学の研究をしています」

「よく一人でここまで来れたな。魔獣がウヨウヨしているのに」

「いや、魔獣から逃げるのは得意なんですけどね」

ナイアルさんがくわえた煙草をいじりながら問いかけると、アルバさんは穏やかな表情で答えている。

僕はそんな二人の会話を見ているうちに、背筋に寒気が走ってその場から離れたくなった。

僕は後ずさりしながら、屋上の端の手すりに寄りかかり、そのまま動けなくなってしまった。

心配したエステルに気分がちょっと悪いだけだから大丈夫、と言ったら、エステルはしばらく屋上をウロウロしてくると行ってしまった。

アスカとシンジは、塔の屋上の真ん中で不気味な音を立てて動いている大きな機械装置の前に居たけど、アルバさんと一言、話をしただけで、驚いた様子で二人で離れていった。

エステルが動かない僕の所にやってきた。

「ねえ、まだ気分が悪いの？あっちからロレントの街が見えるよ、行こ」

そう言つて、エステルは僕の手を引つ張るけど、僕の体は鉛のように重くて動かなかつた。

アルバさんが僕の方をずっと見ている。

なんて冷たい目なんだ。

もしかして、彼のせいなのか。

アルバさん……彼は危険だ。

一人になったアルバさんは、僕たちの方にゆっくりと近づいてきた。

エステル、逃げるんだ！

でも、全く言葉が出ない。

口の動きまで封じられたのか！

くそっ、動けなかつたら、エステルを守ることができないじゃないか！

目の前のエステルを守れないなんて嫌だ！

僕は体一杯に力を込めた。

### 第三話　そして、幸せが終わる

#### 《翡翠の塔》

僕は体一杯に力を込めた。

すると、苦しいながらも、今までピクリとも動かなかった、自分の体が動くようになった。

僕はエステルの手をとって、その場から離れていった。

そして、気がつくやうに冷たい気配は消えた。

振り返ると、アルバの姿が消えていた。

「おい、あの考古学者ってのは何処へ行っただんだ？」

ナイアルさんは屋上を見回して探しているみたいだ。

「さあ。逃げるのが得意だから、一人で帰ったんじゃないですか」

苦しい言い訳にしか聞こえないけど、僕は作り笑いを浮かべながらそう答えるしかなかった。

#### 《ロレント西郊外　パーゼル農園》

次の日の依頼は、パーゼル農園の畑を荒らす魔獣の退治だった。

パーゼル農園を経営する夫婦の娘ティオは、あたしたちがよく料理の食材を買いに行くので顔なじみだ。

ティオの両親によると、魔獣は日が沈んでから夜明けまでのうちに集団で畑の作物を食い荒らすという。

あたしたち四人は泊まり込みで見張りをする事にした。

あたしとアスカは、夕方から宵の口を、シンジとヨシユアは夜中から夜明けまで分担して見張る事にした。

昼間はシンジとヨシユアはティオの弟妹の相手をしていた。

あたしたちはティオの部屋で、女の子三人のお喋りを楽しんでいた。いつの間にか話題は、ヨシユアとシンジの事になっていた。

「えー、付き合っていないの？ 信じられない」

ティオはあたしたちがお互いを家族としてしか見ていない、と告げると、驚きの声を上げた。

「ヨシユア君は、日曜学校でもモテていたのよ。交際を申し込んで玉碎した子も何人もいるし」

「ふーん。他に好きな子でもいるのかな」

ティオのその言葉を聞いたあたしは考え込むしぐさをして答えた。  
ティオは身を乗り出して、まくしたてるように話を続ける。

「好きな子って意外にすぐに側にいるかもしれないじゃない」

「もしかして、アスカだったり？」

アタシの言葉を聞いたティオとアスカは、うなだれてしまった。

「どこまで鈍いのかしら、エステルって」

「アタシも同感」

あたしはなんで二人がうなだれたのか、わからなかった。

「ところで、アスカの方はどうなの？ 早く告白しないと他の子にシンジ君をとられちゃうよ」

ティオは今度はあたしではなくアスカに詰め寄っていた。

「そ、そうかな、でもシンジに告白して、断られたら不安なの。側に居られなくなっちゃう」

そう答えたアスカの目に涙が浮かんでる。

ティオは慌てて話題をすり替えた。

まったく、アスカはシンジの事になると、泣き虫になっちゃうんだから。

もうそろそろ、あたしたちが見回りに出る時間だ。

ヨシユアとシンジはしばらく部屋で仮眠をとってもらう。

あたしたちは部屋をでて、ヨシユアたちと入れ替わった。

「ヨシユアの恋の悩みなら、相談に乗るからね！」

「はあ!？」

ヨシユアとすれ違う時にそう言ったら、思いつきりあきれ顔をされた。

あたしって頼りにならないのかな。

あたしはアスカと二人で、見て回ったけど、魔獣が現れる気配がなかった。

あたしたちが欠伸を噛み殺していると、ヨシユアとシンジがやって来た。

交代の時間だ。

部屋に戻ると、あたしとアスカは一緒に眠りについた。

ボクはヨシユアと一緒に夜の見張りについた。

ヨシユアは寝れなかったようで、眠そうだ。

エステルにあんな事を言われたのが原因なんだろうか。

ボクも鈍感かもしれないけど、エステルもかなり鈍感だね。

夜明けが近づいてきた頃、巡回していると魔獣の姿を見つけた。

ボクとヨシユアは魔獣が逃げ出さないように、後ろからゆっくりと近づいていったんだけど……。

ボクはつい、足元の小枝をポキリと折ってしまったんだ。

ボクたちが近づいてきた事に気がついた魔獣たちは、逃げようとして、壁に思いつきりぶつかってしまったんだ。

そして、揃って気絶している。

壁に魔獣がぶつかった大きな音に気付いたのか、アスカやエステル、そして農園のみんなまで起きだしてきた。

「みゃあお~~~~っ……」

「みゅ~~~~っ……」

そしてみんなで取り囲んだ後、猫みたいな魔獣は、情けない声で泣きだしたんだ。

「退治しなくちゃダメかな？」

それを見たエステルはそう言いだした。

その言葉に対してヨシユアは、冷静な顔で即答した。

「人を守るのが遊撃士の仕事。魔獣に情けは無用だよ」

でも、農園の子供たちも可哀想だ、と言ってるし。

農園を荒らさないように注意すれば、許してあげてもいいってことで、ここは依頼主の意見を尊重して、エステルが魔獣たちを思いっきり脅かして、しかりつける事で解決したんだ。



ボクたち四人は、依頼が解決したので、一旦家に帰る事にした。

《ロレント郊外　ブライト家》

家に戻ってもヨシユアは落ち込んでいた。  
明るいはずのリビングが暗い雰囲気のまま。  
アタシたちは椅子に腰かけて黙ったまま。  
ようやくヨシユアが重い口を開いた。

「ごめん。みんなに嫌な思いをさせたね」

ヨシユアはさらに早口でまくしたてる。

「僕はあの魔獣を助けようと全然思わなかった。こういう時、自分がたまらなく嫌になる。人として不完全じゃないか、心のどこかが壊れているのかもしれない。いや、すでに壊れていて人形なのかも……」

アタシはヨシユアを思いつきり平手打ちした。  
内罰的な事は大嫌いだ。

アタシは言葉が出ないまま、息を荒くして立っているだけだった。

「ヨシユア、君は人形じゃないよ。一人の人間なんだ。」

と、シンジが囁くような声で優しく励ます。

「この五年間、あたしはヨシユアの事をずっと見てきた！　良いところ、悪いところは誰よりも知っている自信がある！　たぶん、ヨ

シユア本人よりもね！　あたしを差し置いて、勝手な事いうんじゃないわよ！」

エステルもテーブルを激しく叩いて怒って叱り飛ばした。

ヨシユアはエステルたちの言葉が嬉しかったのか、笑顔を取り戻し満面の笑みを浮かべると、突然椅子から落ちて倒れこんだ。

慌ててみると、穏やかに寝息を立てている。

まったく、驚かさないでよね。

## 《ロレント　市長邸》

今日の依頼は、カシウスパパから頼まれた、三つの依頼の最後の依頼。

マルガ鉱山で採れたという、翠耀石の大きな結晶を市長邸まで運んできてほしいとのこと。

その後、アタシたちはマルガ鉱山に行つて鉱山の親方と面会して、結晶を持って、ロレントの市長邸へ戻つて来た。

市長邸に行くと、来客中のようなだった。

四人で押し掛けるのも迷惑になると思ったので、結晶を渡すのはエステルとヨシユアに任せて、アタシとシンジは街の食事処<sup>アイベント</sup>で待つ事にした。

エステルとヨシユアは、なにやら話ながら帰つて来た。

「いい子だったわね。良いところのお嬢さんっぽいのに、それを鼻にかけたところがないし」

どうやら、エステルは市長邸で、ジョゼットと言う女学生に会ったらしい。

「アスカとも友達になれるわよ」

エステルは上機嫌だけど、ヨシユアは何か上の空と言った様子。

「もしかして、ジョゼットに一目惚れとか？ ああいつのがタイプなんだ」

エステル、それは違うわよ。  
シンジもそう思ってるに違いない。

「まあ、エステルみたいに、野次馬根性と、直情的性格丸出しじゃない事はたしかだね」

うわっ、ヨシユアのツッコミがいつもよりキツイ！

# 《ロレント 遊撃士協会》

ボクたちがカシウスさんから受けた最後の依頼の報告をしていると、血相を変えた市長さんが、飛び込んできたんだ。

「大変じゃ！ 家の結晶から金庫が盗まれた！」

市長さんはかなり慌てている様子だった。

犯人はタイミングからして、エステルが会ったジョゼットって子に違いない。

ヨシユアも怪しいと思っていたようだ。

エステルと市長さんは、人がいいのか、信じられない、と言った顔

をしていた。

問題は、彼女の行き先だ。

「そういえば、こんな木の葉を拾ったんじゃが」

と、市長さんは木の葉っぱをとり出した。

ボクは、その葉っぱに見覚えがあった。

料理で香りづけに使ったりする、セルベの葉だ。

「じゃあ犯人は、南の森のミストヴァルトにいるのね？」

ボクの推理を聞いたシェラさんは、同行すると言ってくれた。

## 《ロレント南 ミストヴァルトの森》

ミストヴァルトの森の入口に着くと、シェラさんが複数の人間が通った形跡があると断定。

ボクたちが森の奥へ進んで行くと、森の奥から話声が聞こえた。

エステルによると、女の子の話声はジョゼットみたいだ。

森の奥のセルベの大木の前にある広場では、ジョゼットと、その手下らしき男たちが話している。

こちらには気づいていないようだった。

ボクたちは話の内容を聞き出そうと、茂みに身を隠しながら接近した。

すぐに怒って飛び出しそうになるエステルを、ヨシユアは抑えている。

そんな事も知らずに、ジョゼットは話を続ける。

「特にあのバカ女！　ボクの事を疑いもせずに『友達になれそう』だって！　頭空っぽみたいな笑顔浮かべちゃってさ！」

ジョゼットたちはそう言って大笑いする。

その言葉を聞いた、ボク以外の三人の周囲の温度がおかしくなった気がする！

「なんだって！」

「あんですつて〜！」

「なんですって！」

エステルとアスカよりも、ヨシユアが先にキレルなんて！

でも、自分の好きな笑顔をバカにされたんだから、怒るのは当然だよね。

よし、ボクも続けて戦闘に参加するぞ！

と思って隠れていた茂みを飛び出したけど、目の前には凄く鋭い眼をしたヨシユアが、『漆黒の牙』でジョゼット一味に凄く勢いで斬りつけていた。

アスカとエステルも真っ赤な顔をして、ボコボコになっている。

特にエステルが振り回した棒で、銃弾を跳ね返すのを見たときは驚きが止まらなかった。

ボクが止めに入った時は、ジョゼット一味は氣を失って倒れていた。無抵抗でもまだ暴れ足りないみたいだ。

「や、やめなさい三人とも、それ以上やったら、死んじゃうわよ!」

シェラさんが大声をだして止めるけど、まだ三人の動きは止まらない。

「仕方ないわね……『エアロストーム!』」

シエラさんが得意とする風の魔法で、三人とジョゼット一味とボクはまとめて空中に飛ばされたんだ。  
なんでボクまで……。

地面にたたきつけられた三人は、やっと落ち着きを取り戻したみたい。

「遊撃士としての冷静さが足りないわよ!」

シエラさんに、そう説教を受けていた。

三人は正座させられて、しよげ返っていた。

ボクはその時、その場にジョゼットたちの姿が無いのに気づいた。

「……あの、飛ばされた後、みんな逃げちゃったみたいなんですけど」

「しまったあああ!私とした事が!」

ボクが説教中のシエラさんに声を掛けると、シエラさんの叫び声が、ミストヴァルトの森に響き渡った。

結局ジョゼットたちは捕まらなかった。

一人だけ冷静だったボクは損した気分だ。

## 《ロレント郊外　ブライト家》

次の日の朝、アタシたちは異変に気がついた。

窓の外が濃い霧で覆われている。

ロレントで霧が発生するのは珍しいけど、ここまで濃い霧は初めてなんだって。

霧はお昼になっても消える事はなかった。

このままだと、飛行船も飛べなくなるし、霧で迷子になってしまう人も出てくる。

アタシたちが遊撃士協会に集まって対策を考えていると、街の人から、街の中で眠ってしまつて起きない人が居る、つて報告を受けたの。

アタシたちの聞き込みの結果によると、眠りこんだ人の近くで鈴の音が聞こえたみたい。

「霧と鈴：まさかね」

その報告を聞いたシエラさんは唇に指を当てて呟いた後、重い口を開いてシエラさんの昔の事を話し始めたの。

「もしかして、ルシオラ姉さんの仕業かもしれない」

シエラさんはゆっくりとルシオラについて語り始めた。

彼女は鈴を使った幻術が得意で、幻でありながら五感までも支配する力を持つ事。

彼女は、昔、サーカス団『ハーヴェイ一座』に身を寄せ、シエラさんを妹として接してきた事。

団長の死により一座が解散した後、妹分であつたシエラさんを残して「やる事がある」と姿を消した事。

残されたシエラさんは、カシウスパパを頼つて、遊撃士になったらいいの。

このルシオラさんの事はヨシユアも知らなかったみたい。

エステルは小さい頃にハーヴェイ一座がロレントに来た時に、ちょっとだけ会つた事があるみたい。

その時のルシオラさんは、団長さんと一緒に優しく話しかけてくれたんだつて。

好きな団長さんが死んで人が変わってしまったのかな。

アタシもシンジが居なくなったら……。

イヤ。考えたくない。

アタシたちは霧の発生源を調べる事にした。

ロレントの東西南北の霧の範囲を調べた結果、ミストヴァルトの森が怪しい、という結果になった。

シエラさんはルシオラさんがそこに居るなら絶対に会いたい、と言う事で今回もアタシたちに同行する事になった。

### 《ロレント南 ミストヴァルトの森》

アタシたちがついたとき、ミストヴァルトの森は濃い霧に包まれていた。

森の中ほどまで進んだ時、濃い霧が完全に視界を遮り、音も聞こえなくなってしまった。

近くに居るシンジの顔も見えなくなったとき、アタシは鈴の音を聞いた。

いけない、と思った時、アタシは眠るように意識を失った。

### 《第三新東京市 コンフォート17 アスカの部屋》

「アスカ！！起きろよいい加減に！！」

「！？」

アタシは自分の部屋で目が覚めた。



「なんだ、ケンスケか……」

「なんだとは何だよ！？それが幼馴染に捧げる感謝の言葉か？」  
「着替えるんだからさっさと出てってよ！」

ハイハイと、ケンスケは部屋を出ていく。

アタシが着替えを終えて部屋から出ると、台所ではアタシのママが皿を洗っている。

「アスカったら、いつまでケンスケくんを迎えに来てもらうのかしら、しょうのない子ね、あなたも新聞ばかり読んでないでさっさと支度してください」

テーブルで新聞を読んでいるのはアタシのパパ。

「君の支度はいいいのか」

「はい、いつでも。もう会議に遅れて冬月先生にお小言いわれるのは私だけなんですよ」

「君はモテるからな」

「じゃあキョウコおばさん、行ってきますー！」

「行ってきます」

アタシはケンスケに背中を押されて玄関を出た。

「そうそう、今日は学校に転校生がくるらしいぜ」

「ここも来年遷都されて首都になるものね」

「可愛い子だといいなあ」

「もう」

アタシとケンスケは通学路を走って行く。

今朝、何か夢を見たようだけど忘れちゃったわ。

「はあく遅刻、遅刻く！ 転校初日から遅刻ってかなりやばい感じよねく」

道の向こうから、パンを加えた女の子が走ってきて、ケンスケとぶつかった。

そして、アタシはいつものように学校生活を送った。

アタシは学校の部活動を終えて、家に帰った。

あたりはすっかり暗くなっていた。

玄関のドアを開けると、いつものようにママが優しく迎えてくれる。

「今日は、アスカちゃんの好きなハンバーグよ。さあ、うがいをして、手を洗いなさい」

アタシは、はあいと返事をして、手を洗う。

学校では、ケンスケを怒鳴り散らしたり、ラブレターを踏みつけたり、気に入らない事があると、すぐに手が出ちゃったりするけど、ママの言う事は素直に聞くんだ。

アタシ、ママが大好きだから。

夕食はいつも、ママとパパと三人で楽しく過ごす。

テーブルの上には、大好きなハンバーグ。  
あれ？

「アスカちゃん、どうしたの？」

食事の手を止めたアタシに、ママが心配そうな顔で話しかけてくる。

「うっん、何でも無いの。」

アタシはそう答えて、ハンバーグを食べ始める。

おかしい。もつと大きなハンバーグが欲しいな、と思う。

「アスカちゃん、お風呂が沸いたわよ」

アタシはお風呂が大好きだから、飛ぶようにお風呂に向かった。  
浴槽に入る。温い。

アタシはもつと熱いのが好みだったはずだ。

アタシ好みのお風呂の温度？

おかしい。夕食の時から何か違和感を感じる。

#### 第四話 断てない思い、断つ思い

《第三新東京市 コンフォート17 アスカの部屋》

アタシは、お風呂から上がった後、アタシの部屋の向かいにある、物置部屋の事になった。

アタシのパパとママは同じ寝室で寝ているから、一部屋余るのだ。特に用事も無いのに、アタシはフラフラと物置部屋に入って行った。物置部屋の中にあつたチェロが、アタシには気になった。

ダイニングキッチンでワインを飲んでいたパパに聞いても、パパのものじゃないし、ママのものでもないって言うのよね。それなら一体誰のものなんだろう。

アタシはチェロを持って、そんな事を考えてると、突然アタシの手が勝手にチェロを弾き出したの。

アタシはチェロを全然弾けないのに……。

アタシはチェロを弾いているうちに、この曲の事を思い出した。

この曲は、シンジがアタシに聞かせてくれた曲だ！

アタシは涙を流しながら、曲の演奏を続けた。

そして、演奏が終わる。

パチパチパチ

拍手の音に振りかえると、そこにはママが立っていた。

マンシヨンの自分の家に居たはずなのに、いつの間にか周りには白い霧が広がっている。

「アスカちゃん、あなたはとても大切な人をみつけたのね」

ママは穏やかに微笑んでくれた。

「うん、ママ。ママ以外にも、アタシを見ってくれる人を見つけたよ」

ママは涙を流して喜んでくれた。

「よかったわね。さあ、その人の待つ世界へ帰りなさい」

ママの姿が霧に溶けていくように薄れていく。

「ありがとう、ママ。アタシ、ママに会えてよかった」

アタシは消えていくママに向かって、そう声をかけた。

「ううん、正確には私はアスカちゃんのママ本人じゃないの。アスカちゃんの心が生み出した幻なのよ。でも、幻でも、私はあなたを見守っているわ」

アタシは消えてしまったママの声を最後までなんとか聞き取ることができた。

ボクたち四人は、ほぼ同時に目覚めた。

ボクは父さんと母さんと、家族で海に行く夢を見て居ただけど、そこで溺れかけていた女の子の手をつかんだことで、アスカの事を思い出して、夢から脱け出せたんだ。

ルシオラさんの幻術は、幸福な夢の中に閉じ込める事なのかもしれない。

ボクたち四人が目を覚ますと、すっかり霧も晴れていて、他の三人の姿や、前にあるセルベの大木の側に居るルシオラさんの姿が見えたんだ。

ルシオラさんは、目を覚ましたボクたち四人の姿を見ると、ポツリ

と呟く。

「作戦は、失敗したようね。あなたたちも、永遠に夢の中に居れば、辛い目に会わずに済むのにね」

ルシオラさんが結社の一員であるなら、気が進まないけど、倒さなければならぬのか……。

ボクは悲しげな瞳のルシオラさんを黙って見つめていた。

「では、ごきげんよう。また会いましょう」

するとルシオラさんは、また霧のようなものを身に纏い始めた。

「ふざけるな！　なぜ僕と戦わない！　結社は、アルバ教授は何をたくらんでいるんだ！」

ヨシユアは戦おうとしないルシオラさんに向かって、普段の冷静さを失った表情で叫んでいた。

「人類補完計画……」

ルシオラさんはそう呟いて、完全にその姿を霧に変えた。

## 《ロレント　遊撃士協会》

アタシたちが街に戻ると、霧はすっかり晴れて居た。眠っていた街の人たちも、意識を取り戻したという。アタシたちは街の人たちから感謝された。

犯人のルシオラを逃がしたのは残念だったけど。

「あんたたちは十分よくやったわ」

シエラさんは、アタシの頭を撫でて、励ましてくれた。

「アイナ、そろそろ推薦してもいいんじゃない？」

シエラさんはカウンターに居るアイナさんにそう声をかけた。

「ええ、私もそうおもいます」

アタシが何の事だろうと疑問に思っていると、アイナさんは、エステルに紙を手渡していた。

「これは、ロレント支部の正遊撃士資格の推薦状よ。今のあなたたちは、準遊撃士だけど、正遊撃士になるためには、王国のすべての地方の支部から推薦を受ける必要があるの」

シエラさんはあたしの肩に手をかけて、ニッコリと話しかけてくれた。

「あなたたちは、ロレント支部において正遊撃士になるだけの力があるって認められたのよ」

アタシはとても嬉しかった。

今までネルフのテストで高いシンクロ率を出しても、使徒を倒しても、それで当然と褒められる事はなかったから。

ジリリリリリリ…

通信機が鳴る音が響いた。

アイナさんはその話の内容に驚いた様子だった。

アイナさんは通信を切ると、言い出しにくそうに、重い口を開いた。

「通信はボース支部からよ。ボース支部で飛行船《リンデ号》が消息をたつたの。乗っていた乗客たちの安否は不明。乗客名簿の中には、カシウスさんの名前もあつたそうよ」

アタシはショックを受けた。

実の娘であるエステルは、きっと、もっとショックを受けてるだろうと思った。

「よっしゃ！ボース地方に行って、父さんを助けに行くわよ！」

アタシが心配してエステルの方を見ると、握りこぶしを突き上げて言った。

「エステル、君は落ち込まないというか限りなく前向き思考と言うか……」

ヨシユアは苦笑しながらそういった。

お父さんが心配なのに、空元気でもいつも前向きに振る舞える

エステルの輝きの強さに、アタシは太陽を思い浮かべた。

アタシも太陽みたいになれるのかな……。

## 《ボース 遊撃士協会》

ボース支部の受付では、ルグランさんというおじいさんがボクたちを迎えてくれた。



カシウスさんの事が気になって、ボクたちに行きついてきたシェラさんとは知り合いみたいだ。

さっそく、ボクたちは例の飛行船消失事件について話を聞こうとするけど、搜索に当たっている王国軍の情報統制で、遊撃士協会にはまったく情報が入ってこないみたい。

しかし、情報を手に入れる手段がないわけではない、とルグランさんは話を続ける。

市からの調査職員ということにすれば、情報収集の口実が得られると言う事で、ボクたちは市長さんに職員にもらうように、市長さんに会いに行く事にした。

市長邸に行くと、市長さんは留守だった。

教会にお祈りに行ったと執事さんが言っていた。

「サボリです。……私に二人分お祈りするように命じてどこかへ行つてしまいました」

教会に行くと、そこにも市長さんの姿はなくて、その場に残されたメイドさんが、ちょっと怒った様子で立っていた。

ボクたちは困った。ボースの街はロレントの二倍ぐらい大きい街だ。大きな街の門にエステルは驚いていたし。

ボースはリベル王国一の商業都市。

とりあえず、市長さんを探して、まず初めにこの街の名所である《ボースマーケット》に向かう事にした。

《ボースマーケット》は飛行船の事件のせいでいつもより活気がなかったけど、デパートの地下みたいに、様々な店が立ち並んでいた。アスカとエステルはロレントではあまり見られない外国ブランドの洋服を熱心に見ていた。

ボクはロレントの街でアスカが買った、クリーム色のワンピースがあればいいと思うけどね。

エステルは前はスニーカーにスパッツと言う男っぽい服装をしてた

けど、アスカに会ってからスカートを穿くようになったとか。  
ボクはボースマーケットに集められた食材の多さに夢中になってしまっていた。

ボクが八百屋の側に近づいたとき、女の人が店主を叱り飛ばしているのを見た。

後ろにはあの教会で会ったメイドさん、リラさんが立っている。

じゃあこの女の人が市長さん？

ボクたちに気がついた、メイドのリラさんは市長さんにボクたちを紹介した。

ボクたちは高級レストラン《アンテローゼ》で、詳しい打ち合わせをする事にした。

市長さんの話では、市長さんは軍の責任者であるモルガン將軍とちよつとした知り合いであり、市長さんの使いとしていけば、情報を教えてくれるだろうということだ。

ただし、モルガン將軍は遊撃士がかなり嫌いみたいだから、ボクたちが遊撃士だとはれないように気をつけないといけない。

ボクたちが話を交えながら食事を続けていると、店の一角が騒がしくなった。

どうやらお店の高級ワインを飲んだけど、代金を払えない男の人が居たらしい。

その男の人は、店の従業員の人に詰め寄られても、涼しい顔をしている。

傍らにはリユートが置いてあつて、外国のブランド品に身を包んだ、優雅な感じの金髪の男性だ。

市長さんはこれ以上騒ぎを大きくしたくないのか、その男の人が一曲披露することで、代金をチャラにする事に。

市長さんはこのレストランのオーナーだったんだって。

男の人は旅の演奏家、オリビエ・レンハイムと名乗って、リユートを弾き始めて、歌詞を歌い出した。

さすが演奏家を自称するだけあつて、演奏は上手かった。

演奏が終わると、オリビエさんはアスカに近づいて口説き始めたんだ。

アスカは今も可愛いけど、ここ二年のうちにぐつと美人になった。背はボクの方が高くなったけど、体つきもさらに女らしくなった。綺麗な金髪の髪と宝石のような青い瞳は強く人を惹きつけるだろう。ボクは気障つたらしい言葉で口説き続けるオリビエさんを睨みつけていた。

アスカも外面だけで声をかけて来るような男性は好きにならないはず。

多分、そうだと思う、けど。

オリビエさんはアスカに馴れ馴れしく近づいてくるけど、シェラさんが割って入って離れていた。

本当はボクが割って入りたいんだけど、まだアスカの彼氏じゃないからね……。

残念だけど……。

## 《ボース北 ハーケン門》

アタシたちはモルガン將軍の居るハーケン門に行く事になった。

オリビエって男は、アタシたちが断つてもついてくる。

今はシェラさんがオリビエが近くに寄らないように見張っているから露骨に近づいて来ないけど、正直うっとおしい。

モルガン將軍は、飛行船は空賊の一味に奪われて、空賊の一味から犯行声明文と身代金要求が送られて来た事を教えてくれた。

でも、怪しんだモルガン將軍は、アタシたちが遊撃士だという事を見抜いてしまったの。

「身分を隠して情報を盗み出そうとするとは、そういう姑息な真似

をするから、遊撃士など信用できんだ！」

「いい加減にしなさいよ、このケチジジイ！」

怒るモルガン將軍に、シエラさんが逆ギレしてしまった。

こりゃ、収まりがつかなくなっちゃったな、どうしようと思つてみると、オリビエがリユートを片手に歌い始めた。

オリビエの歌が終わった時、シエラさんとモルガン將軍は、たがいに怒る気をなくして、アタシたちはモルガン將軍の部屋から追い出されるだけで、お咎めを受けずに済んだ。

アタシはオリビエの事を少しは見直してあげた。

だから、オリビエにお礼を言ったの。

そうしたら、オリビエは、アタシに話があるって。

アタシが着いていくと、オリビエはアタシの両肩をつかんで、キスをしようと顔を近づけて来た。

「助けて、シンジ……」

アタシはオリビエの唇が触れる直前に小さな悲鳴を上げて涙を流してしまった。

オリビエは驚いてアタシから離れた。

「すまなかった」

と言つて、シンジたちが居る所へ駆けて離れていった。

その後、アタシの涙の跡を見つけて、シエラさんはオリビエを激しく叱りつけていた。

エステルとヨシユアはアタシを心配してくれている。

シンジは酷い顔をして、オリビエを睨みつけていた。

シンジは嫉妬してくれているのかな？

でも、シンジのそんな顔は嫌だよ。

アタシが大丈夫だと笑いかけると、シンジはやつと穏やかな表情に戻ってくれた。

# 《ボース ラヴェンヌ廃坑》

あたしたちは、街での情報収集の結果、ラヴェンヌ村の上空で大きな黒い影が目撃されたと聞いた。

「しらみつぶしに全部探せばいいのよ！」

あたしは、この情報を聞く前に、そうやってやったら、みんなに呆れられた。

アスカの提案で、この街にたまたま滞在していた記者のナイアルさんと空賊の事件に関して情報取引をして、証言を聞き出すことができた。

うんうん、アスカはあたしの自慢の妹ね。

目撃者はラヴェンヌ村の子供だった。

でも村の他の住民は誰一人大きな黒い影を見かけていないので、誰にも信じてもらえなかったようだ。

あたしたちは、村の北にあるこの廃坑が怪しいとやってきた。

廃坑の入口はしっかりと施錠されていて、最近人が出入りした様子はなかった。

でも、あたしは奥から風が吹いているのを感じた。

「もしかして、どこか広い空間に通じているのかもしれない」

あたしが風の事を言うと、ヨシユアがそう言った。

「空賊は空から出入りしているから、入口に足跡が残って無くて、居ない証拠にはならない！」

シンジが閃いたとばかりに、そう言葉を続けた。

ナイス推理、シンジ。

『三人寄れば文殊の知恵』ってやつね。

あたしたち四人姉妹兄弟にかかれれば解けない謎は無い！

あたしたちが奥に進むと、昔露天掘りをしていた広場に出た。

そこには奪われた飛行船と、空賊の小型飛行船があった。

そして、荷物を積み替えるように空賊に指示している、ジョゼットを見つけた。

「げ、なんであんたがここに！」

あたしの姿を見て驚いたジョゼットは、いきなり煙幕弾を打ち出した。

あたしたちが煙に驚いている間に、ジョゼット一味は小型飛行船に乗って逃げていった。

一回も戦わずに逃げを打つなんて、あたしたちも随分と恐れられたものね。

飛行船の中には乗客は居なかった。

空賊のアジトに連れ去られたみたい。

どうしたものかと、あたしたちが考えていると、飛行船の外からたくさんの人の声が聞こえてきた。

あたしたちが外に出ると、すっかり王国軍に取り囲まれていた。

「まさか、おぬしらが空賊と結託していたとは思わなんだぞ」

そう言つて姿を現わしたのは、モルガン將軍だった。

あたしは犯人じゃないって必死に訴えたけど、聞いてもらえなかつ

た。

「アタシたちは、犯人じゃないよ……グスッ」

あーあ、ついにアスカが泣きだしちゃった。

連行しようとした王国軍の兵士たちはオロオロしている。

モルガン将軍が兵士たちを落ち着かせようとしているけど、効果が無い。

アスカは両手で顔を覆って大泣きしてる。

まるで、モルガン将軍が悪者になったムードが漂ってる。

「こ、これだから遊撃士は困る……引き上げだ！」

モルガン将軍は、顔を赤くしてそう呟いて立ち去ってしまった。

結局あたしたちは、その場で釈放された。

兵士さんの話では、モルガン将軍にはお孫さんの女の子が居るみたい。

## 《ボース 遊撃士協会》

厳重注意をされた僕たちは、空賊事件に関しては、王国軍の人に任せるしかなかった。

しばらくした後、王国軍によって空賊のアジトが突き止められ、乗客は全員無事に救出された。

だけど、救出された乗客の中に父さんの姿はなかったんだ。

乗務員の人の話によると、ボースから離陸する前に降りたらしい。

父さんならこの空賊事件も放っておかないはずなのに。

ルグランさんは、この事件の主犯とされる空賊一味、《カプアー家

《に疑問を持っているようだった。彼らは窃盗などの小さな事件は起こしていたが、今回のような大きな事件を起すとは考えられないと。僕は結社が関わっているのかと思うと、気分が悪くなって一人で外に出た。

## 《ボース 空港》

僕はいつの間にか空港に来ていた。今まで空賊事件により運休されていた空港は、まだ飛行船がラヴェンヌ又廃坑で修理中のため人氣が無い。僕が一人で佇んでいると、エステルがやって来た。エステルは、『星の在り処』をハーモニカで吹くように頼んできた。僕は吹き終わると、エステルに呟いた。

「相変わらず、何も聞かないんだね」  
「だって、なんか、どーでもよくなっただし」

エステルはけろりとしてそう答えた。

「どうして、何も聞かずに一緒に暮らせたりするんだい？ あの日、父さんに拾われた得体の知れない子供を……どうして君たちは受け入れてくれるんだい？」

僕はさらにエステルに問いかけた。

「あたりまえじゃない。家族だから。あたしは父さんの過去だって、全部知ってるわけじゃないのよね。でも、あたしと父さんは家族で



あることに変わりはないじゃない？ 多分それは、父さんの性格とか、クセとか、料理の好みとか。そういった肌で感じられる部分をあたしがよく知ってるからだと思う。ヨシユアだって、それと同じよ」

エステルは極上の笑顔でそう答えてくれた。

「さあ、アスカとシンジも待ってる。帰りましょ」

僕も笑顔でエステルの後をついて行った。

## 《ボース フリーデンホテル》

ボクたちはカシウス父さんの消息を掴むため、しばらくボース地方に滞在することにした。

ボクたちがホテルの部屋で休んでいると、ものすごい大きな破壊音と、街の人たちの悲鳴が聞こえてきた。

ボクたちが驚いてホテルから出てみると、街の中心にあるボースマーカーットの屋根に、大きな竜が着地していた。

その竜の側に、背丈ほどもある大きな剣を背負った銀髪の青年が立っていた。

その人は何もせずに、じっとこちらを見ているだけだったけど……。

「レーヴェ兄さん!？」

ボクの隣に居たヨシユアはその人の事を見て、驚いて声を上げたんだ。

その声を聞くと、その人は口の端だけを歪ませるように微笑んで、

大きな竜の背中に飛び乗って、そのまま振り返りもせずに竜に乗って飛び去って行った。

ボクたちは呆然と見送るしかなかった。

ボクはヨシユアに、竜の背中に乗って行った男の人の事を聞いた。ヨシユアは、彼は結社の執行者の一人だ、としか教えてくれなかった。

結社の執行者を放って置くわけにはいかないので、ボクたちは竜が飛び去った方向から検討を付けて、霧降り峡谷へ向かった。

ボクたちが目撃した竜は、『古竜レグナート』と呼ばれる竜だった。竜は十数年前に目撃されて以来、姿を見せなかったらしいけど、結社がどういう形で関わっているんだろう。

### 《古竜の住処》

僕たち四人は古竜の住処と呼ばれる、巨大な鍾乳洞の一番奥の巨大な広間に辿りついた。

ここに古竜レグナート、そしてレーヴェ兄さんが居る。

僕の予想通り、古竜レグナートとその側にレーヴェ兄さんが立って待ち受けていた。

「久しぶりだな、脱走者のヨシユア。俺はお前だとはいえ、手加減はしないぞ」

僕たち四人は父さんに鍛えてもらったとは言え、まだまだ未熟者の遊撃士だ。

特に結社の執行者として改造された僕と違って、他の三人は素人に近い。

古竜と剣帝を同時に相手にしたら無事では済まない。

どうすればいいんだ……。

僕の全身に冷汗が浮かんできた。

「どうした？ 戦う気が無くてもこっちから行くぞ」

レーヴェ兄さんがそう言つて、大剣に手をかけた。

「待て！ 僕が相手をする！」

僕は反射的に叫んでいた。

「お前が『剣帝』の俺に正面から戦いを挑んで、勝てると思うのか？」

そうだ。僕の特技は暗殺。

不意を打たないと勝ち目はない。

でも、エステルたちを巻き込むわけにはいかない。

「いいだろう。その一騎打ち、受けた！」

レーヴェ兄さんは古竜レグナートを押し止め、ゆっくりと前へ歩いて来た。

それに応じて僕もエステルたちを止めて前へ歩いていく。

僕の懷に飛び込んでの短剣での一撃は、レーヴェ兄さんの大剣に弾かれてしまった。

今度は僕は、背後から回り込もうと、素早い動きでレーヴェ兄さんの周囲を回る。

また間合いに入った時に弾き返されてしまった。

僕はレーヴェ兄さんにダメージを与えられない。

それに対してレーヴェ兄さんは僕に小さな刀傷を負わせていく。

「さあ、もういいでしょう。壊れた人形の始末をしてしまいなさい」  
広間の奥の物陰から、アルバ教授が出てきてそう言った。  
なぜ、あの男がここに……？ 一体いつから？  
久しぶりに会うアルバ教授は、最初であつた時の穏やかな表情とは  
似つかない、凶悪な人相を浮かべていた。

「ヨシユア君。いえ、執行者ナンバー13。あなたの役割は終わりました。御苦労さま。解放してあげましょう」

アルバ教授がパチンと指を鳴らすと、僕の頭に記憶が蘇って来た。  
アルバ教授、いや、ワイスマンに父さんについて報告する僕の姿が。

「ヨシユア君。あなたの任務はカシウスの暗殺ではない。カシウスの監視ですよ。あなたはずっとカシウスの動向を無意識のうちに報告し続けた」

ワイスマンの冷酷な声が聞こえる。  
そうだ、僕はずっと父さんを、エステルを、シンジとアス力を裏切り続けていたんだ！

「嬉しいでしょう。これからはエステル君たちと一緒に暮らせるのですから」

ワイスマンの言葉が続く。

「あんた、ひどいじゃない！ そんな事を言ってヨシユアと一緒に暮らせるわけ無いじゃない！」

エステルの怒鳴り声が聞こえる。  
でも、僕はずっと動けないでいた。

「観念したようだな」

レーヴェ兄さんが、剣を構える。

僕はエステルたちの方に振り向いて、こう言った。

「今までありがとう。さようなら」

## 第五話 守るべきもの

ヨシユアはボクたちの方に振り向いて、とても悲しそうな表情で、こう言った。

「今までありがとう。さようなら」

ヨシユアの後頭部に剣を振り下ろそうとするレーヴェさん。

「イヤアアアア！」

エステルのかげり声と同時に、ボクは耐えきれなくなって、導力銃の引き金を引いた。

ボクが放った弾は、レーヴェさんの剣に弾かれた。

レーヴェさんはボクに目を向けて、問いかける。

「お前はなぜ邪魔をする。死にたいのか」

「ボクはヨシユア・ブライトの弟、シンジ・ブライトです！」

ボクは銃を構えたまま、大きな声でそう言った。

その言葉に反応したヨシユアは、飛び上がってレーヴェさんから間合いをとって、こう言った。

「僕は過去の結社の呪縛を断つ！ 断てない大切な人との今の絆があるから！」

「ま、またしても私に逆らうのですか、この人形め！」

アルバ教授は金切声をあげる。

すると、レーヴェさんは跳躍してアルバ教授を切りつけた！

黒い障壁がレーヴェさんの剣を一瞬阻む。

黒い障壁は一瞬で消えたが、レーヴェさんの剣速を鈍らせるのには十分だったようだ。

剣はアルバ教授を切り裂いたが、致命傷は与えられなかった。

「おのれ、だが実験は成功だ！ 覚えてろおお！」

アルバ教授はそう叫ぶと、転送の魔法でその場から消えた。

アルバ教授の姿が消えた後、ボクたち三人はヨシユアの元へ近づいて行った。

「ごめん。何と言って謝っていいか、分からないんだ」

「笑えばいいとおもうよ」

ボクがヨシユアに向かってそう言つと、ほっとしたように柔らかな笑顔を見せてくれた。

「ヨシユア、やっとしがらみを振り切る強さを見せたな。……でなければ、俺はワイスマンを止めなかった」

レーヴェさんが近づいてきた。

顔には心なしに優しい笑みを浮かべている。

「みんな、そう警戒しないで。これから、レーヴェ兄さんについて話すよ」

そうヨシユアが喋り出した時、凄まじい咆哮が洞窟内に木霊した。しまった！古竜レグナートが動き出した！

レーヴェさんは、素早く剣を構える。

「マズイな、俺が相手になると、奴も俺も無事では済まなくなる」

古竜レグナートは怒り狂った様子でこちらに顔を向けて来る。  
そして大きく息を吸い込んだ。

「炎のプレスなんか吐かれたら、アタシたち仲良く丸焦げじゃない  
！」

アスカはそう言ってボクに抱きついてくる。

ちくしょう。せめて、丸焦げになる瞬間までアスカを抱きしめていよう。

ボクはぎゅっと目をつぶってその瞬間を待った。

だけど、また竜の咆哮が響き渡ったんだ。

目を開けるとカシウスさんが持っていた棒で、向う脛を思いっきり叩いていた。

暴れていた竜は痛みによって冷静さを取り戻したみたいだ。

「……久しぶりだな。人の子よ」

驚くことに古竜レグナートはカシウスさんに人間の低い声で話しかけている。

「もうまったく父さんは、おいしいところだけとるんだから！」

エステルは、言葉とは裏腹に嬉しそうだ。

ボクは抱き合っていたアスカに気がついて、お互い赤くなって慌てて体を離れた。

「まあ、俺がここに來た事情は後で話すとして……。先にヨシユアの兄さんの話を聞かせてもらおうじゃないか」



カシウスさんが促すと、ヨシユアは話を始めた。

「レーヴェ兄さんは、僕の姉さんの恋人だったんだ」

ヨシユアはそれからポツリポツリと、自分が六歳の頃体験した『悲劇』について語っていった。

住んでいた帝国のハーメル村が突然炎に包まれ、傭兵崩れらしい野盗たちが襲ってきた。

ヨシユアは姉のカリンさんと逃げ出そうとしたけど、待ち伏せしていた傭兵の男に、お姉さんは背中から斬り殺されてしまった。

それに逆上したヨシユアが、落ちていた銃を拾って、その男を撃ち殺したとの事。

その後駆けつけたレーヴェさんに、まだ息があったカリンさんが、弟のヨシユアを頼んだ事。

小さくして隣人たちを失い、愛する家族を失い、人殺しまでしてしまったヨシユアの心は壊れてしまったそうだ。

そこで結社のアルバ教授、本名はワイスマンと名乗る男に拾われて、ヨシユアは結社の暗殺者となった。

「でもね、僕もつらい過去を乗り越えられると思ってる。今は家族がいるからね」

話終えたヨシユアは笑顔でそう言った。

ボクもアスカも小さい頃につらい体験をしている。

でも、ヨシユアの言った通りみんな乗り越えていこう、と思った。

「実はな。俺がここに居るのは、帝国と王国の国境のハーケン門のすぐ北にある、ハーメル村に調査に来てたからだ。ハーメル村の襲撃は、王国の侵略に見せかけるための帝国の軍部の陰謀という噂が

ある。最近になって、帝国の軍部が裏で糸を引いて、帝国の遊撃士協会を襲っているという動きもあってな。そこでだ。俺は帝国で軍部と、多分それに絡んでいる結社の動きを抑えようと思う。お前たちは、遊撃士になるための旅に出たんだろ？ それならこのまま国内の他の地方を回って、結社の動きを抑えてくれないか？」

カシウスさんが長い話を終えると、今まで黙っていたレーヴェさんが、こう言った。

「では、帝国では俺も同行させてもらおう。俺はもう結社には戻らないからな」

「えっ、レーヴェ兄さんは僕たちと一緒に来てくれないの？」

ヨシユアは残念そうに言った。

レーヴェさんは優しくヨシユアの頭を撫でながらこう言った。

「俺がお前たちの側に居ると成長の妨げになる。……それに、また会えるさ」

## 《ルーアン地方 マノリア間道》

遊撃士協会ボース支部に戻ったアタシたちは、ボース支部の推薦状をもらって、ルーアン地方へ向かった。

マノリア間道は海岸沿いの街道で、右手には群青色の海が広がり、潮風にアタシの自慢の髪もサラサラなびいている。

シンジは綺麗なこの景色よりも、このアタシの事を見てくれて……いるのかな？

「あー、お腹すいたー。何か食べようよ」

エステルはマノリア村に到着すると、ランチを食べようと提案した。エステルってなんでこう食いしん坊なのかしら。色気より食い気。アタシたちは村の食事処《白の木蓮亭》に行くと、マスターに特製弁当を買って村の風車の前にある展望台で食べることを勧められた。アタシとエステルはサンドイッチ、シンジとヨシユアはパエリアのランチボックスを買った。

シンジがマスターに買い物割引スタンプを押してもらっているのを待っていたアタシが、シンジと一緒に展望台に着いたときは、すでにエステルとヨシユアが、二人掛けのベンチに隣り合って座ってお弁当を広げていた。

エ、エステル！アタシとシンジが一緒に座るしなくなっちゃたじゃない！

アタシはシンジと一緒に隣のベンチに腰を下ろした。

アタシは隣に居るシンジを意識してしまって、サンドイッチがなかなか喉を通らなかった。

「ねーヨシユア。ちよーだい、あーーん」

アタシは、ヨシユアに向かって口を大きく開けて顔を突き出しているエステルに驚いてしまった。

「な、なにやってるのよ!？」

アタシは顔を真っ赤にして叫んだけど、エステルはケロリとして、こう答えた。

「ヨシユアのパエリアがおいしいから分けてもらおうかと思って」

ヨシユアはため息をついて、エステルにパエリアを食べさせる。  
アタシはその姿を見て羨ましくなった。

「シンジ、アタシも食べたいけど、手がふさがってるのよねー。だから、ほら」

シンジは多分わかっているんだと思う。

真っ赤になって震える手でスプーンでパエリアを一杯すくって、アタシに食べさせた。

「ほら、エステル。君がどんなに恥ずかしい事をしたのか、わかったかい？」

アタシとシンジの姿を見ながら、ヨシユアはツツコミをいれた。

「ああっ！」

エステルが大声を上げ、頬に両手をあてて赤い顔をした。

エステル、今になってやっと気がついたの？ やっぱり鈍感ね。

「ヨシユア。好きでもない女の子にこんな事をされちゃ、迷惑だよね？」

エステルは珍しく落ち込んだ様子で弱々しく質問した。

「エステル。僕は好きじゃない女の子に、そんなことしないよ」

ヨシユアはエステルの肩に手をかけて、側に寄せた。  
シンジも……きっとそうだね。

アタシは勇気を出してシンジに話しかける。

「ねえシンジ。また……キスしよっか」

アタシがそう言うのと、シンジの顔はさらに赤くなった。けど、次の瞬間、暗い顔をしてこう言った。

「どうせ、暇潰しなんだろう？」

アタシはその言葉で、シンジが傷つけていたことに気がついた。それはちょうど二年前。

この世界に飛ばされる直前、シンジのママの命日にキスをした。あの時は確かにミサトとデートした加持さんに対しての当てつけの気持ちがあったから、キスの理由を暇つぶしだっていつてしまった。

「違う。アタシはシンジが好きだから、キスしたいの」

「でも、アスカは昔、加持さんが好きだって言ってたじゃないか」

シンジがそう言いかけると、エステルの大音量が飛び込んできた。

「だーっ！ アスカは今、シンジが好きだっていつてるんでしょーが！ 大事なのは今！ 過去のどーでもいいことより、今を大事にするって言うのが、あたしたちの約束でしょう？」

「うん、わかったよ」

シンジは真面目な顔で頷くと、顔を近づけた。

唇と唇が触れあう。

ファーストキスは最悪だったけど、セカンドキスは優しく長いキスだった。

あたしはアスカとシンジがキスをするところを、ヨシユアと二人で見守っていた。

アスカとシンジはお互いの気持ちを抑えていたんだね。

キスが終わると、アスカはシンジの肩に頭を乗つけて、幸せそうに寄りかかっていた。

あたしも……あたしもヨシユアと、キスしたいな。

でも、ヨシユアはきつと色気がないあたしの事を女だとは思ってないんだ。

ヨシユアが突然あたしに顔を近づけてきた。

唐突なファーストキス。それは短かったけど、あたしは受け入れる事が出来た。

「よかった。僕も怖かったんだよ」

「やだなあ、ヨシユアも怖かったんだ、お姉さんとしては……」

そこまで言いかけたあたしにヨシユアがクスツと笑ってツツコミを入れる。

「もう、お姉さんじゃないだろう?」

あたしもヨシユアの肩に頭を乗つけて、静かに展望台から見える景色を眺めた。

## 《ルーアン 遊撃士協会》

「……そろそろ、行こうか?」

ヨシユアが惚気続けるボクたちにツツコミをいれたのは、群青色の海が一面茜色に染まった頃だった。

遊撃士協会のルーアン支部に着いたのは日が暮れてからだった。

「ボース支部のルグラン爺さんから出発の連絡があつてから、ここに到着するまでずいぶん時間がかかったようだけど、何か事件があったのかい？ 報告してくれば、遊撃士協会から報酬を出すよ」

受付のジャンさんはそう言ってくれたけど、ボクたちは本当の事を言えるわけ無く、ごまかし笑いを浮かべた。

「緊急の依頼は無いけど、細かい依頼ならあるから、キリキリ働いてくれよ」

ジャンさんはボクたちに細かい依頼の内容を説明した後、こう話を切り出した。

「そうだ。依頼じゃないけど、各地で目撃されている幽霊について情報を集めてくれないかな？」

それを聞いたアスカとエステルは揃って嫌な顔をする。

「だって、そんなの見間違いかもしれないし……」

「時間の無駄よね」

アスカとエステルは否定の言葉を口にした。  
ボクとヨシユアは顔を見合わせて、クスリと笑って、調子を合わせる。

「幽霊が怖くて逃げるのかい？」

「そうだね、そんなに情けないとは思わなかったよ」

「「な（あ）んですって〜！」」

挑発に乗った二人は、幽霊調査の依頼を引き受けた。

「おめーら、上玉二人とイチヤイチャしてるんじゃないよ。」

ボクたちは、街の不良グループ『レイブン』の一人が、幽霊を目撃したという噂を聞いて、詳しい話を聞こうと倉庫まで来たんだけど……。

絡まれてしまった。

「エステル。やっと女の子って認められたね。しかも上玉だって。

おめでとう」

「うるさーい！」

夫婦漫才をしているエステルとヨシユアを前に、不良たちはさらにイライラして来たようだった。

「そんな生っちょろい小僧達なんか放つといて俺たちと楽しもうぜ〜」

不良の一人が軽い口調でそういうと、一気に激高するアスカとエステル。

「てめえら、何しているんだ？」

不良たちとの戦いに突入すると思われたとき、赤毛にバンダナを巻いて大剣を背負った男性が、声をかけながら僕達に近づいてきた。



「ア、アガットさん！」

不良たちはアガットさんと言う人に頭が上がらないようだ。中には這いつくばって土下座している人もいた。

アガットさんのおかげで、幽霊に関する情報を不良達から聞き出したボクたちは、次の目撃者がいる《マーシア孤児院》に向かった。孤児院に向かう途中の街道で、ボクは孤児院から飛び出してきた、藍色のショートカットの制服の女の子に激突して、お互いに尻餅をついてしまった。

彼女はハツつとするとスカートを抑えながら立ち上がる。

「す、すいません。私がよそ見をしてしまつて。急いでいるんで失礼します」

そう言つて、その子はそくさと立ち去つてしまつた。

ボクはその制服の女の子のスカートの中身を見てしまつていた。

「何色だつたのよ？」

「白かつたよ」

ボクはアスカの質問に正直に答えてしまつた。

それからアスカは怒つて、ボクがいくら謝つてもそっけない返事しかしてくれなくなつた。

マズイこと言つちやつたな……。

その後の聞き込みで、ボクたちは幽霊が消えていく方向から推測して、《ジェニス王立学園》の近くがもつとも怪しいという事で、その近くで重点的に情報収集を行う事になつた。

《ルーアン地方 ジエニス王立学園》

アタシたちが学園の近くで情報を集めたいと遊撃士協会のジャンさんに相談すると、しばらく学生として在籍してみてはどうかと勧められた。

学園側も生徒が落ち着いて勉強が出来るのは困るらしい。

ジェニス王立学園に着いたアタシたちは学園長の部屋に出向いた。転校生として学園に滞在しながら、生徒たちから情報を集めて欲しいという。

学園を案内する学生として生徒会役員である三人の生徒が呼ばれた。生徒会長のジル、副会長のハンス、そして街道でシンジとぶつかったクローゼと言う子。

クローゼはシンジと目が合うと、ぶつかった時の事を思い出したのか、顔を赤らめた。

シンジも顔を赤くしている。

アタシはそろそろシンジにいつも通りに接してあげようかと思ったけど、イライラしてシンジを怒った顔で睨みつけてしまった。

アタシたちは連れだって学園長の部屋を出ると、本館に隣接するクラブ棟の一階にある学食に向かった。

アタシたちは自己紹介をした後、依頼の話はそこそこに、お喋りに時間を費やした。

気がつくと、シンジとクローゼは料理の話題で、ジルとヨシユアは本の話で話が盛り上がっている。

アタシとエステルはお互いムスツとした顔で黙り込んでいた。ハンスが話しかけてきてくれたけど、全然話は弾まなかった。

それからアタシたちは男女のグループに別れて、情報収集を行う事にした。

調査する場所に男子ロッカールームと女子ロッカールームがあるから。

クローゼは調査中にもアタシにシンジの事をいろいろ聞いてきた。

シンジとクローゼが楽しそうに話しているのを見ていたアタシは、クローゼみたいなおっとりとして優しくて料理もできる女の子の方が、シンジには相応しいかもしれない、と思った。

アタシはシンジに告白はしたけど、クローゼに勝てるかどうか自信はなかった。

アタシはクローゼにシンジと恋人同士であるとは言えなかった。幽霊の目撃談もないまま、学園生活はしばらく続いた。

しかし、ある日クローゼがアタシにこんな事を言いだしたのだ。

「私、シンジさんに告白してみようと思います」

ついに恐れていた事が起こってしまった。

シンジはアタシを振って、クローゼと付き合ってしまうんだろうか。クローゼはシンジを学園の裏庭に呼び出していた。

「クローゼさん、大事な話ってなんですか？」

待っていたシンジが、クローゼに問いかける。

そしてクローゼが告白の言葉を言おうとしている。

「ダメっっっ！」

アタシは校舎の陰から飛び出すと、クローゼに向き直った。

「お願い、アタシからシンジを奪わないで！ アタシにはシンジしかいないの。シンジの代わりはいないの……」

アタシはペタンと座り込み、両手で顔を覆って泣き出した。シンジはアタシの肩を優しく抱きしめてくれた。

「ふふ。告白する前に振られてしまいました。もうアスカさんを泣かせないであげてくださいね」

クローゼがそう言つて、アタシたちから駆けて離れていく音が聞こえた。

アタシは泣きやんで顔を覆っていた手を下した。

それに安心したのか、シンジがアタシを抱きしめる力も緩んだ。

ふと、アタシは少し離れた前方の学園の塀の向こうの空中に、白い人影が浮かんでいるのが見えた。

白い人影をよく目を凝らして見ると、仮面と帽子を被っていた。

白い人影はアタシと視線が合うと、帽子をとってお辞儀をして、学園の裏手にある旧校舎の方へ消えていった。

「キ、キヤアアアアー！！」

幽霊のようなものを見たアタシは悲鳴を上げて、シンジにまた抱きついた。

僕たち四人はアスカの目撃証言にしたがつて、旧校舎に向かった。

旧校舎は生徒が入り込まないように、鍵がかけられているけど、しばらく前に鍵が盗まれたらしい。

必要な場合には、扉を壊すという許可をもらっていた。

扉には、『鍵は落ちたる首にあり』と書かれたカードが貼られていた。

多分、鍵が隠してある場所の暗号じゃないだろうか。

だけど、エステルはそんな事を気にせずに、扉を思いっきり叩いていた。

そうしたら、古いものだったからか、あっさりと錠前は壊れてしま

った。

エステルは得意満面の笑みを浮かべているけど、アスカとシンジは呆然としていた。

僕はエステルにツツコミを入れる暇がなかった。

「結果オーライよ！」

遊撃士としては、不合格だと思っただけだな……。

旧校舎の玄関ホールでは、仮面と帽子を被った男が立っていた。僕には見覚えがある。結社の執行者の一人だ。

「私は怪盗紳士ブルブラン。今日は諸君の究極の美を盗みに参上した」

彼は大仰に名乗りを上げた。

「こらあ、変態仮面！ 幽霊騒ぎはあなたの仕業ね！」

エステルは名乗りが気に障ったのか、怒った様子だ。

「いかにも。私が狙う獲物は諸君が持つ光り輝くもの。それは、きぼ……」

「太陽だね！？ボクの太陽を奪いに来たのか！」

シンジがブルブランの言葉を遮って叫んだ。

「シンジ、一体どうしたのよ……！？」

アスカは呆然としている。

「アスカはボクの心を輝かせる太陽なんだよ……」

「シ、シンジ、なんて恥ずかしい事を、言うのよ」

「だから、きぼ……」

「ヨシユアも、エステル的事、そう言ってるよ！」

ええっ、僕に振るのかい！？

「ヨシユア、そ、それって本当……？」

エステルもこつちを振り返って、照れ臭そうに聞いてきた。

「う、うん、太陽みたいな、って事だけど……」

僕まで落ち着かなくなつて、どきまぎしてきた。

「シンジい〜」

「ヨシユアあ〜」

エステルは太陽のような笑顔を向けると、僕に抱きついて来た。  
そして、二度目のキス。

僕の瞳にはエステルしか映っていなかった。

## 《ルーアン 遊撃士協会》

あたしたちが正気を取り戻すと、変態仮面は姿を消していた。  
なんだかいろいろ喋っていたけど、あたしたちは何も聞いちゃいなかった。

アスカとシンジもお互いの事に夢中だったようだ。

変態仮面はラブラブモードに入ったあたしたちに愛想を尽かして立ち去り、幽霊事件は解決したみたい。

あたしたちが幽霊事件の顛末を肝心なところは誤魔化しながら報告していると、『マノリア孤児院』が放火されたという知らせが届いた。

目撃者によると、犯人はレイブンを脱走した三人組で、紺碧の塔に向かったらしい。

レイブン絡みだという事でアガットが、マーシア孤児院に関わるという事でクローゼが同行することになった。

紺碧の塔の最上階の部屋。

その部屋の入口の階段で、あたしたちは密談をする悪人たちの声を聞いた。

今回の事件の黒幕はルーアン市の市長ダルモアと、その秘書ギルバートだったんだ。

「これで、あの孤児院を取り壊す手間が省けました。放火を含めた一連の事件もあの不良どもの仕業にできる。まさに一石二鳥というものです」

秘書ギルバードは笑みを浮かべていう。それに答えるダルモア市長。

「うむ、これであの土地を別荘地にすることができる。そして約束通りデュナン公爵に一億ミラで買っていただければ、我がダルモア家の財産と誇りは守られる」

「それがあなたたちの目的ですか？」

怒りを抑えきれなかったクローゼが飛び出してしまった。

「ダルモア家の家屋を売れば、あなたたちの借金は返済できるはずです。なぜそうしないのですか？」

「あんな薄汚い孤児院と我が家を一緒にするな！」

「私の思い出の詰まった場所を侮辱するなんて許せません！」

「市長ダルモア！放火の罪であたしたち遊撃士が逮捕するわ！」

あたしたち三人とアガットも階段を登って部屋に突入した。

あたしたちを見て、形勢不利と判断した市長は声を上げた。

「曲者だ、であえ、であえ！」

すると天井から元レイブンの三人組がストンと落ちてきた。

表情は無表情で、目もうつろで、殺気だけを放っている。

あたしたちは巧妙におびき寄せて三人組が固まったところに、あたしたちの必殺技『チェインクラフト』をぶち込んでやった。

倒された三人組は、爆発して吹き飛んでしまった。

「人じゃなかったのか。道理で僕に気配が感じ取れないわけだ」

「結社もここまで精巧な人型兵器を造れるなんて、侮れないわね」

「どうやら、レイブンの奴らは無実のようだな」

ヨシユアとアスカとアガットは残骸を調べてそう言った。

追いつめられたはずのダルモア市長はまだ余裕の笑みを浮かべている。

そして懷から杖を取りだすと、こう叫んだ。

「時よ、凍えよ！」

あたしたちの体が動かなくなった。

「これは我がダルモア家に伝わる『封じの宝杖』。私以外が動けなくなるアーティファクトだ。一人ずつゆっくりと殺してやる」



ダルモアは不敵な笑みを浮かべてあたしに銃を向けた。

「汚い手でエステルに触るな……。もしも、毛ほどでも傷つけてみる……。ありとあらゆる方法を使ってあんたを八つ裂きにしてやる……」

「ひ、ひいっ！」

ヨシユアの物凄い殺気のこもった声に、ダルモア市長はパニックになった。

そして、シンジとアスカの二人の居る方に銃を向ける。

「ふ、二人まとめて殺してやる、死ね！」

ダルモア市長は銃の引き金を引いた！

## 第六話 唇で交わした約束

ボクは市長ダルモアが血走った眼で、こちらに銃を向けるのを見た。隣にはアスカがいる。

ボクは撃ち殺されたアスカが血を流して倒されるのを想像した。そんなの嫌だ。

アスカを守りたい守りたい守りたい守りたい守りたい。

ボクは目をつぶって、それだけを考えていた。

銃弾が跳ねかえる音に目を開けると、ボクの前に金色の障壁が、アスカの前には白い障壁が展開されていた。

「A・T・フィールド!?」

ボクとアスカは目を丸くして驚いた。

驚いたダルモア市長はボクたちに向かって銃を乱射するけど、銃弾はすべてA・T・フィールドに弾かれた。

「ば、化物〜!」

銃が効かない事に錯乱したダルモア市長は、杖を投げ捨てて、階段を上って屋上に逃げていった。

その姿を見ていたボクの意識が急に途絶えた。

あたしはアスカとシンジの前に二色の光の壁が現れて、ダルモア市長の撃った銃弾を跳ね返すのを呆然と眺めていた。

光の壁が消えた後、アスカとシンジは気を失って倒れてしまった。

「てめえ、何逃げようとしてるんだ」

後ろに居たアガットが、こっそりと逃げようとしていた、秘書のギルバートを捕まえようとしていたみたい。

倒れたアスカとシンジをクローゼに任せて、あたしとヨシユアは逃げたダルモアを追って階段を上がった。

あたしたちが屋上に上がると、すでに逮捕されているダルモア市長を発見した。

取り囲んでいる兵士たちの服装は普通の王国軍の兵士と違って豪華な感じ。

隣に居るヨシユアに聞いてみると、多分、親衛隊だろうと言った。

あたしが大きな着いて頭上を見上げると、定期便より一回り小さい大型飛行船が浮かんでいた。

タラップから縄ばしごが下されて、そこから隊長クラスらしい女性と男性が降りてきた。

「罪人ダルモアを逮捕しました、ユリア隊長」

親衛隊の一人が女性隊長に向かって敬礼する。

「御苦労」

そう答えたユリアさんはあたしたちに気づいて、いや視線はあたしたちの後ろだった。

ユリアさんはあたしたちの後ろに立っていた人物、クローゼに向かって敬礼していた。

「ご命令により、参上しました、クローディア姫殿下」

ええっ、クローゼって王女殿下だったの!?

「エステルさん、黙っていてごめんなさい。私は普通の女の子の生活に憧れて、逃げていました。でも、みなさんの姿を見て、私も王位を継いで国民を守る決意ができました」

「クローゼなら、良い女王様になれるよ」

「ありがとうございます。ただ、守りたい男性はまだ、居ませんけどね」

クローゼは嬉しそうな、ちょっと憂いを秘めた顔でそう答えた。

シンジは王女様を振ってアスカと付き合ってるんだっけ。

アスカがこの事を知ったら泣いて喜ぶかな？

もしかして、王女様に勝ったってタカビーに……ならないよね？

クローゼはユリアさんと一緒に来ていたミユラーさんって男の人と一緒に親衛隊の飛行船アルセイユに乗って行ってしまった。

さすが王国一早い飛行船、アスカとシンジが目覚まして屋上に上ってくるまでの間に豆粒みたいに小さくなってしまった。

## 《ルーアン地方 マノリア村》

アタシたちは事件解決の功績が認められて、ルーアン支部の推薦状をもらった。

アタシたちは、ツアイス地方に行く前に、マノリア村に火事に遭ったマーシア孤児院の子供たちの様子を見に行くことにした。

孤児院の子供たちの面倒は旅の巡回神父とシスターが見てくれているという。

神父さんたちは授業を終えて食事中らしい。

「ケビン、そっちのパエリアも食べたい。でも、このサンドイッチ

が大きすぎて、手がふさがってるの。だから、ほら、あーん」

アタシたちが村の風車の前にある展望台に行ってみると、シスターさんがケビンと呼んだ神父さんに向かって口を開けてるの。

それを見たアタシたち四人は固まってしまって、ケビンさんとシスターさんに声をかける事は出来なくて立ちつくしてた。

「ほ、ほら人がみてる。見られたら、わいらの事恋人同士と誤解してまうねん」

「ケビンは私の事、嫌いな？　グスン」

シスターさんは冗談混じりに嘘泣きの仕草をしていた。

「そないな事いわんといてや。嫌いやない、リースのことメツチャ好きやねん」

ケビンさんはごまかし笑いで明るく答えた。

「嘘。今でもルフィナ姉さんが好きなんでしょう」

リースさんは急に深刻な表情になった。

ケビンさんもその雰囲気を感じてか、今までの軽い調子を崩して、話出した。

「ルフィナ姉さんは憧れていただけや。でもワイはリースを好きになる資格なんて無い。ルフィナ姉さんを殺してしまったわいはリースを傷つけるだけや……」

その言葉を聞いたアタシは見ず知らずのケビンさんを思いっきり殴ってしまった。

「アンタ、バカア！？ 人を好きになるのに資格なんているわけ！？ 好きなら好きって言えがいいのに！ 一緒に居たいなら居たいって言えればいいのに！」

「あたしもアスカと同意見よ。過去は過去、大事なのは今の気持ちなんだからっ！」

エステルもアタシの言葉に続いてくれた。

ケビンさんはアタシの突然の行動に呆然としていたけど、ふつ、と微笑むと殴られた頬をさすりながら、こう言った。

「その通りやな。ワイはリースと共に歩いていきたいと思ってる」

その言葉を聞いたリースさんはケビンさんに抱きついた。

「ケビン、やっと心を開いてくれた。今までのあなたは誰にも心を開いていなかった。空っぽの笑顔を見ていて辛かった……」

リースさんは涙を流しながらそう言った。

「さあ、キスしちやいなさいよ！」

アタシがそう言うと、リースさんはアタシたちの前でケビンさんの唇を奪った。

ちよつと長めのキスが終わった後、リースさんはアタシを睨んでこう言った。

「ケビンと恋人になれた事には感謝しますが、人をいきなりグーで殴るなんて、お行儀が悪すぎます！」

アタシはリースさんに説教を喰らう羽目になった……。

《ルーアン地方 ツアイス地方 カルデア隧道<sup>トンネル</sup>》

カルデア隧道。ルーアン地方からツアイス地方へ徒歩で行くにはこの洞窟を通らなければならない。

アガットさんを先導役として僕たちは進んで行くと、前方から女の子の悲鳴が聞こえた。

先頭を歩くアガットさんはいち早く駆けつけ、女の子を襲っている魔獣を追い払った。

「こら、チビスケ。一人で何をやってるんだ！」

アガットさんに助けられた女の子は、僕たちよりも年下のようにだった。

「ふえつ。ごめんなさい。どうしてもやらなきゃいけない仕事があったんです」

アガットさんは、それ以上強く怒る事はできなかった。

女の子はツアイス工房の見習い、ティータと名乗った。

確かに導力バズーカと作業服のツナギに耐熱ゴーグルと、工房士らしい服装をしている。

ティータは目的の洞窟内の照明の修理を終えると、僕たちを護衛として帰る事になった。

ティータはアスカと導力技術について難しい話題で盛り上がっていた。

アスカの事を気に入ったティータは、僕たちを家に招待して夕食を

ご馳走してくれた。

## 《ツアイス ラッセル家》

ティータの家に案内された時は、アタシは驚いた。

ティータがリベール王国の一番の導力技術者、ラッセル博士の孫だったなんて。

ラッセル博士は、ちよつと発明狂な所があるけど、人のいいお爺さんって感じ。

ティータの両親も外国から帰ってきているみたい。

お母さんのエリカさんはパワフルな女性で、ラッセルさんと喧嘩はよくしているし、

ティータに近寄るアガットを排除しようとしたりしていた。

アタシの事を気に入って娘にしたいって言うてくれた。

その気持ちだけ受け取っておく。

お父さんのダンさんは穏やかな人で、ティータの家庭は暖かいんだなと思った。

「湖に巨大な人型兵器が墜落したって噂を聞いて、外国から戻って来たのよ」

エリカさんの言葉を聞いて驚いたシンジは食べていた夕食を嘔き出してしまった。

シンジ、ぼろを出さないといいけど。

「ワシも調査に行きたいんじやが、最近妙な連中がウロウロしているからのう」

「王国の情報部の連中が奴らと結託して邪魔してるのよ。何を企ん



でいるのかしら」

アタシとシンジはその話を聞いて、エヴァンゲリオンが結社に利用される可能性がある事に気がついた。

アタシたちはラッセルさんたちを信じてすべてを打ち明ける決意をした。

「お前さんたちがあの機械のパイロットじゃと!？」

アタシたちの話をラッセルさんたちは信用してくれたらしくて、熱心に話を聞いてくれた。

「じゃが、今お前さんたちがあそこに近づくのは無理かもしれん」

ラッセルさんの話によると、謎の組織は湖の近くに建物を建てて、しかも王国の情報部まで根回しして部外者を立ち入り禁止にしているらしい。

ラッセルさんが出会った謎の組織の責任者はヒゲ面のサングラスを掛けたおっさんだったそうだった。

「アルバ教授じゃなさそうだけど……。結社の幹部の一人かな？」

シンジが腕組みしながらそう呟いた。

「うーん、僕が知っている結社の執行者の中にはそんな人は居なかったけど」

ヨシユアは考え込む仕草をしながらそう言った。

結局結論が出なかったけど、ラッセル博士は家族総出でアタシ達のサポートをする事を約束してくれた。

《ツァイス 遊撃士協会》

「え〜！ 温泉に入れないの！？」

アスカはツァイス地方に《エルモ温泉》と言う観光地がある事を知ると、とても喜んでいた。

だけど、温泉の源泉が原因不明の沸騰を起して入れない話を聞いて、不貞腐れた表情で大声を上げた。

「こうなったら、アタシたちの手で温泉を取り戻すのよ！」

うわあ、アスカが燃えている。

温泉に入った事のないエステルとヨシユアにはよくわからないようだ。

他に受ける依頼はあったのに、アスカに引っ張られるようにボクたちはエルモ温泉に向かった。

温泉の奥地では無精ヒゲに黒いサングラスの長身の男性がボクたちを待ち受けていた。

「俺は結社の執行者の一人、ヴァルターだ。あいつの言うとおり、温泉に異常を起こしたら、お前たちがノコノコやって来たわけだ」

「僕たちだけをおびき寄せるために、この騒ぎを起こしたのか」

ヨシユアはそう言つて、短剣を構える。

「俺は今までの執行者と違って、半端じゃねえぞ。……お喋りはこれまでだ。行くぜ！」

ヴァルターはそう言い終わると、ヨシユアに凄まじい勢いで拳を叩きこむ！

いつも動きが素早いヨシユアだけど、何発か喰らってよろけて倒れこんでしまった。

ヴァルターは、前衛に居たエステルも蹴散らして、ボクに迫って来た。

ボクの武器は導力銃だ。接近戦ではひとたまりもない。

そうだ、A・T・フィールドだ！

ボクはA・T・フィールドが出るように念じてみた。

でも、A・T・フィールドは全く出る気配がない。

「棒立ちとは、情けないやつだな」

呆然としているボクは一撃を喰らって、床に倒れこんだ。

ズズズキ痛む体のおかげで、床にひれ伏してるけど、意識はしっかりしていた。

ヴァルターは余裕を見せてアスカにゆっくりと近づいている。

アスカは導力銃で攻撃しているけど、奴は全然堪えてない。

アスカを守らないと……！

ボクは立ちあがろうとするけど、痛みが酷くて体が動かない。

すると、アスカとヴァルターの間に白いA・T・フィールドが出現した。

ヴァルターは驚いてA・T・フィールドにパンチやキックを叩きこむけど、破られることはない。

「これが話に聞いた『あの力』か！？」

ヴァルターは急に興奮して、A・T・フィールドに対する攻撃を強めた。

でも、僕が強いめまいを感じると、A・T・フィールドはしばらくして消えてしまった。

「……つまんねえ。もう終わりかよ」

ボクの方に視線を向けて吐き捨てるようにそう言つと、ヴァルターはボクたちを置いて去っていつてしまった。

## 《ツアイス エルモ温泉 紅葉亭》

ヴァルターの残した機械を停止させると、温泉は正常に戻ったみたいだ。

僕たちはせっかくだから温泉に入って行くことにした。  
ティータとアガットさんも紅葉亭に来ていた。  
温泉のポンプの修理点検の仕事だったらしい。

「さあ、未知の世界へレッツゴー！」

エステルは子供みたいにはしゃいでいる。  
当たり前だけど男湯と女湯は分かれている。

タオルは持って入っていいけど、湯船につけちゃいけないのがマナーみたいだ。

「ふう。体の痛みや疲れが消えていくようだ」

僕は足を伸ばして入れるお風呂に満足していた。  
僕たちが黙って温泉を堪能していると女湯の方から声が聞こえる。

「アスカの胸って……」

「エステルのお脚だって……」

「ティータも……」

シンジがさつきから顔を赤くして股を押さえている。

「膨張してしまった……。恥ずかしい……」

そんなシンジを余所に、さらに女湯の会話の声は大きくなっていた。

「アスカさんたちはもう結婚してるんですか？」

ティータは僕たちの家族構成に疑問を持っているようだ。

「バ、バカ！苗字が同じなのは家族だからよ！」

「えーいいじゃん。同じようなものだし。認めちゃいなさいよ」

「も、もうエステルってば！そ、そうよアタシとシンジは婚約してるの！」

「そうそう。あたしとヨシユアも結婚を前提に付き合ってるの」

会話を聞いたアガットさんが呆れてる。

「お、おめーらその歳で結婚を決めちゃったのかよ……」

僕も結婚してくれる程好きと言われたのは嬉しいと思うけど、いつの間に婚約までいったんだろう？

シンジとアスカから婚約の報告を受けた事もない。

シンジも苦笑している。

「兄弟が居るって羨ましいです。わたしはおとーさんとおかーさん

が居ないときは、おじいちゃんは工房にこもりつきりだから、一人で寂しいんです」

「じゃあ、アガットにお兄さんになってもらえばいいじゃない」

「うんうん」

エステルという言葉に追従するようにアスカの頷く声が聞こえる。

「でも、おにーさんじゃ嫌だな。いつか私がお嫁さんに行く時にさよならしないといけないし」

「十年後ぐらいなら年の差なんて関係なくなるわよ」

「そうそう、その頃にはアガットが逃げられないように既成事実を作っておけばいいのよ」

「な、何だと……」

アスカ達の言葉が聞こえると、アガットさんは青い顔をして重い足を引きずるように男湯を出ていった。

僕は男湯の奥に扉があるのに気がついた。

シンジに聞くと露天風呂の入口だという。

僕は露天風呂の入口の扉を開いた。ひんやりとした風が体を冷やす。風邪を引かないようにさっさと湯船に入る事にした。

僕が景色を楽しんでいると、扉が開いてエステルが入って来た。

「あー、とても広くて気持ちいい」

エステルは湯船の中で手足をバタつかせている。

「だからって、泳いじゃだめだからね」

僕はエステルにいつものように注意した。

「わかつてるわよ……ん？ きゃあああああ！ なんでヨシユアが居るのよ！」

エステルは慌てて両手を抱え込んで体を隠した。

「えっ、混浴って書いてなかった？」

「そんなの聞いてないわよ！」

僕はエステルの体をすっかり見てしまった。

本人は色気がないっていつてるけど、十分女の子らしい体つきになつてる。

「後ろ、向いてよね！」

僕がそう言われて慌てて後ろを向くと、エステルは慌てて露天風呂を出ていった。

「アスカ、あたしをはめたわね！」

「何も聞かないで行くエステルが悪いのよ……」

「ヨシユアに裸を見られちゃった。こうなったら責任をとってもらわないと！」

「あ、エステル！」

女湯からまた声が聞こえる。

響くとわかっていないのだろうか、もう少し小さな声で喋ってくれないかな。

エステルは出ていってしまったみたいだ。

僕も逆上せて来たので、浴場から外にでた。

アガットさんもヨシユアも出ていってしまったので、男湯はボク一人きりになってしまった。

「シンジー、一人なのー？」

女湯からアスカの声が聞こえる。

「うん、一人だよ」

「アタシもティータが出ていって一人なの。じゃあ露天風呂で会わない？」

「うん」

ボクはしっかりと腰にタオルを巻いて、露天風呂に入った。入って来たアスカもしっかりとバスタオルを巻きつけている。

「シンジ、ひよつとして期待してた？」

「そ、そんなまさか」

ボクがそういうと、アスカはバスタオルの胸元に手を当てる。

「アタシ、胸も結構大きくなったんだよ。直接生で見てみる？」

ボクはアスカが本気で言っているのか、それともからかっているのか分からなかった。

すると、ガサガサと露天風呂の周りの茂みが揺れて、ヒツジ姿の魔獣が姿を現して、すぐに逃げ出して行った。

「こらー！ 最近現れる覗きってアンタねー！」



激しく暴れたせいでアスカのバスタオルがほどけてしまった。

「！？」

……ボクはその後露天風呂でアスカと二人で気絶してしまって、心配して様子を見に来た女将のマオさんによって救出された。部屋に戻ってしばらくした後、ボクはアスカに廊下に呼び出された。

「シンジも……責任とってよね」

その言葉に対するボクの返事は、唇と唇との接触だった。

「これは誓いのキス。ボクとアスカが婚約したって事だよ」

## 《ツアイス 遊撃士協会》

あたしたちは温泉で休養を取ると、ツアイスの遊撃士協会で、細々とした依頼をこなす日々を送っていた。

ラッセル博士から、レイストン要塞の軍司令部に、ヴァレリア湖に墜ちたアスカとシンジが乗っていたエヴァンゲリオンの調査に参加したいと打診してもらってるけど、軍司令部は調査は情報部に任せているの一点張り。

そんなある日、遊撃士協会に緊急通信が届いたの。

「大変な事が起こったの。落ち着いて聞いてちょうだい」

受付のキリカさんはそう前置きして、真面目な顔であたしたちに話を切り出した。

「王都で情報部によるクーデターが起こったらしいのよ。……アリシア女王様と、クロード姫殿下の安否も不明らしいわ」

## 第七話 王都跳梁（前編）

### 《王都グランセル 遊撃士協会》

アタシたちは、結社による妨害も特に無く、遊撃士協会のグランセル支部までたどり着いた。

結社の幹部はアタシたちの顔を知っているはずなのに、どうして妨害がないのか。

アタシたちのことを無視しているのか。

それともわざと見逃しているのか。

どちらにしても、アタシたちは行動しなければならない。

グランセルの市街は、警備しているのが一般の兵士ではなく、情報部の兵士だったこと以外は平和に見えた。

グランセル支部の受付では、エルナンさんという落ち着いた感じの男の人がアタシたちを迎えてくれた。

「とりあえず、最初にすべきことは情報収集でしょう。結社に協力していると思われる情報部がどの程度活動しているのか、また女王親衛隊やアリシア女王様の様子も気になります」

たぶん、この遊撃士協会は嚴重に監視されているに違いない。巡回中の兵士からも張りつめた空気が伝わってくる。

その状況下でどのくらい情報を集める事ができるんだろうか。

「情報収集って、どうするわけ？」

アタシがエルナンさんに尋ねると、エルナンさんは考え込むような仕草をしてアタシの質問に答える。

「そうですね……手分けして王都の各地を回ってもらうしか無いですね。まず王城に探りを入れなくては。リベール通信社はきつと有益な情報を持っているはずです。それと大聖堂と帝国と共和国の大使館でも話を聞く必要があるかもしてません。さらに念を押せば歴史資料館や、空港、港湾地区、居酒屋やホテルなども……しかも、出来るだけ早くに」

「ボク達四人で手分けするにしてもかなり時間がかかりそうですね」  
シンジが冷汗を垂らしながらそう答えた。

「……その心配はいりませんよ」  
「へ？」

自信たつぷりに言うエルナンさんにエステルが間抜けな声を出すと、入口の方からぞろぞろと足音が聞こえた。

「……久しぶりね。ボースで別れた時よりもかなり頼もしくなっているじゃない？」

「はあい、子猫ちゃんと小犬君達」

まず始めに声をかけて来たのはシェラさんとオリビエだった。

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん、私も力になりたいです！」

「このチビスケが行くってダダをこねるからな。……俺は付き添いだ」

その後ろから現れたのはティータとアガット。

「……アスカちゃん！ エステルちゃん！ やっほー！」  
「遅ればせながら参上しました」

ボースやルーアンで会ったことのあるアネラスさんやクルツさんまで来ているなんて！

「みんな、揃ったようですね。……実は私から王国各地の遊撃士ギルドの支部に連絡を入れていたのです」

「エルナンさん、やるわね……」

アタシは感心してそう呟いた。

「まさか、父さんまで来ているとか？」

「いえ、カシウスさん達とは連絡が取れませんでした。ですが……」

エルナンさんがそこまで言うつと、二階から見覚えのある二人が降りて来た。

……なんで遊撃士ギルドに居るのよ！？

「どうやら、上手い具合にみんな集まったみたいやな」

「……良かったわね、ケビン。何回も説明する手間が省けて」

巡回神父の服装の男性に、シスター服の女性。

マノリア村で出会ったケビンさんとリースさんだった。

その互いの手はしっかり握られている。

二人はアタシの姿を見て、嬉しそうだけど困っているような様子にも見える。

ケビンさんは反射的にほっぺたをおさえてる。

……グーでパンチはやりすぎたと反省してるわよ。

「以前にギルドがつかんだ情報によると、アルバ教授は王都の歴史博物館で、オーリ・オールというものについて調べていたようです」

「オーリ・オール？」

アタシがエルナンさんに質問すると、代わりにケビンさんが答える。

「オーリ・オールについては、ワイが説明するわ。そのために来たんやし」

「ええ、お願いします」

エルナンさんがそう促すと、みんなの視線がケビンさんに集中する。

「ワイらが所属する七曜教会では周知の事実となってるんやけど……空の女神エイドスが古代の人々に七つの至宝を授けたって話は聞いた事あるやろ？」

「セプトⅡテリオンですね」

ヨシユアの言葉にその場に居たエステル以外全員同意した。

日曜学校で教会のデバイン教区長さんが話してくれた話だ。

……エステル、アンタはヨシユアの肩にもたれかかって寝てばかりいるから分らないのよ。

「オーリ・オールは、セプトⅡテリオンの一つで、輝く環とも呼ばれている。……そして、ワイらはそう言った古代の至宝、いわゆるアーティファクトの調査、回収、管理を行う仕事をしているんやけど……」

「なんと、君達は聖杯騎士団の一員だったのか」

ケビンさんの言葉を聞いたオリビエが驚いて大声でそう言った。

「いや、まだペーパーの新米なんですやけどね。……話を戻しますけど、オーリ・オールは人間の願望を無限に叶えるものだとか教会

には伝えられていて、最も大きな力を持ったアーティファクトの一つだと言われているんですわ」

「……ふええ、そんな凄いものがあるんですか？」

アタシたちの心の中の驚きを代表してティータがそう言った。

「さらに、これは教会の中でも高い地位の人達しか知らんことなんやけど、オーリ・オールガリベール王国のどこかにあるっちゅう話や」

ケビンさんの言葉にアタシは驚いて息を飲んだ。

みんなも黙りこんでいる。

「アルバ教授と名乗っているあの男、元々はノーザンブリアで孤児になってもうて、七曜教会に引き取られた後は、司教にまでなっただんですわ。それが突然、教会を裏切って結社に入った。そして今、リベール王国方面の幹部になってやって来ているわけや」

「……ケビンさんは、結社についてどこまでご存じなんです？」

「そうやな……」

「ケビン……」

ヨシユアの質問に答えようとしたケビンさんにリースさんがそっと耳打ちをした。

「そ、そやな説明はこれぐらいで十分やろ！ 大聖堂への聞き込みはワイらが引き受けた！ ほな、リース行こうか！」

「そうね、ケビン」

突然慌てた様子で二人は急いで出て行こうとする。

しかし、その時リースさんのお腹の虫が盛大な音を立てた！

「アハハハ！ リースさん、ご飯食べてなかったんだ！」

エステル笑い声につられて、アタシ達もみんな大爆笑してしまった。

「ケビン！」

「すまん、リース。夕方のタイムセールまでには仕事を終わらせるから、勘弁してや」

「もう、そんなことまでばらさなくていいじゃない！」

ケビンさんとリースさんの漫才みたいなやり取りに、アタシ達の笑いは止まらなかった。

これから国の運命がかかった重大な作戦が始まるって言うのに、緊張が無いわね。

でも、アタシはこんな温かい雰囲気 みんなが大好きよ！

### 《王都グランセル 西區画》

あたしとヨシユアは、リベール通信社のある西區画を中心に聞き込みを行う事にした。

もちろん、真っ先に向かうのはナイアルさんの居るリベール通信社。ツアイス地方で別れてからまだそんなに経っていないけど、ナイアルさんなら短期間でもきつと何かつかんでいるはず。

あたし達がリベール通信社を訪ねると、ちょうどナイアルさんは編集部に居るみたいだった。

「ナイアルさん！」



「おう、エステルにヨシユアじゃないか」

退屈そうに自分の席に座っていたナイアルさんはあたし達を見ると、嬉しそうに返事をした。

「ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

あたしがそう言うと、ナイアルさんは黙ってと言うジェスチャーをする。

「外にコーヒーでも飲みに行かないか？」

ナイアルさんの視線の鋭さで、あたしは状況を察した。

「ええ、いいわよ。もちろん、ナイアルさんがおごってくれるんでしょう？ 年長者として」

「はは、こいつめ！」

あたしはおどけた様子でそう言ってナイアルさんに合わせた。

「……と言うわけで、ちょっと行ってきます」

ナイアルさんが席に座っている編集長さんにそう断ると、編集長さんは渋い顔をして頷いた。

「わかった。でも、もう勝手な取材をするんじゃないぞ。これ以上不祥事を起こしたら我が社が潰されてしまうからな」

「へいへい、分かりました」

あたし達がナイアルさんと一緒に廊下に出ると、上の階からドロシ

ーさんが降りて来た。

「わーっ、エステルちゃんとヨシユア君、来てたんだ」

「こんにちはドロシーさん」

ナイアルさんは少し疲れた様子で溜息をついた。

「……これから外でコーヒーを飲むんだが、お前も来るか？」

リベール通信社から出たあたし達四人は、目と鼻の先にあるコーヒ  
ーハウス《パラル》へと入った。

「エステルちゃん、ますます女の子らしさに磨きがかかったみたい  
だね。ヨシユア君と何かあったの？」

「うん、やつぱりドロシーさんにはわかつちやう？ あの後温泉で  
ヨシユアにね……」

「そんな話をしに来たんじゃないでしょう」

ドロシーさんに言われて気分が盛り上がって答えそうになったあた  
しに、ヨシユアのツッコミが入った。

「温泉で何があつたんだって？」

ベテラン記者の勘が何かを嗅ぎつけたのか、ナイアルさんの目が鋭  
くなった。

「ナイアルさんまで……」

「すまんすまん。会社の中では話せない事を話に来たんだっけな」

ナイアルさんはそう言ってカップに入ったコーヒーを飲み干した。

「僕達、情報部について調べているんですが……何か知りませんか？」

ヨシユアの言葉を聞くと、ナイアルさんは顔をしかめる。

「正直、役に立ってる情報はつかめていないな。取材を申し込んでも情報部の兵士はだんまりだし、聞き込みをしているだけで正門から叩きだされた。……編集長も情報部を恐れてビクビクしてる」

「……そう、残念ね」

あたしは落胆してそう呟いた。

「では、何か変わった事は無いですか？」

「そうだな……最近、エルベ離宮に居る友人と連絡が取れなくなっ  
たな。そういえばあそこにも情報部の連中がたむろしていたな」

「それって、重要な話じゃない！」

ヨシユアの質問に答えたナイアルさんの言葉を聞いて、あたしは大声を上げた。

「……何だあ？」

ナイアルさんは驚いて目を丸くした。

「それって、クローゼがそこに監禁されてるかもしれないってこと  
じゃない」

「……うん、そうだね」

あたし達の話聞いたナイアルさんは真剣な顔で、もう一度調査を

することを約束してくれた。

「……ナイアルさん、無理しないでね」

「わかってるって」

あたし達はコーヒーハウスを去ろうとして、店の一角に真新しい写真が貼られているのに気がついた。

そこは、店の自慢の辛口カレーを完食した人が記念に写真をとって展示するコーナーみたい。

一言コメントは『楽勝!』と書かれていて、カメラに向かってピースサインをするリースさんが微笑んでいた。

「ああ、そのシスターさんは今日初めて来店したお客さんだね。あつという間にこの店で一番辛いカレーを食べてしまったんだよ」

店主さんの言葉にあたし達は苦笑しながらお店を後にした。

## 《王都グランセル 北区画》

ボクたちがホテル《ローエンバウム》に入ると、フロントでは熊のような大きな男の人が話していた。

「ジン様、昨日はよくお休みになりましたか？」

「ああ、気遣い感謝する。これで今日の予選も突破できそうだな」

「それは、良い事でございます」

フロント係の人に見送られて、ジンさんはホテルを出て行った。

ボク達は準遊撃士の紋章をフロント係の人に見せて話を聞くことに

する。

「あの……情報部について何かご存じの事はありませんか？」

「ええ、クローディア姫の事はここに宿泊されている遊撃士の方に  
お聞きしました。全く悲しい事ですね……」

フロント係の人はそう言って顔をしかめた。

「たいした事はお話しできないのですが、情報部がらみで変わった  
事と言えば、エルベ離宮が一般公開禁止になったと言う事でしょう  
か。普段エルベ離宮は王都の市民や観光客に開放されているのです。  
それが情報部が何かと理由を付けて立ち入り禁止にしているのです」  
「なんでだろう？」

ボクがそう呟くと、アス力は考え込む仕草をして話し始める。

「多分……クローゼを監禁するのに都合のいい場所だからじゃない  
かな？ ほら、お姫様なんだし、情報部がクローゼを利用しようと  
考えているなら、粗末な建物で監禁したりしないはずよ。それに庭  
も広いから外部から目も届きにくいし」

「すっごい、やっぱり頭がいいんだねアス力は！」

「ま、まあね」

アス力はちよつと照れながらそう答えた。

「ところで、さっきの大きい男の人は？ ただものじゃないって感  
じがしたんだけど」

「ええ、彼はカルバード共和国からいらした遊撃士の方で、ジンさ  
んとおっしゃいます。現在東区画のグランアリーナで開催されてい  
る闘技大会に参加されているそうですよ」

「何も事件が起こらなかつたら、見に行けたのに残念だね」

話題が世間話に移ると、ボク達の雰囲気は柔らかくなった。

「今年はデユナン侯爵が豪華賞品を用意されているそうですよ。なんでも、優勝チームはお城に招かれてデユナン公爵の食事会に参加できるとか」

はは、アスカならそんなのいらないうって言いそうだね。  
でも、アスカの反応は予想と全く違った。

「その大会には今からエントリーできるの!？」

まさか、アスカは公爵さんに会いたいのか？

やっぱりアスカはお金持ちの方がいいのか……。

そうだね、ボクは頭も良くないし、もっとアスカを幸せに出来る男性は星の数程いるよね。

「アタシは公爵何かに興味は無いけどさ、そうすれば城の中に入れる口実が出来るじゃない」

その言葉を聞いて安心したボクは嬉しくてアスカに抱きついてしまった。

「ちょ、ちょっとシンジ……」

「ご、ごめん……」

ボクの顔を見てアスカは察してくれたのか、安心させてくれるように抱きしめ返してくれる。

「バカね、エヴァンゲリオンのパイロットだったアタシの事を本当に解ってくれるのは世界でただ一人、シンジだけだよ」

「アスカはボクの事も解ってくれてるんだね……」

「いやあ、青春してますね……」

## 《王都グランセル 南区画》

僕達はナイアルさん達と別れた後、王都にあるモルガン將軍の自宅に寄ると、將軍の孫娘も情報部に誘拐されている事を知った。

国境警備隊の動きを封じるためだろう。

モルガン將軍はアリシア女王様の緊急事態なのに王都に戻る事も出来ないわけだ。

「ひどい、小さい子を巻き込むなんて！　きっと今頃両親と離れ離れになって寂しい思いや怖い思いをしているはずよ！」

……そうやって、誘拐されたこの気持ちになって怒るところがエステルらしいね。

僕にはそんな考えは浮かばなかったよ。

やっぱり君は太陽みたいな子だよ。

「……ん？　あたしの顔に何かついてる？」

「エステルの怒った顔もかわいいなって思ってた」

「……っ！」

僕がそう言つとエステルは真つ赤な顔で俯いてしまった。  
ちよつと、意地悪しちゃったかな。

「おや、そこに居るのはエステル君じゃないか！」

僕とエステルがグランセルの通りを歩いていると、男の人が声をかけて来た。

街中でも釣竿を背負ったその姿は、釣公師団のロイドさんだった。

「あ、ロイドさん！」

「どう、あれから釣りライフは楽しんでいるかい？」

「まあぼちぼちと……」

ウソだ。

思いっきり満喫しているくせに。

「そういえば、リベール通信で読んだよ。とてつもない怪物を釣り上げたんだって？」

「うん、まあ……」

「その話を聞いたら、団長が是非エステル君に会いたいつて言ってね。名誉団員では無くて正式に団員に迎えたらしいよ」

「そ、それは光栄ね」

興奮してエステルの腕を取るロイドさんに対してエステルは若干引き気味だ。

「これもエイドス（空の女神）のお導きかもしれない。今、フィッシャー団長が本部に居らっしゃるんだよ！」

エステルは困惑した様子でロイドさんにつかまれた手を振り切った。

「あの、あたし達急いでいるので……」



エステルがそう言って断ると、ロイドさんは落胆した表情を浮かべる。

「残念だな……。今度の王都の地下水路での釣り大会も中止になっちゃうし……」

地下水路？

僕の頭にある考えが浮かんだ。

「エステル、釣公師団に行こう」

「ええっ、どうして！？」

「……ロイドさん、釣公師団には王都の地下水路の地図もあるんですよね？」

「ああ、女王様の許可も頂いて、入口の鍵も預かっているよ」

エステルもようやく意味が分かったらしくて目を輝かせて僕の方を見つめる。

「ヨシユア、すっごい！ あたし一人だったら気がつかなかったわ！」

「助けてもらっているのは僕もだよ、エステル」

僕達は釣公師団の本部に行き、話せるところまで事情を話して力を貸してもらう事にした。

《王都グランセル 東区画》

ホテルのフロントでシンジと抱き合っていたアタシ達は、ジンさん

を追いかけるのがすっかり遅くなってしまった。

アタシとシンジは手を繋ぎながら通りを駆けて行く。

「もうジンさんはとくに会場に入っちゃっただろうね……」

「アタシ達は多分選手控室に入れてもらえないわね……」

仕方無くアタシ達は闘技場が行われる《グランアリーナ》への入場券を買う事にした。

アタシが財布を出してチケットを買おうとすると、シンジがそれを押し止めた。

シンジの行動の意味を察したアタシは大人しく引き下がる事にする。

「あの、入場券のペアチケットをください」

シンジが受付のお姉さんに話しかけたその声は少し震えていた。

「ふふっ、かわいい彼女と今日はデートですか。楽しんで行って下さいね」

「は、はい」

シンジが赤い顔をしながら二枚のチケットを受け取った。

アタシはシンジからチケットを受け取ると、甘えるようにシンジの肩に抱きついた。

「こ、これは情報収集のためだから……」

「ま、情報収集のついでにデート気分を味わったってことにすればいいじゃないの」

アタシが耳元でそう呟くと、シンジは嬉しそうに頷いた。

「うつわー、予選なのに凄い盛り上がりね」

観客席につくと、座る場所がないぐらい賑わっていた。  
今は試合の休憩時間のようにでざわざわしている。

「どうやら、立ってみるしかないみたいだね」

シンジは残念そうにそう呟いた。  
しかし、アタシ達は懐かしい声に呼び止められた。

「アスカさん、シンジさん、こんな所で会えるなんて面白い偶然です  
ね」

「メイベル市長さんに、リラさん！」

「……その節はお世話になりました」

リラさんは相変わらず端正な顔のまま礼儀正しくお辞儀をする。  
なんか、表情を変えないリラさんを見ると、あのファーストの  
やつを思い出しちゃうのよね。

「何でメイベルさんが王都に？」

「実は、先日王都で重大な発表があるとリベール王国内の各都市の  
責任者宛てに召集の手紙が届きましたの」

シンジの質問にメイベルさんはそう答えた。

「重大な発表？」

「私も詳しい事はわかりません。今の王都を包む物々しい雰囲気  
何か関係があるのかどうかも……」

「……お嬢様、そろそろ戻りませんか」

リラさんがメイベルさんに向かってそう呟いた。

「あら、もうそんな時間？ ではアスカさん、シンジさん、私達はこので失礼しますね。私はこの街を包む重い雰囲気嫌で気晴らしでやって来たんですの」

そう言つて、メイベルさんは会場の隅に居る情報部の特務兵を睨みつけて立ち去つて行つた。

アタシ達は幸運にも一番前のベンチのような席に座る事が出来た。

「あ、試合が再開されたみたいだね」

試合は五人組の団体戦で行われるみたい。

西側から出て来たのは、カルバード共和国からやってきた五人組の戦士のチーム。

第三新東京市に居た頃のテレビで見たサムライと言う物に感じが似てるかな？

東側から出てくる対戦相手も偶然にもカルバード共和国出身らしいわね……。

つて、ジンさん一人しかないわよ！？

「もしかして、一人で戦うつもりなのお！？」

驚いたアタシは思わず叫んでしまった。

ジンさんは観客席に居るアタシの方をチラリと見ると、余裕を持った笑みを浮かべた。

「試合開始！」

合図と共にジンさんは突然、体に気合を込め始めた。

「はああああ……！ 龍神功！」

ただならぬ気迫に対戦相手の五人もたじろいだ。

「ふん、五人も居て誰もかかって来ないのか？ ……面倒くさい、五人まとめてかかって来い！」

ジンさんがそう言うと、対戦相手の五人はすっかり挑発に乗ってしまった様子。

「生意気な若造だ……行くぞ、ケン、チャー、コウジ、ブー！」  
「目にももの見せてやりましょう、チョーさん！」

五人がジンさんの正面から斬りかかるように迫る……！  
するとジンさんは手のひらを合わせて光のようなものを発生させた！

「奥義・雷神掌！」

爆音と閃光に包まれる五人。

一番離れていた所に居た一人を除いて、四人全員が倒れ込んでしまった。

残った一人も混乱してふらふらとしている。

「ケン！ 後ろ……！」

観客席から悲鳴のような声が上がったけど、最後の一人もジンさんの背後からの手刀によって倒されちゃった。

「ジン・ヴァセック選手、決勝進出！」

アタシとシンジはジンさんが一人で五人を倒すのを見て、呆然としちゃった。

我に返ると、今度こそジンさんを逃さないように、急いで選手控室から出てくるジンさんの所へ行った。

「あの、ジンさん。アタシ達は遊撃士協会の者なんですけど……」

アタシが熊みたいに大きいジンさんの背中に声をかけると、ジンさんは穏やかな笑顔を浮かべてアタシ達の方を振り返った。

「おう、観客席で大きな声を出していたお嬢ちゃんか」

あ……何となく雰囲気は加持さんに似てるかな。

アタシはふつと懐かしい感じを受けた。

するとアタシと繋いでいるシンジの手に力がちよつと力が入った。

「アタシは、準遊撃士のアスカ・ブライト。そしてこっちがアタシの彼のシンジです！」

アタシは彼という単語を強調して紹介した。

シンジの手の力が抜けて行くのが分かる。

フツ、そんなに出会った男性みんなに嫉妬されちゃったら困るわよ。しっかりしなさいよ、シンジ。

「そうか、同じ遊撃士なのか」

ジンさんは感心した様子だった。

「あの、アタシ達お話があつて……」

アタシがそう言いかけるとジンさんは雰囲気を感じてくれた様子。

「続きは、遊撃士協会で話そうか」

アタシ達はジンさんと一緒に遊撃士協会に戻る事になった。

# 《王都グランセル 遊撃士協会》

あたし達が釣公師団の本部から戻ると、アスカとシンジも情報収集から帰ってきていたようだ。

うわ、熊のように大きな人も居る。

エルナンさんはアスカ達の話聞いていたようだ。

そして、さらにあたし達の報告を聞くと、じっと考え込んでいる様子だった。

「少し考える時間を頂けませんか？」

エルナンさんはそう言って時計を眺めると、あたし達に少し早目の夕食を取ることを提案した。

「食事代はこちらで支給しますので、しっかり鋭気を養ってください」

「本当！？ やったー」

あたし達五人は同じ南区画にある居酒屋、《サニーベル・イン》に食事に行く事にした。

店の中では上手なピアノの演奏が聞こえる。

誰が弾いているのかな……と思ったら何とオリビエだった。

「オリビエ、何でこんな所に居るの？」

あたしは演奏を終えて拍手に包まれるオリビエに話しかけた。

「情報収集の都合で酒場に寄ると、いいピアノがあったので演奏してみたくなったのさ」

「……まったくお前は自由なヤツだな」

オリビエの隣にはあたし達が初めて会う人が立っていた。  
体格も良くて強そうね。

「彼はミュラー。僕の同郷の幼馴染で、帝国大使館を護っている軍人さ」

「オリビエさんは帝国大使館に行っていたんですか？」

「ああ、そうだ……まあ詳しい話は遊撃士教会に戻ってからすることにして、食事を楽しもうじゃないか」

シンジの質問にそう答えると、オリビエはあたし達のテーブルの隣の席に着いた。

「後で遊撃士協会で話があるんだから、お酒はダメだからね！」

「おや、つれないね……少しぐらい、いいだろう？」

オリビエさんはそう言った直後、怒った感じのミュラーさんの顔を見て動きを止めた。

「……はい、ごめんなさい。お酒は飲みません」



アスカが怒るよりミユラーさんの方がよっぽど効果があるわね。  
あたし達はオリビエからシエラ姉にいろいろひどい目に遭わされた  
と言う話などを聞かされながら食事を終えた。

「あれ、中から食べ物匂いがする」

あたし達が食事を終えて遊撃士協会に戻ると、遊撃士協会の建物の中にはあたし達の他に手分けして情報収集をしていたシエラ姉やアネラスさん、アガットなどみんなが戻っていた。  
みんなはパンとスープの入った皿を手に持っている。  
どうやらあたし達より簡素な食事を振る舞われていたようだ。

「何だか、あたし達だけ良い食事して申し訳ないわね……」

あたしが遠慮がちにエルナンさんにそういうと、エルナンさんは穏やかに微笑む。

「明日の作戦の主役を張ってもらうんですから、当然の待遇ですよ」  
「主役？」

エルナンさんの言葉の意味が分からず、あたしは首をひねった。

「明日の作戦はチームを二組に分けて行います。一つは王城に行き、アリシア女王陛下の安否を確認し、場合によっては保護・脱出をさせるチーム。もう一つはエルベ離宮に行き王女クロード・ディア姫殿下を救出するチームです。この作戦は同時にやらないと意味がありません。女王陛下を救えば王女の身に危険が迫るかもしれませんし、警備も厳重になります。その逆もしかりです」

「ふーん、それでそのチーム分けはどうするの？」

エルナンさんの作戦に感心した様子のアスカが尋ねる。

「王城に行くチームはジンさんとエステルさん、ヨシユアさん、アスカさん、シンジさんの五人です。ジンさんのチームは明日行われる格闘技大会で優勝して、デユナン侯爵の食事会への参加の権利を手に入れてください。王城に入ってからの手はずはまた私が整えます」

「えーっ！？ ボク達が優勝！？」

シンジがそう叫ぶと、エルナンさんは穏やかに微笑んでさらに言葉を重ねる。

「ええ、シンジさん達が優勝しないと作戦は全て失敗になってしまいますから、頑張ってください」

「手え抜くんじゃないぞ」

「あのあの、無理しないでください」

「あらあ、無理しないと勝てないんじゃないの？」

「フツ、期待しているよ」

「シンジ君、ファイトだよ！」

弱気になったシンジを部屋に居るみんなが励ます。

シンジはプレッシャーからか、ちよつと青い顔になっている。

「他の皆さんはエルベ離宮攻略の準備を整えてもらいます」

その後作戦についての話し合いが行われ、解散となった。

あたし達はホテルに部屋を取ってもらっている。

四人で二部屋。

エルナンさんはどうやって部屋割を取っているのかな……と少しドキドキしたけど、あたしとアスカ、ヨシユアとシンジで一部屋だっ

た。

そ、その……まあ当然よね！

あたしはその日の夜、寝息を立てるアス力を抱きしめながらも全然眠れなかった。

明日の闘技大会が楽しみで仕方無かったからだ。

不謹慎かもしれないけど、あたしは強い相手と戦える事にワクワクしていた。

ごめんね、アス力。

あたし、まだまだ女の子っぽくならないみたい。

でも、いつかヨシユアに……って何考えてるのあたし！？

「痛い！ エステルの寝相悪すぎよ……」

いつの間にかあたしはアス力を投げ飛ばしてしまったみたい。

あたしはアス力に謝って再びベッドに入った……。

## 第八話 王都跳梁（中編）

《王都グランセル 東区画 グランアリーナ入口》

「おはようございます、ジンさん。メンバーが見つかって良かったですね。お一人で戦っているのを見て、私も不安でしたわ」

「はは、俺も予選は勝ち抜けたものの、これからは一人でやって行くの辛さを感じていましたから、助かりましたよ」

闘技大会が行われる日の早朝。

会場であるグランアリーナの入口についたボク達は受付のリーファさんに声をかけられた。

ジンさんがそれに受け答える。

「聞けば四人とも遊撃士さんとか。私も普段から遊撃士さんには助けてもらっているので、ご健闘をお祈りさせていただきますね」

「はは、あたし達まだ半人前なんですけどね」

リーファさんはボク達に笑顔を向けてくれた。

エステルは照れ臭そうに受け答えしていたけど、ボクには答える余裕がなかった。

「はい、入場手続きを完了しました。これからは欠員が出ましても交代できないのでご了承ください」

リーファさんに見送られて、ボク達はグランアリーナの建物の中に入り、右手の蒼の間と呼ばれる選手控室に入った。

予選とは違って本戦と言うだけあって、強そうなチームの人達がすでにたくさん部屋の中でそれぞれ固まっていた。

「賭博防止のためだとは言え、対戦相手が分からないと言うのは難しいわね。対策の取りようがないし」

「へえーっ、アスカはそこまで考えているんだ」

「敵を見て、戦術オーブメントを付け替えたりしているのよ」

アスカとエステル話を聞きながら、ボクは溜息をついた。

「……緊張のしすぎは良くないよ」

「そう言われても、優勝なんて自信が無いよ……」

「やっぱり、あの後眠れなかったんだ？」

「うん、一睡もできなかった」

ボクの緊張を解すためなのか、ヨシユアが僕に話しかけてきた。

「シンジ、何情けない事を言ってるのよ！」

「でも、ボクは今まで何の力もない中学生だったんだし……」

ボクの言葉を聞きつけたのか、アスカは怒った顔で怒鳴った。

「リベールに来てから、アタシはシンジがどんなに努力して強くなつたかわかってる。多分シンジ本人よりもね」

アスカは腰に手を当てて堂々と自信たっぷりにそう言い切った。その言葉にボクはだいぶ励まされたけど、それでもボクは不安を隠せなかった。

すると、アスカはそんなボクに痺れを切らしたのか、ボクの胸倉を

つかみ上げた。

「シンジ、アタシが負ける事は大嫌いだってことは知ってるわよね？」

「う、うん……」

「じゃあアタシに悔しい思いをさせないように死ぬ気で頑張りなさい」

「おいおい、仲間割れは勘弁してくれよ」

ジンさんが困った感じでそう言うと、アスカはボクを放りだすようにして放した。

「確かに、アスカのためにも頑張らないといけないな」

ボクは拳を握りしめてそう呟いた。

「あはは、シンジはやっと気合が入ったみたいだね」

エステルにそう言われて、ボクは後ろ向きだった気持ちさが前向きになっっている事に気がついた。

「負けた時はさ、僕達のせいにしてくれてもいいから。自分は全力で頑張ったって思えばいいよ」

みんなの励ましを受けて、ボクはさっそく試合に使う戦術オープメントの選択を始めた。

今まで何となくアスカの指示通りにしていたけど、他人任せにして後悔はしたくない。

アスカの決めてくれたオープメント配列をいじるなんて怒るかな…

…。

ボクは視線を恐る恐るアスカの方に向けると、アスカは黙って微笑んでくれた。

多分、ボクの好きなようにしろってことだね。

「シンジがどんなオーブメントを使うか見て、アタシが使うオーブメントを決めるわ」

そこまでアスカはボクに合わせてくれるんだ。

「でも、今度は戦いは男の仕事だって言わせないわよ。アタシも隣に居るんだからね！」

アスカはそう言うときボクの鼻を指でちゃんと軽く突いた。

## 《グランアリーナ 試合会場》

主催者であるデュナン公爵が席に座り、闘技大会の開始の合図がされたみたいで、観客席からの空が割れるような大歓声が控室に居るあたし達にまで聞こえてくる。

「対戦相手は、まさかあのボクっ娘チームじゃないわよね？」

「まあ、確率的には低いけど、あり得ない事は無いね」

「それとも、あのレイヴンチームに当たるのかな？」

「さあ、どちらにも当たらない事は無いんじゃないかな」

あたしは試合に呼び出されるまでの間、ヨシユアと先ほど控室にまでやってきた『カプア一家&レイヴンチーム』の事を話していた。あのジョゼット達の居るカプア一家は小型飛行船の修理代を稼ぐた

めに出場することになって、レイヴン達と手を組む事にしたんだって。

カプア一家って空賊なんじゃないの？

そんな人達も参加できるなんて太っ腹といふかなんというか……。それに、ジョゼット達とレイヴン達はいつの間に関わり合っただろう？

あたし達が出場することを知って、試合前に向かい側の控室からわざわざあたし達の所に宣戦布告に来たんだってさ。

いろいろごちゃごちゃあたし達に向かって言ってきたんだけど、あたしが正々堂々闘おうって握手をしたら、みんなやる気をなくした顔をして引き返して行っちゃった。

あたし、何か変なことしたかな？

ヨシユアは笑いながら別に何も変な事をしていないって言うてくれたけど。

「それでは、本日の第一試合を開始したいと思います。南、蒼の組  
武術家ジン以下遊撃士チーム！」

司会者のアナウンスがあたし達のチームの出番が来た事を告げる。しよっぱならなんてビックリね。

「北、紅の組　カプア一家とレイヴンチーム！」

まさか、本当にジョゼット達のチームと対戦することになるなんてね。

あたしはヨシユアと顔を見合せて苦笑するしかなかった。

「それでは……位置について……」

あたし達はアナウンスが流れるとすぐに試合会場に出て、対戦相手



のチームと向かいあった。

相手チームは、短剣を装備したレイヴンの二人、デインとロッコ、そしてジョゼットのお兄さんのキールが前に出ている形。

大砲を持ったジョゼットのお父さんのドルンさんと導力銃を装備したジョゼットが後ろに構えるみたい。

迎え討つあたし達の方も、ジンさん、ヨシユア、そしてあたしが前に出て、後ろに導力銃を装備したシンジとアスカが控える形をとっていて、同じようなものだ。

試合前の緊張が高まってきた。

しかし、そんな雰囲気をぶち壊しにするような歓声が観客席の方から上がった。

「やつほー、エステルちゃん、アスカちゃん！ 良い写真撮るから頑張つてねー！」

「ドロシーさん！？」

観客席から間の伸びたような声をかけてくるそばすが印象的なピンの髪の眼鏡の女の人は、リベール通信社の新人カメラマンでナイアルさんの後輩の、ドロシーさんだった。

「ナイアル先輩からエステルちゃん達が出場するって聞いて駆けつけて来たんだよ！ 良い撮影ポジションも取れたし！」

あたし達が驚いてポカンとドロシーさんの方を見ると、司会者の人が気まずそうに声をかけて来た。

「あの……試合を始めたいと思うので、正面を向いてください……」「は、はい……」

あたし達は照れながら正面に体の向きを戻した。

相手チームも毒気を抜かれて気分が白けてしまったようだ。

「それでは……試合開始！」

司会者の合図と共に試合が始まった。

「みんな、あの大砲の爆風に巻き込まれないためにも、固まらないようにするんだ！」

ヨシユアがドルンさんが小脇にかかえている導力砲を指差してそうあたし達に向かってそう警告した。

「キールさんの爆弾もあるしね！」

あたしはそう答えると、試合会場の広さを活用するため、横に飛び退いた。

相手の前衛三人は散開したあたし達を見て、真ん中に居るジンさんに狙いを定めたようだ。

「おっと、こりゃきついな」

ジンさんは迫ってくる三人から逃れるように後ろに後ずさった。

調子づいてジンさんを追いかける三人。

……ふっふっふ、それはアスカの考えた作戦なのよ。

「エアロストーム！」

「エアロストーム！」

アスカとシンジの声が重なり、ジンさんの正面、相手チームの前衛三人が居る場所に突風が巻き起こる。

発動範囲が重なった風の魔法は威力をさらに増したのか、巨大な竜巻となって三人の体を空高く舞い上げた。

「うわあー」

「ひえええー」

「うおおおー」

悲鳴を上げるキールさんとディンとロツコ。

ディンが一番最初に地面に叩きつけられ、その上にキールさんとロツコが折り重なるように着地した。

「くそ、てめーら、早く退きやがれ、このグズ！」

ディンがそう言った言葉がロツコの怒りを買ったみたい。

「なんだと、お前がデブだから一番最初に落ちたんだろ！」

「まあまあ、今は試合中だぞ？」

キールさんが仲介に入るけど、ディンとロツコの言い争いは試合そっちのけで続いている。

「ちよ、ちよっと、二人とも、キール兄の話を聞けよ！」

「お前ら、言い争いしている場合じゃないだろう？」

後ろの方でその様子を見ていたジョゼットとドルンさんも動揺している。

よし、今がチャンスね！

あたしとヨシユアは、サイドから後衛のジョゼットとドルンさんにそれぞれ接近していたんだ。

「う、うわあ！ 来るなこの暴力女！ 色気無し！ 怪力女！」

ジヨゼットは慌てて銃を構えるけど、甘い！

すでにあたしの棒の間合いに入っているもんね！

「言いたい放題言ってくれちゃって！ うりゃ！」

あたしは棒でジヨゼットの銃を持っている手を思いっきり引っ叩いてやった。

「うわっ！」

悲鳴と共に銃はジヨゼットの手を離れ、地面へと転がった。

「これじゃあ、手がしびれて銃が持てないじゃないか……」

ジヨゼットは悔しそうにあたしを睨みつける。

「へへん、勝負あつたわね」

あたしはジヨゼットに向かってそう言った後、ヨシユアの方を見ると、ヨシユアも短剣でドルンさんかなりの傷を負わせたようだ。

ドルンさんの導力砲は至近距離を狙うのには向いていないし、一度発射すると再充填まで時間がかかるため連射ができないと言う弱点をついたみたい。

ヨシユアはドルンさんの横や背後に回り込んでドルンさんに傷を負わせたのだろっ、ドルンさんももう戦う気力が無くなっていたみたいだ。

言い争いをしていた他の三人も再びアスカとシンジのエアロストーム攻撃に引っ掛かったみたいで、さらに昨日の試合でジンさんが見

せた技、奥義・雷神掌によって追い打ちをかけられたらしい。三人ともガツクリと膝を折って、へたり込んでいた。

「そこまで！ 勝者は遊撃士チーム！」

審判も兼任していた司会者の人がそう言うと、会場は歓声に包まれた。

「ふう、今回の試合は楽勝だったわね！」

「相手が運良く仲間割れしてくれたからね」

あたしとヨシユアがそう話す中、シンジは歓声に包まれてとても照れ臭そうにしていた。

「こんなにたくさんの方の前で褒められるなんて初めてだよ」

「ほら、もっと堂々と胸を張りなさい」

でも、あたし達の晴れやかな気分もそこまでだった。

明日の対戦相手となる『特務兵チーム』の試合を見たあたし達は明日の決勝戦は一筋縄ではいかないだろうと思いきらされた。

「それでは、本日の第二試合は、南、蒼の組 王国情報部特務兵チーム！」

特務兵チームは、全員顔が隠れる兜を被っている不気味な感じのチームだった。

前衛は、ジンさんと同じぐらい立派な体格をした大男と、兜からはみ出るほど長い髪をした兵士。

その兵士の鎧の形から、女性兵士なのだとあたし達は推測した。背後を固める三人の兵士も連携がうまく取れている感じだった。

その特務兵チームが華麗なチームワークであっさりと勝利を手にしたのを見たあたしは、身震いを感じた。

《王都グランセル 東区画 エーデル百貨店》

試合を終えた僕達は、明日の試合に備えて傷薬などを買ったためにエーデル百貨店に向かった。

明日の対戦相手は手強く、長期戦になりそうだと言う結論に達したからだ。

僕が薬のコーナーやアクセサリーのコーナーでシンジと一緒に品物を調べていると、エステルとアスカが紅茶売り場の女の店員さんに声をかけられていた。

「あそこでぬいぐるみを見ている女の子、ここ数日毎日一人で来てるんです。親の事について尋ねると、しばらくしたら迎えに来てもらうから大丈夫、って答えるんですけど……」

「全然迎えに来る気配がないと……。だから遊撃士協会に相談しようとしてたってわけですか」

「ミディさん、アタシ達は遊撃士なんです、任せてください」

「お願いします」

ミディさんはそう言ってエステルとアスカに向かって頭を下げた。

僕がぬいぐるみ売り場の方に視線を移すと、黒いリボンを頭に付けた白いフリルのついたドレスを着た小さな女の子が立っていた。

多分、ティータと同じ年ぐらいだろう。

「こんにちは、ぬいぐるみが好きなの？」

「お姉さん達、誰？」

「アタシはアスカ。で、こっちがエステルよ」

「ふうん、私はレン。で、お姉さん達は何でレンに声をかけたの？」

理知的な女の子の態度に声をかけたアスカとエステルも戸惑った様子だった。

「……ねえ、レンちゃんのパパとママはどうしたの？」

「何、またその話？ レンが一人でいるとたくさんのお節介な大人の人達がその声をかけてくるのよね」

アスカが単刀直入に両親の事を尋ねると、レンはウンザリといった感じで溜息をついた。

「だって、パパとママがいないと寂しくない？ 不安にならない？」

「別に、寂しくなんかないわ。レンは自由を満喫しているの」

親が居なくても平気だといったレンにアスカはショックを受けたようだ。

慌ててエステルがフォローに入るように質問する。

「でも、レンちゃんみたいな小さな女の子が一人でうろつろしていたら危ないよ？ お姉さん達と一緒に行かない？」

「レンのパパとママは大事な用があるから、しばらくここで待っていなさいって言われたの」

「お店の人にはレンちゃんを遊撃士協会で預かっているって伝言をお願いするから、お父さんとお母さんが戻ってきてても平気だからさ」

「じゃあ、エステルとアスカが遊んでくれるならついて行ってもいいよ？」

レンにそう言われてエステルは苦笑している。

アスカも苦虫を潰したような顔をしながらも何かを思いついたような顔をしてエステルに話した。

「ねえ、ティータと同じぐらいの年だから良い遊び相手になれるんじゃないかしら」

「そうね」

エステルはアスカに向かってそう頷くと、またレンに向かって笑顔で話しかけた。

「お姉ちゃん達は忙しくて遊んであげられないけど、ティータっていうレンちゃんと同じ年ぐらいの子が居るの」

「その子なら、レンの遊び相手になってくれるの？」

レンは嬉しそうにそう言うと、僕達と一緒に遊撃士ギルドについて来る事を了解した。

僕とシンジは買い物を適当に切り上げて、エステル達に合流した。レンの近くによってその顔をまじまじと見た僕は、ついこんな質問をしてしまった。

「ねえ、僕は君と会ったこと無いかな？」

「レンはお兄さんの事知らないわ」

「そうか、どこかで会った気がするんだけど……」

「やっぱりレンはお兄さんの事を見た事もないわ」

レンはそう言って首を横に振った。

「レンちゃんもヨシユアの事知らないってこんなにも言っているんだから……本当に知らないんじゃない？」

「そうだね」



僕はエステルにそう言われて頷いた。

でも、まだ僕は心の奥底で引っ掛かりを感じていた。

「うわあ、高い！」

レンに肩車を要求されたジンさんは嫌な顔をせずにレンに肩車をしながら、僕達と一緒に遊撃士協会への帰り道を急いだ。

「お帰りなさい、あなた達の活躍はちょっとしたうわさになっていますよ」

遊撃士協会に戻ると慌ただしい雰囲気の中、エルナンさんが笑顔で迎えてくれた。

でもその顔はいつもに比べて少し疲れている感じだった。

「おや、その子は？」

エルナンさんがジンさんに肩車をしてもらっているレンに気がついた。

「熊さん、ちょっと降ろして」

「おいおい、熊さんはあだ名だよ」

ジンさんが言いながらレンを床に下ろすと、レンはしゃなりといった感じで白いドレスの裾をつまんでエルナンさんに向かってお辞儀をした。

「レンです、よろしくお願いしますお兄様」

「はい、私はエルナンです。こちらこそ、よろしくお願いしますね」

「とんだおませさんね」

エルナンさんに挨拶するレンを見て、アスカはあきれたような顔になった。

「レンの両親が行方不明だって言うからここに連れて来たんだけど……」

「行方不明じゃないよ、パパとママはレンにこの街で遊んでいなさいって。しばらくしたら迎えに来るからって」

エステルがそう言うのとレンは少し怒った感じで否定した。

「ねえ、ティータは今居ないの？」

「奥で作業をしてもらっています」

アスカの質問にエルナンさんがそう答えると、アスカは困った顔になった。

「レンは早くそのティータって子に会いたいな。邪魔しないで側でおとなしく見ているから、お願い」

「わかりました、ティータさんにも休憩してもらいましょう」

エルナンさんはそう言うのと、導力通信機の受話器を取ってギルドの2階に居るティータ達と連絡を取っているようだった。

「作業を中断したようです。二階に上がってもよろしいですよ」

シンジがレンを連れて二階に上がるのを見届けると、アスカはエルナンさんに頼み込んだ。

「お願い、レンのパパとママを探してあげて」

「そうですね、もしかして何かの事件に巻き込まれてしまっているかもしれません」

エルナンさんがそう言うのと、アスカの顔色はますます青くなった。

「そんな！」

エルナンさんも言い方がまずいと思ったのか、慌ててフォローする。

「まだ、レンさんのご両親の身に何かが起こっているとは限りません。遊撃士協会の方でも情報提供をして調べてみます」

「お願いします、エルナンさん」

確か、アスカの母さんは何か大変なことになっているってエステルから聞いたことがある。

エステルも良く意味が分からない用語で説明されたって言うけど、アスカは母さんが居なくて寂しい思いをしているんだっけ。

僕は……両親は完全に死んでしまっているって分かっているから諦めがつくんだけど……。

姉さんの事も……。

「ティータも、すぐあの子と友達になれたみたいだよ」

「そっか、よかったわね」

シンジが二階から降りてきてそう言うのと、アスカは安心した様子でそう言った。

気がつくのと、受付のあるこの一階が人が集まって来ているのが分かった。

多分、エルナンさんに報告をしに来ただけど、みんな待っていて

くれていたんだろう。

僕達はみんなに謝って、遊撃士協会を後にしてホテルに戻ることにした。

### 《グランアリーナ 選手控室》

次の日、アタシ達は何の作戦も思いつかないまま、試合当日を迎え、蒼の間で待機していた。

エルナンさんに知恵を借りようと思ったけど、エルナンさんはエルベ離宮に捕らわれたクローゼを救出するための作戦で忙しいみたいだし、レンのパパとママの事もあるし。

闘技大会に関しては自分達の力で何とかするしかなかった。

「昨日みたいにおびき寄せ攻撃も効かないだろうし、もう出たところ勝負、臨機応変に戦うしかないわね」

「アスカ、それって作戦つていえるの？」

「ぐっ……痛いところ突くわね。結局アタシは何も思いつかなかったのよ！」

アタシはやケになった感じでエステルにそう答えた。

「アスカ、ボク達も頑張るからさ。そんなに肩に力を入れないで自然体で行こうよ」

気がつくとしんじがアタシの肩に優しく手を置いて励ましてくれた。

「しんじ、昨日はあんなに緊張していたのに、どうして今日はそんなに落ち着いているのよ？」

「何だかわからないけど、ボク達なら負けないうて気がするんだよ」  
シンジが落ち着いているのを見て、アタシも心が落ち着いて来るのに気がついた。  
後は戦闘でのヨシユアの指揮に期待しよう。

「それでは、本日の決勝戦を開始したいと思います。南、蒼の組  
遊撃士チーム！」

司会者のアナウンスを聞いて、アタシ達は控室から試合会場に出て行った。  
登場したアタシ達を見て、観客席から大きな声援が上がった。  
中にはドロシーさんやアネラスさんの声が混じっている気がするけど、気にしないでおう。

「北、紅の組　王国情報部特務兵チーム！」

兜でスッポリと顔を隠した不気味な連中だけど、情報部はリシャール大佐がリベール通信で人気がでていることもあって、好感を持たれていた。

特に髪の長い女兵士の素顔は実は美人だとか、鎧の下はかなりスタイルが良いとか、そんなうわさを街でもアタシは耳にした。

アタシはその女兵士を見ると何か胸がむかつくような嫌な感じがした。

「ヨシユア」

アタシがそう言ってその女兵士に視線を送ると、ヨシユアは意味が分かったようだ。

「それでは、位置について……」

相手チームは昨日と同じように体格の大きい男兵士とその髪の長い女兵士が前列について、後列に三人の兵士が並んでサポートする陣形を取っていた。

アタシ達も奇策を用いることなく、正面にエステル、ヨシユア、ジンさんの三人、後方にアタシとシンジがつくことになった。

ただ、昨日と微妙に違うのはヨシユアがジンさんの位置とは入れ替わる形で真ん中に居て、アタシとシンジが真ん中で固まっている事だった。

「それでは……試合開始！」

司会者の合図と共にジンさんは大男の兵士と一対一に持ち込み、エステルとヨシユアは髪の長い女兵士に向かって特攻した。アタシとシンジも女兵士を射撃できる場所まで移動した。

これで、集中攻撃できる！

と思っただけど……。

その女兵士は身を翻して後ろに後退すると、何と銃を構えたの！

「あいつ、格闘だけじゃなくて、銃まで使えるの！？」

そう叫んだ後、アタシは今度はエステルがピンチに陥っている事に気がついた。

その女兵士と、後列の三人の銃口がエステルに向けられている。

「エステル！」

ヨシユアの悲鳴にも似た注意を促す声を聞くと、エステルは自分が狙われている事に気がついたようだ。

でも、逃げると思っていたエステルは意外な行動に出た。

「うりゃうりゃうりゃ……！」

そう大声を出してエステルは装備している棒を思いっきり回転させた。

「ま、まさかそんなので銃弾が防げるわけ……」

アタシはエステルの行動に呆れて思わずそう呟いた。

……でも、奇跡は起こってしまった。

発射された四発の銃弾は、タイミングが多少ズレていたとは言え、全てエステルの棒に弾き飛ばれた。

「はあ、はあ……どう？」

笑顔でそう言ったエステルは傷一つ負っていない。

相手の特務兵達は驚いてしまっているのか、動きを止めてしまっている。

シンジもアタシと同じようにポカンと口を開けてエステルを見ているのだろう。

しかし、その奇跡は再び起こせそうにない。

エステルは今の行動で肩で息をするほど体力を消耗してしまっている。

また集中砲火を受けたらひとたまりもないだろう。  
ジンさんと大男の兵士の闘いは互角のようだった。

「エステル、ひとまず後ろに退いて」

ヨシユアがエステルをかばうように前に出て、息を切らしているエ

ステルを後ろに追いやる。

疲れているエステルでは銃を持った相手に奇襲をかけることは難しい。

アタシ達は守勢に回るしかなかった。

今度はヨシユアがエステルと同じように四つの銃口の射程圏内に入る。

アタシは今度こそヨシユアがめった撃ちにされる場面を想像して思わず目を閉じたんだけど……。

悲鳴を上げたのは周りに居た特務兵達の方だった。

「うわっ」

「きゃああ」

「うおっ」

銃弾を発射出来たのは長い髪の女兵士一人だけだった。

その発射した銃弾も狙いが外れたのか、ヨシユアの腕をかすめるだけだった。

ヨシユアは特務兵達がひるんだすきに、エステルを連れて、銃の射程圏内から下がり、アタシ達の援護を受けられる場所まで退却した。アタシとシンジにはヨシユアの後ろ姿しか見えなかったからヨシユアがいったい何をしたのか分からなかった。

「こらヨシユア、二度とあんな冷たい目をしちゃダメだって言ったでしょう?」

でも試合中だと言うのに、エステルは突然ヨシユアに向かって怒鳴りはじめたの。

「ごめん、でもあの場はああするしか手が無かったから……」

「あたしは二度とヨシユアのあんな顔を見たくないの!」



エステルは目に涙を浮かべて、ヨシユアに訴えかけると、ヨシユアは真剣な顔でエステルに向かって謝った。

「わかった、もう絶対に『魔眼』の力を使わない事にするよ」

後でエステルに聞いたんだけど、前にエステルが魔獣に囲まれた時、助けようとしたヨシユアが凍りついたような目をしてにらみつけて魔獣達の動きを止めたんだって。

でも、エステルは感情の全てを失ったようなヨシユアの顔は見たくないって言ったみたい。

アタシもヨシユアの『魔眼』という能力があればこの試合にも確実に勝てそうだと思うんだけど、エステルを悲しませたくないしね。それに、アタシもヨシユアの冷たい顔は見たくない。

「こうなったら、アーツ（魔法）で戦った方が良いかもね……」

アタシとシンジは、エステルとヨシユアの影に隠れながら、何とか相手の陣形を崩そうとアーツでけん制することにした。

「ソウルブラー！」

「きゃあ！」

アタシは詠唱時間が少なくて済む魔法を後列の三人組の特務兵の一人にぶつけると、その特務兵は悲鳴を上げて倒れた。

倒れた特務兵を慌てて残りの二人が抱えて治療を施していた。

長い髪の女兵士はまた接近戦に切り替えるみたいでエステルとヨシユアにじりじりと接近していた。

数の上ではこっちが有利だけど、あの女兵士からは圧倒的な強さを感じる。

エステルとヨシユアの二人掛かりでも抑えきれないかもしれない。  
一触即発の戦いをアタシ達が覚悟した時、試合会場に電話の呼び出し音のようなものが響いた。

「何の真似だ？」

驚いた様子のジンさんの声がアタシ達の耳に届いた。

アタシ達がジンさんの方を見ると、ジンさんと戦っていた大男の兵士が両手を上にあげている。

気がつくと、髪長い女兵士も、相手チームの残りの三人も同じように両手を上げていた。

そして、特務兵の一人に耳打ちされた司会者がアナウンスを報じた。

「どうやら、王国情報部特務兵チームは急な任務が入り、試合を棄権するそうです！」

観客席にもどよめきが走る。

「ちょっと、決着を着けずに逃げる気!？」

そう怒鳴るアタシの声に答えず、特務兵チームの五人は素早く会場を後にした。

その後、アタシ達は闘技大会の優勝チームとして表彰されたけど、アタシはなんとなく気分が晴れなかった。

エステルもヨシユアもシンジもジンさんも、何か釈然としない気持ちだと言うのが伝わってきた。

「シンジの予感当たったわね」

「僕はそんなつもりで言ったんじゃないんだけど、何か悔しいよ」

アタシはシンジとそんな会話を交わしながら、遊撃士協会へと戻った。

「優勝おめでとうございます。これで作戦の第一段階は達成ですね」  
エルナンさんが笑顔でそう言ってくれて、アタシは少しうっぴんが晴れたような気がした。

「これでデユナン公爵の夕食会に招待されると言う名目で城の中にとりあえず入ることができるわけですね」

そうだ、アタシ達は監禁されているかもしれない王女様を助けると言う大事な任務があるんだ。

今夜、アタシ達は闘技大会の優勝者としてデユナン公爵の夕食会に招待されている。

そして、同時刻にエルベ離宮に捕らえられているかもしれないと言うクローディア王女、いやアタシの大切な友達クローゼの救出作戦が始まるんだ。

アタシは不安を吹き飛ばすためにシンジと繋いだ手にギュッと力を込めた。

シンジもアタシの手を握り返してくれるのを感じた。

この作戦、絶対成功させようね、シンジ。

## 第九話 王都跳梁（後編）

《王都グランセル グランセル城 大広間》

ボクとアスカの目の前のテーブルには、豪華な料理が並んでいた。こんな時じゃなかったらボクは美味しく食べられたんだろうけど……。  
隣に座っているアスカも青い顔をして、ほとんど食事に手を付けていない。

「今宵は無礼講だ、飲め飲め！」

そう言つて赤い顔でワインを飲んでいるのはこの食事会の開催者のデユナン公爵。

今、ボクとアスカは闘技大会の優勝者として夕食会に招かれている。これからボクとアスカとジンさんの三人だけで敵である情報部の特務兵がたくさん居るこの城の中からアリシア女王様を助け出さなければならぬんだ。

エステルとヨシユアはボク達と別行動を取るようになった。

女王様が居る部屋、女王宮に潜入するための変装用の服装が二人分しか揃わなかったんだって。

そう言うわけだから、ボクとアスカはワインに口を付けるわけにはいかなかった。

でも、ボクとアスカの気分が悪くなったのはそれだけじゃない。

「リゾットを作りましたわ。これならのどを通りやすいから食べやすいでしょう？」

そう言つて食事係のメイドさんがチーズリゾットを持ってきてくれ

た。

「ありがとうございます」

「……」

ボクは引きつった笑顔を浮かべてリゾットのお礼を言った。

ボク達二人の胸にざわつきを与えているのはこのメイドさんだ。

偶然かも知れないけど、このメイドさんはボク達が良く知っている人に良く似ている……。

外見だけじゃなくて、声や仕草もそっくりなんだ……。

「ねえ、やっぱりミサトがこんな所に居るわけないわよね」

「当たり前だよ、使徒に飲み込まれたのはボク達二人だけなんだから」

ボクはそう言っただけで寒気を感じたように体を震わせるアスカの手を取って落ち着かせようと励ました。

「ほら、あのミサトさんがこんな美味しそうなリゾットを作れるわけじゃないか」

湯気上げるリゾットを指差して、ボクはアスカをさとした。

とまどうアスカを前にして、ボクはスプーンですくったリゾットを冷ましてアスカの口へと運んだ。

「……おいしい」

アスカはちょっと驚いたようにそう言って、ボクに向かって微笑んでくれた。

やっとアスカが笑ってくれたことにボクは安心した。

「なんだ、その庶民的なリゾートは？」

デユナン公爵がボク達の前に置かれたリゾートを見てそんなことを呟いた。

「まあ、そなた達庶民にはそんな料理が口に合うのだろうな、ハハハ」

ボク達は怒りを感じながらリゾートを味わって完食した。

「あら、食べてくれたんですね、ありがとうございます」

「お気遣いありがとうございます」

「チーズの味が効いてて、とってもおいしかったわよ」

ボク達はやっとメイドさんと笑顔を交わすことが出来た。

「それでデユナン公爵、この夕食会で重大な発表があるとか」

夕食会の席に座っていたクラウドさんが市長さん達を代表するようにそう聞いた。

この夕食会にはボク達の他に、リベール王国の各都市の首長が招待されている。

ロレント市のクラウド市長さん。

ボース市のメイベル市長さん。

ツァイス市のマードック工場長さん。

ルーアン市は市長選挙中だと言う事でコリンズ学園長がさん来ていた。

みんな大事な話があると聞いていたから、ワインをあんまり飲んでいない様子だった。

「うむ、その事は代わりの者から説明させよう。おい、リシャール！」

デュナン公爵が大声でそう言うと、リシャール大佐が姿を現した。夕食会の席に居た人達の間から驚きの声上がる。

王国各地で事件を解決して英雄扱いになっているリシャール大佐が悪い事をしているなんてとても信じられない。

「このような席で、見苦しい軍服姿で申し訳ありません」

リシャール大佐はそう言ってデュナン公爵の隣に立つと話を始めた。

「この度、女王陛下は退位して甥であるデュナン公爵に王位を譲ることを決意なされた」

「なんですと！」

クラウドさんと同様に席についていたみんなは驚いて悲鳴に似た声を出していた。

「すなわち、デュナン公爵が次期国王となられます」

「そんな……」

メイベルさんはショックを受けた様子で口を手で覆っている。

「デュナン公爵を自分の好きなように操って国を動かそうって企みなね……見損なったわ、リシャール大佐」

アスカは小さくそう呟いて怒りで体を震わせている。

「なぜ、突然そんな王位継承の話？」

クラウドさんがそう尋ねるとリシャール大佐が答える。

「女王様はこのところ体調をお崩しになり、政治に携わることへの不安を常に申ししていたのです」

「叔母上も今年で60歳。その叔母上の不安をこの私が王位を継ぐことで和らげようとしたわけだ」

デユナン公爵はそう言って誇らしげに胸を張る。

「私は女王陛下の口から直接お聞きしなければ納得いきません！」

「女王陛下は体調を崩しており、公務が出来る状態ではないのです」

「私達には女王陛下にお見舞いのお目通りをすることも叶わないと言うのですか！」

メイベルさんとリシャール大佐の言い争いにクラウドさんも口を挟んだ。

「確か公爵様の他にも王位継承権を持つ方がいらっしたはずではないですか？」

「クローディア王女様は帝国の皇子との縁談が決まっております」  
「なるほど、それは仕方の無い事ですな」

クラウドさんはリシャール大佐の返事に納得したようだったが、アスカの怒りが頂点に達しようとしているのがボクはわかった。

「王女様を政略結婚の材料にするなんて……」

「あ、あのちよっとボク達はこれで失礼します！」



今にもデユナン公爵やリシャール大佐に噛みつきそうなアスカの手を引いてボク達は部屋を出た。

廊下に出てもアスカは怒りが治まらない様子で、今にもデユナン公爵やリシャール大佐の悪口を大声で叫びだしそうだった。

「お二人とも、どうぞこちらに。エルナンさんから話は聞いています」

ミサトさん似のメイドさんにそつと声をかけられたボクはアスカの手を引いて後をついて行った。

#### 《王都グランセル グランセル城 メイド更衣室》

デユナン公爵やリシャール大佐のワガママな振る舞いに腹が立っていたアタシは、シンジに手を引かれるまま歩いて行った。

気がつくと、アタシとシンジがミサト似のメイドに連れて来られたのは、ロッカーのようなものがあるメイドさんが着替える部屋だった。

「アスカ、怒りは治まった？」

「うん、まあ少しは落ち着いたわ」

アタシはゆっくりと大きく息を吐き出してシンジに答えた。

部屋についてからアタシは気持ちを落ち着かせようと何回も深呼吸を繰り返した。

その間シンジはずっとアタシの手を握って背中を優しくさすってくれた。

「ありがと、シンジ」

「どういたしまして。……それにしても、何でここに連れて来られたんだろっ?」

シンジがそう呟くと、入口のドアが開いてミサト似のメイドさんが姿を現した。

でも、様子がおかしい。

今までの笑顔じゃ無くて、目に涙を浮かべて辛そうな表情をしている。

「シンジ君、アスカ、ごめんね……!」

「やっぱり、アンタはミサトだったの!?!」

アタシは思わずそう叫んでしまった。

体がこわばるのを感じて、シンジと繋いだ手に力が入る。

頷いたミサトは突然、アタシとシンジを両脇に強く抱きしめ始めた。

「怯えないでアスカ、私にもう一度……失った絆を取り戻させるチャンスをちょうだい……お願いします」

ミサトの自信の無い声を聞いたアタシは、ミサトを振り払う事が出来なかった。

アタシはシンジと一緒に頬をミサトの胸に押し付けられたまま、しばらく抱きしめられていると、安らかな気分を感じるのが分かった。

「ありがとっ、シンジ君、アスカ……」

ミサトは安心したように息を吐き出した。

その胸の動きが直接アタシとシンジに伝わってくる。

アタシはミサトに抱きしめられながら次第に違和感を感じた。

果たして、今アタシを優しく抱きしめているのはミサト本人なのか。確かに、ミサトに全く優しい部分が無かったとは言わないけど、ミサトはアタシに対して腫れものに触るように距離を置いている部分があった。

加持さんの事もあって、アタシの方もミサトと距離を置いていたのはミサトも感じ取っていたはずだ。  
そんなアタシの疑問を感じ取ったのか、ミサトは呟く。

「私は、少し未来から来た葛城ミサトなのよ」  
「ええっ？」

突拍子もないミサトの言葉に、アタシは顔を離してそう叫んだ。  
シンジも呆然とした表情をしている。

「あの、何を言っているんですか、ミサトさん」  
「詳しく説明している時間は無いけど、私は二人と別れた時のままじゃなくていろいろな事を経験した未来のミサトなのよ」  
「タイムスリップとか？ そんなの現実にあり得るわけ？」  
「一度だけ起こったのよ。不思議な力だね」

アタシとシンジは釈然としない様子で顔を見合わせた。  
でも、アタシとシンジが使徒に飲み込まれて異世界にワープしたのだからあり得ない話ではないと思った。

「私はアスカが寂しい思いを抱えていたって事知っていたのに、シンジ君を特別に優しくしていた事がアスカを傷つけてしまっていたって気がついたの」

ミサトにそう言われて、アタシはミサトに対して自分が苛立った原因がはつきりわかった気がした。

「そうよ、アタシはいつでもシンジばかりが優しくされているのを見てさ……」

「ごめんね、私はアスカに拒絶されるのが怖くて、壁を作ってしまった……」

ミサトはもう一度、今度は軽く優しくアタシの事を抱きしめた。

「アタシの方もさ、ドイツに居た頃からアタシを側で支えてくれたのはミサトだってわかっていたのに、素直になれなかったのは悪かったと思ってる」

「アスカ……」

「いつも一緒に食事とかしてくれたミサトがドイツから日本に黙って行っちゃった時も寂しかったのよ」

「異動命令が急だったから、アスカに言う暇がなかったの」

それまで穏やかにアタシとミサトの様子を見ていたシンジもポツリと呟いた。

「ボクも、使徒にアスカを見捨てるような命令をしたミサトさんとアスカから聞いた今までアスカに寂しい思いをさせたミサトさんが許せないと思っていましたけど……」

「シンジ君？」

「やっぱり、ボクもミサトさんをずっと憎み続けるなんて嫌です。ミサトさんはボクに優しくしてくれた人だから」

「ありがとう、シンジ君……」

「前のようにシンちゃん、でいいですよ」

シンジがそう言うと、ミサトは声を上げて笑い出した。

何か、二人の間でしか分からない出来事でもあったのかな。

「ミサトがまともにリゾートが作れるようになっていたのは驚いたわ」

「アスカとシンちゃんに喜んでもらおうと、味覚から鍛え直して一生懸命作ったのよ」

アタシがからかうようにそう言うと、ミサトは陽気に微笑んでウィンクしながらそう言った。

「おいしかったです」

「ありがとう、シンちゃん」

なんだか、今居る場所が第三新東京市のアタシ達三人が家族として暮らしていたミサトの部屋のような懐かしさを感じた。

「そうそう、今は女王様救出作戦の最中だったわね」

ミサトはロッカーを開けるとメイドの衣装を二着取り出した。

「王女様の居る女王宮には特務兵達が見張っていて、世話係のメイドしか中に入ることができないのよ」

「へえ、メイドさんの服って一度着てみたかったんだ」

「……二着？」

シンジが不安そうな顔でポツリとそう呟いた。

「シンちゃんにもメイドさんになってもらうのよ」

ミサトはすっかりからかいモードになっている。  
そう言うところは変わらないのね。

「シンジは線の細い顔をしているし、きっとかわいいメイドさんになれるわよ」

「アスカまで、悪い冗談はやめてよ!」

「ほら、お姫様用のカツラもちょうどあるし、お化粧をすれば美少女メイドの出来上がりよ」

アタシはミサトと一緒にシンジを強引にメイドの服装に着替えさせた。

カチューシャに長い黒髪のカツラ、そしてお化粧も。

ふふ、アタシと違ったかわいさがあるわね。

## 《王都グランセル グランセル城 空中庭園》

「それではヒルダさん、後はお任せしました」

ミサトさんがメイド長のヒルダさんにそう言うと、ヒルダさんは溜息をついてボク達を見送った。

どうやら少し前からミサトさんは臨時雇いのメイドとして城に潜入していたらしいけど、いろいろ失敗をやらかしていたみたい。

今回の作戦でミサトさんも王女様と一緒に城を出ると言う事で、やっと肩の荷が下りると安心している部分もあるみたいだ。

ここに来る前に、ボク達は廊下でデュナン公爵にまた会ってしまった。

「おや、ミサトではないか? そちが連れているメイドは新人か?」

「はい……さあ、ごあいさつを」

「ユイです」

「キョウコです」

ミサトさんに促されてボクとアスカが答えると、デュナン公爵はアスカを頭のとっぺんからつま先までなめまわすようにいやらしい視線を送った。

「キョウコとやら、今夜は私と一緒に寝てもらうぞ!」

「ええっ?」

「何を言い出すの……」

ボクとアスカはデュナン公爵の言葉に驚いてあきれ返ってしまった。そして、すぐに怒りがこみ上げて来た。

「くらええええ!」

「こんのおお!」

「ぐえっ」

デュナン公爵はボクとアスカのキックを食らうと、後ろにぶっ飛んで頭を柱に強く打ちつけて気絶してしまった。

「ふふ、見事なユニゾンキックじゃない。シンちゃんとアスカの身長差もほとんど無くなったし」

そう言ってミサトさんはボクにアスカの手を握らせて、その上にミサトさんの手を重ねた。

「アスカとシンちゃんがこうやってラブラブになってくれて、私は本当に嬉しいのよ」

ミサトさんの顔はからかっている感じだったけど、ほんの少しだけ

真剣な表情が混じっている感じで、ボクとアス力は素直に頷いた。

「この度は公爵様にご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありませんでした」

「いえ、フィリップさんこちらこそすいませんでした」

ちよつとやりすぎたかな、デュナン公爵は白目をむいて気絶しているし。

デュナン公爵の側に居た執事のような感じの人にミサトさんが謝っていた。

「多分、いつものように脳しんとうを起こしているので、公爵様が目覚めたときはこの事は全てお忘れでしょう」

「あはは、そうだと助かります」

どうやらミサトさんはデュナン公爵に何度もセクハラのような事をされて、その度にキックとかして気絶させていたみたいなんだ。

そして、ボク達はいよいよ空中庭園にある女王宮の入口までたどり着いた。

「そこで止まれ！」

入口を守っている特務兵の二人が行く手を阻んだ。

でも、ミサトさんの顔を確認すると敬礼の姿勢に変わった。

「あなたでしたか」

「ふふ、ご苦労さま。このメイド二人は新しく女王様の世話係に任命されたのよ」

特務兵の人達がかぶとを被っていてボクから表情は見えないけど、



二人ともボクの方を見ている。  
もしかして、変装がばれてしまったんだろうか？

「あの、あなたのお名前は？」

「ユイ……ですけど」

「お名前も可憐ですね、お仕事がんばってください」

多分、アスカとミサトさんは心の中でお腹をかかえて笑っているんだろうな。

ボクとしても可憐だと言われて複雑な気分だった。

そしてボクとアスカは初めて女王宮の中に足を踏み入れた。

「綺麗な模様ね……」

アスカが感心したようにそう呟く。

豪華な宝石によって飾られてはいなかったけど、壁や柱に刻まれた細かい彫刻はとても美しいものだった。

派手さは無いけど、気品のあるたたずまいと言った感じなのかな。

ボクとアスカは辺りをキョロキョロと見回しながらミサトさんの後について行く。

「アリシア様、ミサトです」

「お入りなさい」

ミサトさんがドアをノックすると落ち着いた感じの女の人の声の中から返ってきた。

「失礼します」

ミサトさんに続いてボク達が入ると落ち着いた年配の女の人が立ち

あがってボク達に向かって微笑んでくれた。

「いらつしゃい、今日は新しい子たちなのかしら」

「はい、こちらの二人がアスカとシンジ君です」

「まあ実際にお会いできて嬉しいわ」

突然ミサトによって紹介されたボクとアスカは驚いた。

「あの女王様、なんでアタシ達の事を？」

「ミサトさんが、お茶の話題に話してくれたのよ。貴方達二人との同居生活の事をね」

「ミサト！」

アスカがジト目でミサトさんをにらみつけるとミサトさんは気まずそうに笑った。

「ミサトさんを責めないでください、ここ最近重苦しい空気を感じていた私を励まそうとしてくれたのです」

女王様にそう言われて、ボク達はここに來た目的を思い出した。

「女王様、ボク達がここに來たのは……」

「お話は落ち着いて聞きましょう」

ボク達は女王様にうながされて、席に座って紅茶を飲みながら、女王様のお手製のクッキーを食べながら、世間話をするように事情を話した。

「そうですか、リシャール大佐はやはりそのような事を……」

女王様はそう言って深い溜息をついた。

「ですから、女王様の身の安全を確保する必要があります」

「しかし、ここから逃げ出そうとした方が、逆にリシャル大佐達  
は私の身を害そうとするのではないのでしょうか？」

「それは……」

女王様に反論されてミサトさんは言葉に詰まった。

「ふふ、ちょっと言い過ぎましたか。着替えてくるのでお待ちください」

しばらくすると女王様はスポーティな服装に着替えて更衣室から出て来た。

「さあ、地下水路から外に出るのでしょうか？ 参りましょうか」

「……そこまでご存知でしたか」

「私も良くお城を抜け出していたものですから」

心なしか楽しげにそう言う女王様にミサトさんも驚いているようだ。

「それでは、脱出しましょうか」

「外には特務兵が見張っていると思うんですけど、どうやって女王様を連れ出すんですか？」

「援軍が来ないうちに強行突破よ」

ミサトさんはボクの質問にそう答えた。

「うおっ」

「ぐふっ」

入口を見張っていた特務兵の二人はミサトさんの奇襲によってあっという間に気絶させられた。

ミサトさんの後ろを女王様が、そしてアスカとボクが続いて走る。しかし、空中庭園の出口でボク達は敵に見つかってしまった！

「叔母上、どちらに行かれるつもりですか？ 女王宮から出られては困りますな」

姿を現したのはデュナン公爵とフィリップさんだった。

どうやらボク達を待ち伏せしていたらしい、というか少し前に気絶から立ち直ったみたいだった。

「何やら、面白い事になっているようだね」

そう言って姿を現したのはピエロのような服装をしたボクと同じ年ぐらいの男の子だった。

「初めまして、僕は結社の一員で”見届け人”のカンパネルラ」

カンパネルラはそう言うと、導力銃を取り出して女王様に狙いを定めた。

「女王様が逃げ出そうとしたら、殺せって教授から命令を受けているんだ」

「何ですって！？」

アスカが驚いて叫んだ。

ボクは女王様を守ろうと動こうとしたけど……。

「おっと、妙な動きをしたら僕はすぐ女王様を撃っちゃうからね」

そうカンパネルラに言われたボクは動きを止めるしかなかった。

「叔母上を殺す！？ 約束が違うではないか！」

いきなり叫び出したのはデユナン公爵だった。

「ハハ、君は何を言っているんだい。女王様が居なくなれば君はすんなりと王様になれるじゃないか」

「私は叔母上を殺そうなどとは思っていない！」

「アハハ、君は黙って僕らに従っているだけで王様になれるんだ、余計な事をしないで欲しいな」

カンパネルラはそう言って大笑いをした。

「叔母上を害そうとするやつは私が許さん！」

デユナン公爵はそう叫んで、カンパネルラにタックルをかまそうとした。

しかし、間一髪でかわされてデユナン公爵は壁に思いっきり体当たりをして気絶してしまった。

「おやおや、ただのボンボンかと思っただけで意外と根性があるじゃないか」

カンパネルラは軽く笑うと、銃の引き金を引いた！

軽い破裂音が響いた後、銃から飛び出したのは手品とかで使う万国旗みたいな物だった。

「アハハ、驚いたかい？ 言っただろう、僕は”見届け人”だって。君達は何をしようと、僕は干渉しないのさ。それでは、ごきげんよう」

驚いて呆然としているボク達の前で、カンパネルラは指を鳴らすと、煙のように姿を消してしまった。

「アリシア女王様、新手が来ないうちにお逃げください」

フィリップさんにそう言われて、ボク達は城の地下に向かって再び走りはじめた。

城の地下に降りると、地下水路の入り口ではジンさんが待っていた。

「追手は俺が食い止める。お前さん達は地下水路に早く！」

「無理しないでください、ジンさん」

「おう、女王様を頼んだぜ」

ボク達が地下水路に入ると、暗闇の中から姿を現したのは加持さんだった。

「上手く行ったようだな、ミサト」

「道案内を頼むわね、リョウジ」

予想できないことじゃなかったけど、ボクとアスカは突然の加持さんとの再会に驚いてしまった。

「シンジ君、アスカ。……久しぶりだな」

「加持さん」

「加持さん……」

加持さんはボクとアスカの手を握った後、真剣な顔になる。

「……だが、今は再会を喜んでいる時間が無いんだ、急いでついて来てくれ」

ボク達は加持さんの後をついて迷路のような地下水路を進んで行く。でも、加持さんより女王様の方が道にくわしかったのは驚いた。そして、ボク達が地下水路から出ると、そこはグランセル市街の西區画だった。

# 《王都グランセル 西區画 グランセル港》

西區画に出たアタシ達はすぐに大聖堂に逃げ込んだ。

そこには、別行動をとっていたエステルとヨシユア、遊撃士協会の仲間達がアタシ達の到着を待っていたの。

驚いたのはそこに居たクローゼが女王様の孫娘、王女様だったって事。

エステルは随分前に知っていたみたいだけど、アタシ達に黙っていたみたい。

普通の女の子として友達でいてもらいたいというクローゼの希望だったようだけど、水くさい感じがするわよね。

合流したのも束の間、アタシ達はまたエステルとヨシユアと別行動で、ミサトと加持さんと一緒にグランセル港へ向かう事になった。

湖のほとりに建てられた建物にアタシ達二人に来て欲しいと言う事だった。

それって、まさか……アタシとシンジだけが呼ばれたから、アタシは予感のようなものを感じていた。

ミサトと加持さんは着いたら説明してくれるって言うし……アタシ

達はまた二人を信じるって決めたんだもん、何も聞かないでついて行くしかない。

港で船に乗ろうとしたアタシ達の行く手を阻んだのは、ロボットの手のひらに乗っている小さな女の子……レンと、その後ろに居る特務兵のグループと戦車のような兵器だった。

「レン!？」

「ふふ、アスカお姉ちゃんにシンジお兄ちゃん、ごきげんよう」

……何で、レンがこんな所に居るの？

しかも、情報部の特務兵達と一緒に……。

アタシはレンの手に握られている死神が持っている大きな鎌のようなものを見て寒気を覚えた。

「まさか……」

「そう、結社の一員、執行者ナンバー15殲滅天使レン。それがレンの正体よ」

「うそ、こんな小さな子が執行者だなんて!」

アタシはレンの言う事にショックを受けて叫んではかりいた。

「一緒に居たティータはどうしたんだよ!」

「ティータはレン達の仲間として働いてもらうために情報部の基地に招待させてもらったわ」

「どうしてこんなことするんだよ……今すぐやめなよ……」

「嫌よ、レンが自分で望んでやっている事なの」

シンジとレンが言い争いをしているのを少しの間眺めていたアタシだったけど、たまらずアタシも口を挟んだ。



「レン、アンタ結社なんかすぐ辞めちゃいなさい！ パパとママが悲しむわよ！」

「ふん、パパやママなんか大嫌い！ だって、レンの事を捨てちゃったのよ！」

「そんなこと無いわ、きっとレンのママは戻ってくる！」

アタシがそう言うのと、レンはアタシを小馬鹿にしたように笑い出した。

「アスカお姉ちゃんは本当にお人好しね。まだそんなうそを信じているの？」

「じゃあレンのパパとママは……？」

「パパとママはレンが五歳の時ね、人買いにレンを売り払ってどこかに行っちゃったの」

「そんな……！」

「ママが優しいだなんて、アスカお姉ちゃんの勝手な思い込みじゃないかしら」

「思い込み……？」

レンにそう言われたアタシの頭の中にママとの思い出が浮かんで来た。

ママは小さい頃からアタシを大切にしてくれて……縫いぐるみとか作ってくれて……。

「ルシオラに幸せな夢でも見せてもらっていればよかったのに……クスクス」

そのレンの言葉がさらなる追い打ちになった。

前にルシオラさんに見せられた夢の中に出て来たママは、アタシの想像によって創られた存在だって言うのはわかっていた。

アタシは自分が傷つかないように偽りの母親像を作り上げていたっていうの？

そして、あの嫌な記憶が……ママがアタシを絞め殺そうとした時のことを思い出した。

「い、いやああああ！」

アタシは頭を抱えて冷たい石畳の中に座り込んでしまった。でも、そんなアタシを絶望の底から救い出してくれたのはシンジだった。

「アスカ！」

「シンジ？」

シンジはアタシの手を両手で握ると、アタシの目を見つめて話し始めた。

「ボクも自分の母さんが優しくかったかどうかなんて、よく覚えていないよ。小さい頃に居なくなっちゃったからさ」

戸惑って何も答えられないアタシに向かってシンジはさらに訴える。

「でも、ボクは母さんが優しくったんだって信じている、アスカだってそうなんだろう？ まだ、母さんがどんな人だったって決まってたわけじゃないんだ。希望はあると思うよ」

シンジの言葉を聞いて、アタシは胸を打たれる思いがした。

「そうね、アタシがママを信じてあげないと！ ……ありがとう、シンジ」

「そんな、お礼なんていいよ」

「アタシを何度も助けてくれたシンジの手、好きだよ」

アタシはそう言って、シンジにつかまれていない方の手でシンジの手をそつとなでた。

「何よ、勝手に仲良くなっちゃって！ レンは頭に來たわ！」

いらだった声でそう言ったレンがアタシ達をにらみつけて手に持った大鎌を構える。

アタシとシンジも手を放して戦闘態勢に入る。

ロボットの手のひらに乗ったレンの背後に居る特務兵達も、アタシ達の側に居るミサトと加持さんからも殺氣が走るのを感じた。

…… やっぱり戦うしかないの？

アタシはレンが結社の一員だとしても戦う事に気が進まなかった。にらみ合いを続けるアタシ達の前には、風の音だけが聞こえる静寂が広がっていた……。

## 第十話 解放された輝く環

《王都グランセル 西區画 グランセル港》

静かな港で、ボクとアスカとミサトさんと加持さんの四人と、ロボット兵器の手のひらに乗っているレンとその後ろに居る特務兵達と特務兵の戦車がにらみ合っている。

その静寂を破ったのは勝ち誇ったレンの声だった。

「このパテル＝マテルはね、ママのように優しくレンを包み込んでくれてパパのように力強いのよ！ 本当のママとパパなんて要らないわ！」

レンの言葉を聞いて、アスカは怒りを抑えきれないで呟いている。

「ロボットをパパとママだと思いこむ事でしか自分の傷ついた心をいやす事が出来ないなんて……悲しすぎるわ」

そんな様子のアスカをレンはせせら笑った。

「こつちには特務兵の戦車までいるのよ、バカな抵抗は止めたらどうかしら」

ボクはこの状況に歯ぎしりした。

これじゃあ、突破できないじゃないか……。

「ほら特務兵のみんな、アスカ達をやっつけちゃいなさい！」

ボクはアスカだけは守ろうと、ATフィールドを張るために精神を

集中させようとした。

でも、予想もしなかった事にボクは驚いてしまったんだ。

「きゃあ、何するのよ!」

特務兵の戦車砲が大きな音を上げて打ったのはレンの乗っている口ボット、パテルⅡマテルだった。

背後から不意をつかれたパテルⅡマテルは衝撃を受けてレンを地面に落した。

「オーホッホッホ、よくも今まで私達を利用してくれたわね」

そう言つて高笑いをして戦車から顔を出したのは情報部特務部隊の副隊長のカノーネさんだった。

「何よカノーネ、私達結社を裏切る気なの?」

地面に落ちたレンは一瞬驚いた顔になったが、すぐに振り返つてカノーネさんをにらみつけた。

「裏切りとはお笑い草ね、リシャル様に汚名を着せる事は許せません!」

「ふん、リシャル大佐は自分でクーデターを起こしたんじゃない」

「フン、全てあんたの所の教授の企みじゃないの。リシャル様の心の闇を利用してね!」

ボクは二人の言い争いを聞いて驚いた。

立派な軍人として知られるリシャルさんにも暗い心の部分があったんだね。

そして、リシャルさんは昔のヨシユアみたいにアルバ教授によつ

てそこをつけ込まれてしまった……。

「ここで結社の幹部を倒せば、女王様もきつとりシャルル様の罪を許して下さる！ 撃ちまくりなさい！」

カノーネさんがそう号令を下すと、戦車をはじめとして特務兵達は一斉射撃を始めた。

パテルⅡマテルはレンをかばって砲弾の前に立ちふさがった。

爆発と煙が上がり、次々とはがれ落ちて行くパテルⅡマテルの装甲。

「や、やめて……！ このままじゃパテルⅡマテルが壊れちゃう！」

レンは泣きそうな顔で必死に特務兵達に向かって呼びかける。

でも、なかなか砲撃は止まらなかった。

砲撃が止んで視界が晴れると、そこにはコアがむき出しになったパテルⅡマテルに守られるレンの姿が見えた。

「フフ、もう一息ね。あのコアを破壊してしまえばあの物騒な機動兵器を完全に破壊することが出来るわ、やってしまいなさい！」

カノーネさんの命令で特務兵達は武器を構える。

「止めて！」

アスカはそう叫んで駆け出して、パテルⅡマテルとレンをかばうように立ちふさがった。

ボクもミサトさんや加持さんと一緒にアスカの側にかけつけた。

「もうこの子達には戦う力は無いわ！」

「邪魔よ、そこをどきなさい！」

アスカとカノーネさんが言い争う姿をレンは驚いた様子で眺めている。

「カノーネ、結社の幹部を無力化すると言う貴方達の任務は完了したはず。すぐに攻撃を停止して、リシャール大佐の援軍に向かいなさい」

「ミサト、貴方まで何を言い出すの!？」

特務部隊の指揮官の一人であるミサトがそう命令を下すと、特務兵達も混乱してざわつきだした。

「レンの今のパパとママを壊さないでください、お願いします……」

アスカがそう言って特務兵達に向かって頭を下げると、辺りは静まり返った。

そして視線がカノーネさんに集中する。

「わ、分かったわよ……」

カノーネさんがそう言って引き下がると、ボク達の間にはホッとした空気が流れた。

「じゃあ、その幹部の子はこちらで保護するから引き渡しなさい」

溜息をついてカノーネさんがそういうと、レンは突然アスカに抱きついた。

「いやっ、レンはアスカお姉ちゃんについて行く!」

「レン?」

「だって、パパもママも、カノーネも、うそつきな大人達なんて大っきらい！　優しくしてくれたのはアスカお姉ちゃんだけなんだから！」

レンがそう叫ぶと、カノーネさんは苦い表情でレンをにらみつけた。そんなカノーネさんに向かってミサトさんが愛想笑いを浮かべて話しかける。

「まあまあ、ここはあたし達に任せて」

「くっ、何かあったら貴方の責任ですからね！」

カノーネさんはそう吐き捨てた。

「おいミサト、急がないとやばいぞ」

加持さんにその声をかけられたミサトさんはボク達を先導するように走りだした。

ボクとアスカはレンの手を取って後について駆け出していく。その後ろをダメージを受けたパテル＝マテルがついて来る。ボク達はミサトさん達と一緒に待っていた船に乗り込んだ……。

## 《ヴァレリア湖沿岸　秘密の研究所》

アタシ達が連れて来られたのは、以前に見た事のあるような場所……ネルフの発令所のようなところだった。

「もしかして……ボク達にまたエヴァに乗れって言うの？」

「……そうなのよ、ごめんねアスカ、シンジ君」



そう言つてアタシ達の前に姿を現したのはリツコだった。

「ミサトさん達はボク達をまたエヴァに乗せるために優しいフリをしたんだ……」

「シンジ君、私達の話聞いて！」

ミサトがそう言つても、シンジは頭を抱えて聞く耳を持たない。

「またボクの気持ちを裏切つたんだ！」

そう叫ぶシンジをレンが心細い目で見つめている。

アタシもシンジと同じようにショックを受けていたけど、何とか理性の方が勝つたみたいだ。

このままじゃいけないと思ったアタシはシンジを思いっきり突き飛ばした。

「アスカ？」

しりもちをついて驚いた顔になったシンジにアタシは指を突き付けてやった。

「リツコ達の話も聞かないで決めつけるんじゃないわよ！」

「アスカお姉ちゃん……」

「相手の気持ちを理解しようとしなくて自分の気持ちを押し付けようなんていけないわ」

アタシはシンジの手を握って優しく話しかける。

「人を信じる事は大切だって、シンジもアタシに言ってくれたじゃ

ない」

「……」

「今まで何回も人を信じて傷ついた事もあったけど、心を閉じちゃうのは悲しい事よ」

「そうだね……」

シンジはアタシに向かって穏やかに微笑むと、リツコやミサト達に向かつて謝った。

「ごめんなさいミサトさん、リツコさん、加持さん……ボクもひどい事を言ってしまった……」

「いいのよ、私も今までシンジ君達を傷つけるような事をしてしまったし」

急に仲直りしたように見えたシンジ達を見て、レンはちょっと戸惑ったように見える。

「アスカお姉ちゃん、一体どうなっているの？ シンジお兄ちゃんが急に仲良くなったように見えるんだけど」

「雨降って地固まるって事よ。傷つけあっても、取り戻せる絆はあると思うわ」

アタシがそう言うのと、レンは暗い顔をしてうつむいた。

「レンはヨシユアお兄ちゃんにひどいこと言っちゃった。……謝れば許してくれるかな？」

「きつと、ヨシユアなら大丈夫よ」

アタシがそう言うってレンの頭をなでると、レンは安心したように笑顔を見せてくれた。

「アスカ、あなたが居てくれて助かったわ」

「んで、アタシ達がエヴァに乗らなければいけない理由は？」

「これから、北の国境のハーケン門から帝国軍の戦車部隊が攻め込んでくるの」

リツコがサラッと云った衝撃的な事に、アタシとシンジは固まってしまうほど驚いた。

「何で突然？」

「きつと結社の仕業よ。帝国の宰相は結社と繋がっているって聞いたわ」

レンがそう言っていると、リツコは頷いた。

「過去に帝国がリベール王国に進攻してきた時は、あっという間にハーケン門は打ち破られてロレントとボースが占領されたらしいわね」

確か、エステルのママも戦争の犠牲者になったんだっけ……アタシはリツコの言葉を聞いて胸が痛んだ。

「通常兵器がATフィールドに無力だと言う事は知っているわよね」

「それって……」

「そこで二人にはエヴァでハーケン門からの侵攻を食い止めて欲しいのよ」

「アタシ達二人だけで！？」

アタシがそう言っていると、リツコは申し訳なさそうに頷いた。

「戦車って事は人が乗っているんですよ……」

シンジが暗い顔でそうポツリと呟くと、アタシはハツとなった。アタシ達は今まで人の命を奪ってきたことなんて無かった。使徒に飲み込まれてこの世界に來た後だって……。

「この武力衝突による被害を抑えるために……あなた達にエヴァに乗ってもらいたい」

「二人はなるべく相手側にも死傷者を出さないように、侵攻を防いで欲しいのよ」

リツコとミサトの言葉にアタシとシンジは顔を見合わせた後、ゆっくりと頷いた。

## 《ボース地方　ハーケン門》

ボクとアスカは二年ぶりに初号機と弐号機に乗り込んだ。

エヴァに乗るのはかなり久しぶりだったからシンクロ出来るかどうか不安だったけど、リツコさん達に聞かされたエヴァの真実がその不安をやわらげてくれた。

初号機と弐号機の中にはボクの母さんとアスカの母さんの魂が入っているんだって。

魂と言うのは言いかえれば肉体を失った精神みたいなもので、それを人造人間のエヴァに入れていてってことみたいだ。

エントリープラグの中に居るのは母さんのお腹の中に居る事になるのかな……。

ボクとアスカはエントリープラグから母さんに呼びかけるかのようにエヴァにシンクロをした。

すると、ボク達二人は今までにない程の高いシンクロ率が出せたんだ。

「ママ、ずっとアタシの側に居てくれたのね……アタシの方から心を閉ざしていただけだったんだ」

「もしかして、母さん達はボク達のために自分からエヴァに……？」

「でも、それを強要したのは当時のゲヒルン……今のネルフなのよ。ごめんね……」

リツコさんは辛そうな顔をして謝っている。

でも、ミサトさんはもっと辛そうな顔だった。

「私はそんなシンジ君達を自分の使徒の復讐のための道具に……」

「ミサトさん、もういいです」

「でも、謝らないと……」

「いいって言っているだろう！」

ボクはついミサトさんに向かって怒鳴ってしまった。

「ミサトは今はアタシ達の事、そうは思っていないんでしょう？」

「ええ……」

「アタシ達は今を大切にしていこうと決めてるのよ。あんまり過去を振り返らなくても、ね？」

アスカがフォローしてくれたおかげで、雰囲気はやわらいでくれた。

「母さん、ボクに力を貸して……アスカやみんなを守りたいんだ」

「ママ、お願い」

ボクとアスカがさらに念じると、初号機と弐号機の背中から翼のよ

うな物が生えて来た。

「エヴァの中に眠る、S2機関が覚醒したのよ」

リツコさんの話によると、エヴァは空を飛べるようになって、ケーブルが無くてもいつまでも動けるようになったみたいだ。エヴァにこんな力があるなんて……。

「行くよ、アスカ」

「そうね、シンジ」

ボク達は空を飛んで、ハーケン門の北、帝国側の平原で戦車の列が王国に向かって進撃中なのが見えた。

「間にあつたみたいだね」

「ギリギリってところね」

ボク達は急いで戦車達の進路を塞ぐように着地した。着地の衝撃で、平原に大きなクレーターのような段差が出来る。きっと帝国軍の戦車隊は王国軍の不意をついたと思ひ込んでいたんだろう、ボク達のエヴァが現れただけでかなりの間混乱をしていたやがて、戦車達の主砲がこちらに向けられた。

「ママ、解っているわ、ATフィールドの意味！」

式号機の周りに強力なATフィールドが展開された。ボクも母さんの魂の宿っている初号機を守ろうと強く念じると、今までとは違った力強いATフィールドが張られるのを感じた。帝国の戦車達がボク達に向かって一斉射撃を始めた。派手に爆煙が上がるけど、エヴァには傷一つ付けられなかった。

「無駄よ！ こっちにはATフィールドがあるんだから！」

砲撃でエヴァを破壊することが無理だと言う事が分かると、戦車の一部がボク達を強行突破しようと動き出した。

「行かせない！」

ボクは戦車をわしづかみや足蹴りをして戦車の侵攻を防いだ。着地した時クレーターのようになってしまった地形も足止めに役立っているようだった。

## 《グランセル城地下 封印区画》

「結社が特務兵達を使って城の地下を掘っていたなんて……」

「私も伝承でその存在は聞かされていましたが、城の地下深くにあるとは知りませんでした」

クローゼもアリシア女王様も知らなかった輝く環の存在を結社が知っていたなんて驚きね。

すでに結社の幹部、アルバ教授はリシャル大佐達と一緒に地下の最深部に向かつて潜って行っているみたい。

あたし達は何が起こっているのかよく分からないけど、アルバ教授達の企みを止めなければいけない事は確かだった。

あたし達は遊撃士のみなどと一緒に、封印区画を守る魔獣を蹴散らしながら奥へと進んで行った。

「輝く環なんて物がアルバ教授に渡ったらとんでもない事になるわ

ね」

「そうだね、何としても追いつかないと」

「こっちや!」

後から合流してくれたケビンさんとリースさんが案内人になってくれたおかげで、あたし達は迷路のような場所でも迷わずに進む事が出来た。

ケビンさんとリースさんは聖杯騎士だから、こういう遺跡の構造には詳しいんだって。

でも、いくら急いで進んでも、先に進んだアルバ教授達には追いつけなかった。

そして、あたし達はついに最深部にある大広間までたどり着いてしまった……。

「くくつ、この台座にゴスペルをはめ込めば『輝く環』の封印が解けるのだな?」

「……はい」

アルバ教授の声と、それに答える大男の特務兵の声、側に無言で立っているリシャール大佐とヴァルターさんの四人が台座の前に居るのが見えた。

あたし達の見ている前で、アルバ教授は持っていた黒い物を台座にはめる。

すると遺跡全体が大きく振動した。

「ふふ、役者はそろったようですね。これから私は『輝く環』の力を手に入れる。そして私は神となり、人類補完計画を実行するのだ!」

アルバ教授はあたし達の方を振り返って、勝ち誇ったようにそう宣



言をした。

「人類補完計画？」

ルシオラさんも言っていたその言葉が気になったあたしは大声で聞いてしまった。

「人類補完計画とは、出来そこないの群体である人類を完成された一つの存在に昇華させると言う事ですよ」

「ええっ？」

アルバ教授が得意気に話し始めた説明に、あたしはポカンとしてしまった。

「人類は不要な肉体を捨て、補完された無欠の存在となる」

「それって、みんなの体が抜け殻みたいになっちゃうって事!？」

話を理解できたあたしは武器である棒を構えてアルバ教授をにらみつけた。

「フハハ、新たな神の誕生をその目で見るがいい!」

アルバ教授は狂喜してそう叫んだ。

でも、次の瞬間アルバ教授は特務兵の大男に突き飛ばされ、リシャール大佐によって持っていた杖を奪われた。

「碇ゲンドウ、まさか私を裏切って貴方が神になるつもりですか!」

アルバ教授ににらみつけられた特務兵の大男がカブトを外して答える。

「私は神になるつもりはありませんよ」

「ヴァルター、何をしているんですか、裏切り者の二人を蹴散らしなさい！」

「ふん、何を言っている。結社を裏切って神になろうとしたのは教授じゃないか。福音計画はどこに行つたんだよ」

ヴァルターさんはそう言うと、立ちあがろうとしていたアルバ教授に思いっきりパンチとキックを叩きこんだ！  
派手に骨の折れる音がこちらまで聞こえる。

「ありやりや、教授の足は思いっきり骨折したね」

今まで気配を感じさせなかった結社の一員、カンパネルラが姿を現した。

カンパネルラの言葉通り、教授は膝を押さえて苦しんでいる。

あたし達は目の前で起きた結社の幹部の仲間割れに驚くしかなかった。

そして部屋の振動は治まって、台座にまばゆい光を放つ光の環が姿を現した。

「これが、『輝く環』？」

「エステル君、ヨシユア君、『輝く環』の元へ来るのだ」

突然、大男の特務兵に呼ばれたあたし達は驚いた。

「なんで、あたし達の事を！？」

あたしとヨシユアが『輝く環』に近づくことをためらっていると、リシャール大佐とヴァルターさんが道を開けた。

「行きたまえ」

「フン」

どうやら二人ともあたし達と敵対する様子はないみたい。

あたしは後ろに居る仲間達に向かつてうなづくと、ヨシユアと一緒に『輝く環』と大男さんの居る所へと近づいた。

「私の名は碇ゲンドウ。君達の事は息子のシンジから聞いているし、私自身も君達を知っている」

「ええっ、おじさんみたいな怖そうな人がシンジのお父さん？ あんまり似てない！」

「エステル、驚くところが違っつて」

あたしはそう言っつてゲンドウさんの顔をまじまじと眺めた。

「言われてみれば、おでこの部分が似ているかもね！」

「エステル、だから違っつて」

「ふっ」

あたし達のやり取りを見てゲンドウさんは少し笑ったみたいだった。

「私は未来からやってきた存在なのだ」

「え？」

「君達を呼んだのは、君達の手で『輝く環』の力を発動して欲しいと思っただからだ」

「待ってください、僕達は『輝く環』を止めるために来たんですよ？ 人類補完計画などと言うバカげたことを防ぐために」

ヨシユアはゲンドウさんの言葉を聞いてたまらずそう叫んだ。

「君達なら『輝く環』の力を正しく解放できる。インパクトにより人は魂だけの存在になってしまっても再び戻れる」

「そんなこと言われても……」

「『輝く環』の力が発動されなければ、こうして私がここに立っていることもできないのだ、頼む」

ゲンドウさんに頭を下げられても、あたし達は迷っていた。

広間の中にいるみんなもゲンドウさんの言う事を信じていいのか疑っている様子だった。

「エステル、ヨシユア、逃げてはいけないぞ」

「父さん！」

「兄さん！」

広間の入口から姿を現したのはカシウス父さんとレーヴェさんだった。

「確かにお前達の前には新たな困難が立ちふさがるかもしれない。しかし、希望があるんだろう？」

「それに、『輝く環』を再び封印する事は未来に不安を残すと言う事だ」

父さんとレーヴェさんに言われて、あたしとヨシユアは考え込んだ。広間に集まったみんなも黙ってあたし達を見つめている。

「ヨシユア……あたし達、大丈夫だよ」

「うん、きっと大丈夫だよ」

あたし達は見つめ合うとそっと手を取り合った。

そして、ゲンドウさんに向かってゆつくりとうなづいた。

「それでは、『輝く環』に念じて二人で手を触れるのだ」

あたしは素早くヨシユアを抱き寄せて軽くキスをする、口を離してヨシユアの手を握って、もう片方の手をヨシユアと一緒に『輝く環』に向かって伸ばした。

「魂だけになったらキスすることもできなくなるかもしれないから  
「そうだね」

「ヨシユアは、何を考えているの？」

「エステルのことばかり考えてる」

「……あたしもヨシユアの事……」

あたし達の目の前がまばゆい光に包まれた。

その光はどんどんと広がり、世界を飲みこんで行くのだろう。  
きつと、シンジとアスカも。

この光が希望の光でありますように……。

あたしはそう願っていた……。

## 続編『影の国編』製作予告中止の謝罪とリメイク版製作延期のお知らせ

2010年5月、『リベール王国来訪編（FC）』完結時において、第二部『影の国編（SC）』の製作予告の物語を書きましたが、その中止を宣言致します、申し訳ありません。

原因はいろいろございますが、主な原因は作者である私の文章を書いて公開すると言うペースが、数日に1回から、一カ月に1・2回ぐらいに落ち込んでしまったと自覚してしまった事です。

2010年10月現在、私は2つの作品の連載を進めていますが、そちらのペースも長期化に伴いペースが落ちてしまい、完成予定が大幅に伸びてしまいました。

そこで、続編の製作中止を宣言させて頂きました。

過去に公開して現在は闇歴史化してしまった『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』を再公開し続編として、この連載を物語上で完結させたいと思います。

この連載について頂いたご感想に対する私の返事に書かれている通り、冒頭から1人称であった文章を3人称に変更した作品をリメイク版として製作したいと思っています。

私は2つの作品のどちらかの連載が完結したら、この連載作品の続編制作を開始しようと考えておりましたが、この調子では1年以内に連載を開始するかどうかお約束する事すらできなくなりました。

心苦しいのですが、リメイク版の連載開始時期は未定とさせて頂きます。

この作品は2010年8月に初めて二次創作小説を書いた私が恐れ多くも2つの別々の小説投稿サイトに「僕のアス力。太陽のような

君」と「軌跡の戦士エヴァンゲリオン」という題名に分けて投稿した経緯から、一部の読者の方からご意見を頂き、ご迷惑をおかけしたと言う事で、投稿サイトの関係者様に頭を下げ、ご厚情によりこちらのサイトで公開する許可を頂きました。

2010/10/24

以上

遅れて申し訳ありません、追加修正です。

誤り この作品は2010年8月に初めて

正しい表記 この作品は2009年8月に初めて

私の友人から「おかしくないか？」と指摘を受けたので誤りに気がついて修正しました。

私がエヴァンゲリオンのLAS小説を書き始めたのは2009年の8月からです。

（それ以前は自サイトで短編「Fighting of The Black Demon」という小説を書いて載せていましたが、サイト改装と共に消しました）

2010/12/10

以上

## 外伝一話 虫取り網と少女達の話

アタシがシンジと一緒にエヴァに乗ったまま使徒に飲み込まれて、今までの常識が通じない剣と魔法の世界に不時着してからしばらくになる。

幸運にもアタシたちはカシウス・ブライトと言う新しい保護者を得て、こうして彼の家に住まわせてもらっている。

でも、何もすることが無く、新しい家族となったエステルとヨシユアの二人に馴染めなかったアタシは、こうして静かに庭にある大木に一人離れて寄りかかっていた。

ぼーっとアタシが見つめている庭にある大きな池の側では、エステルとヨシユアとシンジの三人が釣りを楽しみながら騒いでいる。

どうやらシンジのやつはエステルに押し切られて釣りをさせられてしまっているようだ。

シンジと他の女が仲良くしていて怒っている？

冗談じゃないわ、誰があんなやつなんか！

一人で居て寂しくないか、ですって？

フン、アタシは自分で考え、自分一人で生きて、自分で勝手に死ぬの。

だってアタシ、聞いちゃったんだから。



ネルフにとってアタシは使徒と戦う”駒”の一つにしか過ぎないんだって。

誰もアタシが居なくなったらって、損したぐらいにしか考えていないんだわ。

アタシは憂鬱な気分で視線を反らした。

無邪気に遊んでいる三人の姿が、アタシには眩しすぎる気がして。

それからどのくらい時間が立ったのだろう。

三十分にも満たないかもしれないし、三時間以上過ぎていたのかもしれない。

アタシは自分がいつの間にか眠りこんでしまっていた事に気がついた。

この春の暖かい陽気と、悔しいけど、この家が醸し出す、妙に居心地の良い空気のせいかもしれない。

アタシは大きく深呼吸をして伸びをすると、側に人影が立っている事に気がついた。

「アスカ、良く眠れた？ 今日こそあたしと虫採りに行くわよ！」  
げげっ、このアタシと良く似た栗色のツインテールと鳶色の瞳、子供のような無邪気な笑顔はまさにエステルをやつた。

気がついたアタシはとっさに逃げようとしたけど、エステルに廻り込まれて逃げる事ができない。

距離を縮めようとするエステルから離れようと後ずさるアタシの背中に、大木がぶち当たった。

アタシはこれ以上後退することができない。

そして、アタシの手に無理やり虫取り網を握らせようとするエステル。

「虫採りなんて、い・や・よ!」

そう言っアタシが拒否しても、エステルのやつは聞く耳を持たない。

「い・い・か・ら、受け取りなさい!」

この怪力女、何て馬鹿力なの？

アタシはネルフで多少格闘訓練を受けたけど、エステルの腕を振り払えないでいた。

なんて強情なのかしら！

あたしは新しくできた家族の二人と早く仲良くなりたいのに。

母さんが死んじゃってから、ずっと切望していた願い事。

それは新しい家族が欲しいって事だった。

父さんはあれからアタシに気を使って軍隊の仕事を辞めて遊撃士になってくれたけど、遊撃士協会の仕事がある時はあたしはいつも家で一人ぼっち。

シエラ姉が王国一周の旅に出てから、あたしは一人で棒術の練習をすることが多くなった。

だって、虫を捕まえても生きている間に見せる事ができないから。

魚を釣り上げても一緒に喜んでくれる人がいないから。

教会の日曜学校で、エリッサとティオという友達ができただけど、エリッサは食堂の手伝い、ティオは農場の手伝いといった仕事があるから家に泊まりに来るなんて滅多にない。

そりゃ、父さんもあたしが寂しい思いをしないように、出かける時はエドガーおじさんとステラおばさんにあたしを預けて行くんだけどさ。

あたしはずっと妹か弟が欲しいと願っていた。

でも、それは無理なことだとあたしは諦めかけていた。

だって、父さん一人じゃ子供は作れないし、再婚でもすればいいんだろうけど……父さんは今でも母さんのことをとても大切にしているから……。

そんな時、神様はあたしの願いを叶えてくれた。

ヨシユアと言う、弟、を父さんの前に遣わしたのだ。

どういう理由で父さんの目の前に現れたかどうかは知らない。

そんなのはどうでもよかった、ただ新しい家族ができた事にあたしは喜んだ。

出会ったばかりのヨシユアは綺麗な琥珀色の目をしていたけど、それはとても暗くて、冷たい印象を受けた。

今、あたしの目の前に居るアスカも、綺麗な蒼色の瞳を持っているけど、その輝きが少しくすんでいるように見える。

この子も、昔のヨシユアみたいに心を開けないんでいるんだ……。

あたしは、父さんとあたしと一緒に生活しているうちにだんだんとヨシユアの目が優しくなってきたことを覚えている。

きっとアスカもいつか心を開いてくれるって信じている。

自分の髪と似たような紅茶色の髪をした女の子。

父さんはアスカをあたしの妹のようだと言っていた。

うん、あたしもアスカとシンジが本当の家族になれるように頑張る。  
だってその方が賑やかで楽しいじゃない！

「お姉さんの言う事が聞けないの！」

あたしは大声でそう言って虫取り網を握る手に力を込めた。

……つたく、今日はやけにしつこいわね！

いつもなら、ここでカシウスさんやヨシユアが止めに入るのに、その気配がまったく無い。

アタシとエステルの攻防が続いてもう何十分も経つ。

仕方無い、適当に付き合ってさっさと追い払おう。

「……わかったわよ！」

アタシがそう言って虫取り網を受け取ると、エステルはやっと腕の力を緩めた。

あ痛たたたた……。

危つく肩が外れそうになったわよ。

「ヒア、ウィー、ゴー」

エステルは笑顔でそう言うと、アタシの腕をグイグイと引っ張りながら歩き出した。

アタシは腕が抜けたら本当に困るから、ズルズルと付いて行くしかなかった。

『エリーズ街道』と書かれた看板を越えて、ドンドンと道を進んでいく。

だんだんと小さくなって行くカシウスさんの家。

「ちょっと、どこまで行くのよ!？」

「ミストヴァルトまで。あそこじゃ、面白い虫が取れるのよ。『伝説のアノ虫とか』ね」

エステルは振りかえりもせず、弾んだ声でアタシの質問に答えた。

「……魔獣が出て危険なんじゃないの!？ 伝説の虫なんてどうでもいい、アタシ帰る!」

「へーきだって、魔獣はあたしが倒すから」

アタシはエステルの手を振りほどいて帰ろうと思ったけど、もし一人で居る所を魔獣に襲われたりしたら、と思うとぞっとする。

内臓を魔獣たちに食べられながら絶命して行くなんてイヤすぎる。

そして、ついにアタシたちはミストヴァルトの森にまでたどり着いてしまった。

鬱蒼とした森の影には多数の魔獣が潜んでいるような、そんな気がしてアタシは身震いがした。

森の中を流れる空気もヒンヤリと冷たい。

「さーあ、今日はいっぱい面白い虫を取るぞー！」

張り切るエステルとは対照的に、アタシは茂みが揺れる音が聞こえるたびにビクビクしていた。

ミストヴァルトの森を散策することしばらくして、エステルは虫取り網を構え始めた。

木に止まっている大きなセミみたいな昆虫を標的に定めたみたいだ。アタシはさっきから自分達の近くでざわめく茂みの物音が気になっていた。

誰か……アタシたちを付けてきている？

そんなことをアタシが考えていると、エステルの大声が辺りに響く。

「ああつ、手元が狂っちゃった!？」

エステルの伸ばした虫取り網はセミの止まっている幹をすり抜けて、枝にぶら下がっている昆虫の巣。多分、蜂の巣を叩き落とした。

ブーーーーン。

無数の昆虫たちの羽音が静かな森の中に木霊する。

怒った様子で蛾のような虫型の魔獣の群れがこちらに向かってくるのが見えた。

「逃げよう!」

アタシはエステルに腕を引っ張られて、ミストヴァルトの森の中を駆け抜ける。

森を出て街道にまでやって来ても、蛾のような群れはアタシたちを追いかけてきた。

「息を吸って!」

エステルはそう叫ぶと、目の前を流れていた川に勢い良く飛び込んで、アタシを引っ張りこんだ。

水の中にもぐって息を止めていると、盛大な羽音がアタシ達の頭の上を通り過ぎて行くのが分かった。

「「プハッ」」

もう安全だと判断したアタシとエステルは川の水面から顔を出す。

「アハハ、アス力は変な髪型」



エステルは髪留めでしっかりツインテールを固定していたけど、すっかりヘッドセット・インターフェイスを外していたアタシはモツプのようなグシャグシャな髪型になっていた。

それを見たエステルは大笑いをしている。

「うっさいわね！」

アタシは大笑いするエステルの頭をつかんで、水面の中に叩き込む。ガバガバともかくエステルをしばらく抑え込んだ後、アタシは腕の力を緩めてエステルを解放した。

そして、水面から顔を上げたエステルの顔を見て、アタシは爆笑してしまった。

「アハハハハハハ……！」

「な、何よっ！」

アタシはこむら返りを起こしそうになる腹筋を押さえながら、エステルに今見た状況を説明する。

「だって、アンタの鼻から、ドジョウが……しかも、左右同時に二匹もよ！……これが笑わずに……いられるもんですか！」

こんなにアタシが笑ったのは久しぶり。

ユニゾンの時、シンジをからかって大爆笑した時以来かな。

そうか、アタシ、まだ笑えるんだ……。

ここはエステルによると、魚がたくさんとれる釣りスポットだという事。

だからって、鼻からドジョウは無いんじゃない？

アタシたちが適当に魚を釣り上げて家に帰ると、カシウスさんとヨシユアとシンジの男性陣は疲れた様子でへたり込んでいた。

どうやら、エステルを心配して影でこっそり魔獣とかを退治していたみたい。

「こんなにヨシユアに思われているなんて、良い彼氏じゃないの」

「ん〜？ ヨシユアはあたしの弟で、彼氏じゃないよ？」

こいつ、なんて鈍いやつなのかしら、そんな理由で同居しているわけ無いじゃない……。

はっ！？

アタシはついシンジの方を見て赤くなってしまった。

そう言えば、アタシもシンジと同居を続けていたんだっけ。

シンク口率を抜かされて、アタシの最もイヤなライバルともいえる存在なのに……。

アタシはアイツから離れる事ができなかった……。

と、とりあえずその事は置いておいて、問題はエステル（どんかんの事よ！

スパッツにスニーカーなんて全然色気が無い格好をしているじゃない。

男のヨシユアの方がなんか色気を感じるわ。

明日からアタシが女の子の魅力つてものをたっぷりアンタに教えてあげるから、覚悟しなさい！

アタシはエヴァに乗ること以外にも、生きてやりたいことが見つかった気がした。

外伝二話 始まりはメイプルクッキー、そしてリフレッシュパイへと続く道

<ロレント市 リノン総合商店>

ロレント市の南側の入口からすぐ入ったところの左手に、リノン総合商店というこの街で唯一の雑貨屋がある。

その名の通り、アクセサリ、小物類の雑貨はもちろん、ストレガー社製のスニーカー、チェロ、レモン色のワンピース、薬や食料まで置いてあるシンジ達の世界では「コンビニ」のようなものだった。

その店主の青年リノンは、カウンターに座りながら帳簿とにらめっこをしばらくした後、困惑と苦笑が入り混じった様子で溜息をついた。

「全く、嵐のような騒ぎだったな」

リノンがブツブツそう呟いていると、ワンピースに真っ白なエプロンを身に纏った女性、キディがニコニコと微笑みながら姿を現した。

「エステルちゃんとアスカちゃんを見送ってきました。……二人とも凄い張り切りようでした。ヨシユア君とシンジ君を驚かせてあげるって」

「新鮮ミルク、挽きたて小麦粉、メイプルシュガーを99セット。こんなに売れたのは初めてだよ」

「スニーカーを买买つつもりで来たらいいですね。……でも、リノンさんのクッキーを食べたら気が変わったって。そんなにおいしかった」

たんですか？」

キディの言葉にリノンは力の抜けた笑顔を浮かべる。

「ああ、メイプルクッキーには自信があるんだ。……ごめんよ、キディさんの分は今日はもう無理みたいだ」

それに対し、キディは可愛い笑顔を浮かべて答える。

「別に構いませんよ。アスカちゃんは私の恩人なんですから……」

「恩人って？」

キディは顔を赤らめてリノンを見つめる。

「だって私をこんな素敵な……」

窓から小鳥のさえずりが聞こえる。

二人の間に訪れる沈黙。

「……こんな素敵なお店と巡り合わせてくれたんですから」

リノンは目を輝かせて言ったキディに少しがっかりしたような笑顔を浮かべた。

キディはロレントから少し離れた、王都グランセルのエーデル百貨店で働いていた。

しかし、ある日アスカがリノンの店にやって来て、美味しい紅茶が

無いと不満を言いだしたのだ。

チエロが欲しい、ブランド物の服が欲しい、上品な紅茶が飲みたい！

それはこの田舎都市とも言われるロレントの雑貨屋では無理な話だった。

今までのんびりと店をやっていたといいと構えていたリノンだったが、アスカの要求には困り果てて、エーデル百貨店に相談の手紙を出した。

そこで、派遣されてやってきたのが、紅茶販売係をやっていたキディ。

今まで恋愛に興味が無く過ごしてきたリノンの胸をかき鳴らす存在だ。

「実は、この前エーデル百貨店に退職願を送ったんです」

舌を出して微笑むキディにリノンはとても驚く。

「ええ！？ それじゃあこのバイトも辞めるっていうのかい？」

「いえ、こちらで働いていたんです」

「そ、それって……」

リノンが震える声でそう言つと、キディは鈴のような軽やかな声で答える。

「ずっと、側に置いてくださいますか？」

リノン は唾を飲み込みながら頷いた。

彼の母親のブルームが嫁探しの旅に王国中を回る事も無さそうだ。

<ブライト家 台所>

「さあ、行くわよっ！」

「ドキドキするねっ」

ブライト家の台所ではウワサに上がった少女、アスカとエステルがメイプルクッキーの材料を揃えていよいよ調理にかかるうとしていた。

シンジとヨシユアの二人は、遊撃士協会の仕事の依頼でミストヴァルトの森へ行っている。

アスカが受付のアイナに頼み込んで苦肉の策として出してもらった依頼だ。

「エステル、足を引つ張らないでよ！」

「やだなあ、アスカも似たようなものじゃない」

エステルはこの前ようやくオムライスを普通に作れた程度の腕前。

アスカは料理はずっとシンジに任せっぱなしで、こちらの世界に飛ばされてからやっと料理を始めた始末。

一緒に調理をするエステルの底抜けに明るすぎる笑顔を見て溜息をついた。

縞模様の怪しい使徒の影にエヴァごと飲み込まれてこの中世を感じさせる世界に来てから数カ月。

アスカはいろいろ世話になったお礼をシンジとヨシユア、カシウスにするつもりでリノン総合商店に足を踏み入れた。

そこで、リノンは休憩しようと思っていたのか、テーブルには美味しそうな匂いを漂わせるクッキーと湯気を上げる紅茶の入ったカップが置かれていた。

目ざとくクッキーを見つけたエステルはまるで自分のことのようにリノンのクッキーを自慢する。

「リノンさんのクッキーはね、とてもおいしいんだよ！」

無邪気な笑顔で誉めるエステルに、リノンは苦笑しながら、「ちょっと」摘むように勧めた。

だが、リノンはエステルの食欲旺盛さを失念してしまっていた。

アスカが止めてもパクパクとエステルは食べ続け、皿に盛られたクッキーはあっという間に空っぽになってしまった。

キディが仕方無いな、と言う感じで微笑みながら溜息を付くのを見



て、アスカはこのクッキーが誰のために用意されたものであるか察して、エステルの中をにらんだ。

しかし、クッキーがとてもおいしかったのも事実。

そこでアスカは一石二鳥の策を思いついた。

「ねえ、リノンさん。この美味しいクッキーの作り方、教えてくれない？ 上手くできたらお返しするから」

アスカにせがまれたリノンはカウンターをキディに任せて二人のためにメイプルクッキーの作り方を教える事にした。

台所から店内にあふれ出してくる香ばしい匂い。

それをまた間の悪い事にスクープに鼻が利く、街の小さな”記者”クルーセに嗅ぎつけられてしまったのだ。

「みんなー、リノンさんの店でクッキーの焼き方教室をやってるよー！」

街中にそのスクープを報じて回ったものだから、興味のある女性がわらわらと集まってきた。

街に居るエリッサやステラ、アイナはもちろん、普段は街から外れたパーゼル農園に居るティオまでやってきた。

退くにひけなくなったリノンは講師としてクッキーの作り方を説明し、アスカはその内容をメモに取っていた。

「今日はホワイトデーと言って、クッキーを焼いて日ごろの感謝の気持ちを伝える日なのよ」

アスカの言葉にその日のリノンの店では新鮮ミルク、挽きたて小麦粉、メイプルシュガーが売れに売れた。

そして今こうしてアスカとエステルは台所に立っているのである。

現在の個数……新鮮ミルク99個、挽きたて小麦粉99個、メイプルシュガー99個

「あー、焦げちゃった!」

「火加減が難しいわね」

現在の個数……新鮮ミルク98個、挽きたて小麦粉98個、メイプルシュガー98個

「エステルっ! トレイを乱暴に取り出すから、ボロボロになっちゃったじゃないの!」

「ごめん」

現在の個数……新鮮ミルク97個、挽きたて小麦粉97個、メイプルシュガー97個

「なんかおいしくないねー。もっとメイプルシュガーを多く入れてみようか」

現在の個数……新鮮ミルク96個、挽きたて小麦粉96個、メイプ

ルシュガー 95個

「甘すぎ……今度はミルクを多めに……」

現在の個数……新鮮ミルク 94個、挽きたて小麦粉 95個、メイプルシュガー 94個

「なんか、びちゃびちゃしてるよー」

<ミストヴァルトの森>

アスカとエステルが台所でクッキー作りに挑戦している頃、シンジとヨシユアは遊撃士協会の緊急の依頼で深い森の中を探索していた。受付のアイナの説明によると、街の教会のデバイン教区長が薬の調合に必要な「ピンク色のベアズクロー」という草をを必要としているらしい。

そして、その草は女性が近づくと枯れてしまうという性質を持っているので、アスカとエステルは同行できないという話だった。

シンジはちょっと違和感を感じる依頼内容に首をかしげながらもヨシユアと共に森へと向かっていた。

「これは……白いベアズクローだね。朝から探しているのに、なかなか見つからないな」

シンジは自生していたベアズクローを傷つけないように確認すると

溜息をもらした。

現在の個数……新鮮ミルク80個、挽きたて小麦粉78個、メイプルシュガー77個

「もつと奥の方に行かないと見つからないかもしれないね。湿気を好むって言うし」

ヨシユアはそう告げると歩きにくい道を奥へと進んで行く……。

シンジは慌てて後へと付いて行く。

そしてしばらくシンジとヨシユアは森の中を再び探索したが、目的のものはなかなか見つからない。

「はあっ、はあっ……」

「ここら辺で休憩にしようか」

魔獣との戦いもあって相当疲れたのか、息の切れたシンジを見て、ヨシユアは広場になったところで休む事を提案した。

現在の個数……新鮮ミルク60個、挽きたて小麦粉60個、メイプルシュガー60個

「やっぱり君達はアーツを使った戦いの方が向いてるね」

「ごめん、全然体力が無くて。これじゃあ足手まといだね」

「……今はそうかもしれないけど、努力すれば平気だよ」

ヨシユアがさりとそう言ったのでシンジは苦笑しながら言い返す。

「普通、そんな事はないって否定するものじゃない？ 結構キツイこと言っんだね君は」

「はは、それはきっと僕がシンジに対して遠慮が無くなってきたからだよ。本当の意味で家族になれて来たってこと」

「そう言われると嬉しいな」

休憩の間、シンジとヨシユアはお互いの事を話ながら過ごした。

現在の個数……新鮮ミルク40個、挽きたて小麦粉40個、メイプルシュガー40個

シンジとヨシユアは探索の末、ついに森の奥のセルベの大木の近くに生えていたピンク色のベアズクローを見つけた。

「やっと、見つかったね。赤と白のベアズクローばかりで焦ったよ」

「そうだね、空が完全に茜色に染まったら分からなくなるところだったよ」

見れば時刻は夕方に差し掛かっている様子だった。

二人は急いで森を出て、デバイン教区長が待っているという街の入口に向かうためエリーズ街道を北上する。

現在の個数……新鮮ミルク23個、挽きたて小麦粉25個、メイプ

ルシュガー20個

「確かに受け取りましたよ。ありがとうシンジ君、ヨシユア君」

デバイン教区長にピンク色のベアズクローを渡したシンジはホッと胸をなでおろした。

「難しい依頼だったけど、達成できて良かったね……ヨシユア？」

ヨシユアは何がおかしくてたまらないのか、必死に笑いをこらえているようにシンジには見えた。

「いや……教区長さんにまで嘘を付かせるなんてさ」

「嘘？」

喋りすぎてしまったと後悔したのかヨシユアは口をつぐむ。

現在の個数……新鮮ミルク9個、挽きたて小麦粉10個、メイプルシュガー8個

「今頃、アス力達は家で夕食でも作っているのかな？」

すっかり茜色に染まりきった空に浮かぶいわし雲を見つめながらそう呟くと、ヨシユアは真剣な顔になってシンジに向かって話しかける。

「なんか、急いで帰らないといけない気がするんだ」

「……僕もそんな気がするよ」

ヨシユアとシンジはそう言って顔を見合わせて頷くと、疲れ果てた体に鞭を打って急いで街の郊外に立つブライト家へと急いで帰るのだった。

家が見える場所までたどり着くと、煙突から煙が上がっているのが見える、周囲に香ばしい匂いと少し焦げくさい匂いが漂っている。

玄関のドアを開けると、アスカが驚いた顔をして叫ぶ。

「うげっ、もうシンジ達、帰って来ちゃったの!？」

「……どうしたのアスカ、そんなに驚いて。夕食を作っていたんじゃないかったの？」

わけが分からない様子で呆然と見つめるシンジに、ヨシユアは極めて冷静に声をかける。

「どうやら、夕食を作っていたわけじゃないみたいだよ」

「えへへ、アスカがね、シンジにクッキーを作ってあげるって張り切ってたんだよ」

台所の様子を見て、シンジも納得した様子でアスカに話しかける。

「アスカ、そうなの？」

「バ、バカっ！ シンジはおまけよ！ カシウスさんやヨシユアのついで」

「えー？ だってさっきからずっとシンジの名前しか言って無いよ？ 父さんやヨシユアの名前なんて一言も！」

シンジの言葉を否定したアスカだったが、エステル暴露によって顔を真っ赤にする。

「ええ、そうよ！ アンタには世話になったから礼の一つでもしないとアタシのプライドが許さないからね！ ……でも」

アスカは開き直って言い返したが、最後には下を向いて声を落とした。

現在の個数……新鮮ミルク1個、挽きたて小麦粉1個、メイプルシユガー1個

「なるほど、もう失敗できないね。……任せて」

ヨシユアは慣れているのか手際良くメイプルクッキーを焼いた。

そして一枚のクッキーを4つに割って口に入れる。

「すごい、ヨシユア、リノンさんが作ったみたいにおいしい」

「何で、比率が変わらないのにこんな美味しくできるのよ」

質問するアスカに、ヨシユアは少しからかうように答える。

「料理の年季の差だと思うよ」

「なんですってー！」



シンジはヨシュアがアスカに向かってそんな冗談を言えるようになった事に驚き、そして笑みを浮かべてアスカを宥める。

「……ところでさ、夕食はどうするの？」

「……あ」

……その日の夕食はロレントの街のアーベントでの外食になった。

<王都グランセル 西区画 コーヒーハウス《パラル》>

それから数カ月後、リベール王国各地を旅したシンジとアスカ、ヨシュアとエステルは四人は女王誕生祭で賑わう王都の一角に居た。

「えーと、リフレツシュパイの一人前は挽きたて小麦粉5、メイプルシュガー1、完熟リンゴ1、アゼリアの実1、泥付きニンジン1、ロイヤルリーフ1、フレツシュハーブ1ってところね」

そう呟きながら材料を用意して調理していくアスカの姿を見て、店の主人の老人は感心した声をあげる。

「ほう、お嬢ちゃん手際が良いな」

「アスカ、手伝わなくていい？」

シンジの言葉にアスカはウインクを返す。

「大丈夫、シンジ達はゆっくり座って待っててよ」

ここは濃くて渋いコーヒーと、香辛料の効いたスパイシーなカレーを出す専門店だったのだが、祭りで盛り上がる王都に初めて来る観光客も多く、甘いものを食べたいというお客も来ていた。

しかし、店主の老人は甘いものを作るのが苦手だった。

そこでおせっかいなアスカが店主の老人の代わりにリフレッシュパイを焼くことになったのだ。

「でも、アスカがこんなに料理が上手くなるなんて思わなかったよ」  
エステルが感心した様子で言うと、シンジはクスリと微笑む。

「アスカは傷つけられたプライドを10倍にして返すって言うてたからね。ヨシユアに言われた事が堪えたんじゃないかな」

「僕は、それ以外にも原因があると思うけど……」

ヨシユアがからかうようにシンジの目を見つめると、シンジは照れ臭そうに嬉しそうに笑った。

「できたわよ、みなさん、お待たせー」

アスカがそう言って老人と共に店内の客にパイを配って行く。

甘いものに目が無い女性客はもちろん、普段カレー目当てで来ている男性の常連客も感心している様子。

アスカもシンジの隣に腰を下ろす。

「どう、シンジ？」

「うん、美味しいよ、適度に甘くて」

アスカに差し出されたパイを口に入れたシンジは笑顔で答える。

エステルとヨシユアも、店内の客も、この若いカップルの姿を微笑ましく見守っていたのだが……。

「あ、シンジ。唇にリンゴがついてる」

そう言つてアスカは素早くシンジにキスをするようにシンジの唇についたかなパイ生地とリンゴの塊を舐め取る。

「うん、甘くておいしい」

その様子を目撃した店内の客達は胸を押さえて苦しみ出す。

「甘い……甘すぎるぜ、このパイは……」

「甘過ぎよお……！」

「おかしいわね、リンゴが甘すぎたりしたのかしら」

そんな客の様子に首をかしげながら自分の作ったパイを頼張るアスカ。

女王生誕祭の間、この店は世界一甘いパイを出す店として噂になっ

た  
……。

## 外伝三話 アルバ教授の計算違い

### 《グランセル城 空中庭園》

あれ？なんであたしここにいるんだろう？

あたしは気がつくと、夜の公園のような場所に立っていた。

ハーモニカの音が聞こえる。あれはヨシユアが吹いている音だ。

あたしはハーモニカの音が聞こえる方へ、ヨシユアの元に早足で歩いて行った。

「やあ、エステル。良い夜だね」

柵に腰かけていたヨシユアは、あたしに気がつくと、微笑んでそう言った。

「また、あの曲を吹いていたんだ」

「うん、吹き収めにも思ってたね」

ヨシユアは笑顔だけど……なんか悲しそう。なんでそんな悲しそうな顔で笑うの？

ヨシユアはあたしに背を向けて、唐突に何とか聞き取れる弱い声で話し始めた。

「昔、あるところに男の子が居ました。その男の子はショックで心が壊れてしまいました。ある時、とある魔法使いがその男の子の心を好きなように組みたてました。でも、その男の子が偽りの心を手に入れたとき、男の子は人殺しになって居ました」

な、何を言い出すのヨシユア……。

あたしが黙って聞いていると、ヨシユアは淡々と話を続ける。

「ある日、男の子はある遊撃士の暗殺に失敗しました。そして、その男の子はその人の家に連れてこられて、ひとりの女の子と出会いました……。その後、五年もの間男の子は幸福な夢を見続けました。でも、夢はいつか覚めるものです。現実に戻る時が迫っていました」

ヨシユアはそこまで話してあたしの方に振り向いた。

「でも、その男の子は人の血で汚れている……。側に居ても女の子を不幸にするだけ。だから……。男の子は旅立つ事にした」

「……いいかげんにしなさいよ。夢なんて言わないでよ!」

あたしはヨシユアに向かって腕をなぎ払うように振りながら詰め寄った。

「あたしを見てよ、あたしの目を見てよ!あたしはずっと……。その男の子の事を見てきたわ! 男の子が何かに苦しみながらも、頑張っている事を知っている。あたしはそんなヨシユアが好きになったんだからっ!」

言ってしまった。告白してしまった。

「あたしの気持ちを置き去りにして行くなんて許さないからね!」

あたしが怒鳴るとヨシユアは驚いた顔をして、そしてあたしの肩を掴んで顔を引き寄せた。

「えっ……?」

ヨシユアの唇とあたしの唇が触れあつて……。

ヨシユアの口からあたしの口に何か冷たいものが流れ込んできた。

「即効性のある睡眠薬だよ。副作用はないから安心して」

ヨシユアは真つ暗な目をしてあたしに話しかける。

「なんで……そんなものを」

あたしの体が崩れ落ちる。

「太陽のように眩しかった君。僕はこんな風に好きな女の子から逃げ出す事しかできないけど……。誰よりも君の事を想っている」

そんな　ファーストキスが別れのキスだ、なんて！

「さよなら　エステル」

ヨシユアはそう言ってあたしの横を通り過ぎようとした……その時。

「アンタ、バカア！？」

あたしの後ろの方から女の子の声が聞こえる。

これは……あたしの知っている声。

妹のアスカの声だ。

「ヨシユアってば、最低っ！」

逃げ道を塞がれたヨシユアは身動きが取れずに固まっている。

「エステルもしっかりしなさいよ！ アタシは二人のファーストキスの瞬間も見ているんだからね」

アスカの言葉に、意識がほとんど朦朧とした頭で考えてみる。

あたしは、今までヨシユアを異性として意識してなかったから、キスなんてしたことが無い。

違う！ヨシユアはあの風車の展望台でキスしてくれた！

そのことに気付いたとき、あたしは薄れゆく意識の中で呟いた。

「ありがとう アスカ」

次の瞬間、あたしの意識は完全に闇に閉ざされた。

### 《ネルフ 三〇三病室》

アタシは気がつくと、浮かんでいる感覚にとらわれた。

目の前に広がるのは、病院のベッド。

ベッドで壊れた目をして眠っているのは……アタシ？

病室のドアの入口から誰かが入ってくる。黒髪の男の子……シンジだ。

シンジはベッドに横たわっている、ガリガリに痩せてしまっているアタシに向かって話しかけていた。

「アスカ、今日も目を覚まさないんだね」



シンジは全く反応を示さないアタシの手をそつと握る。

「ボクはひとりになってしまったんだ。零号機もなくなっちゃったし、みんな死んじゃったんだよ」

シンジはアタシの肩を持ちあげた。

「こんなの、アスカじゃないよ。前みたいに怒ったり笑ったり、よけいなおせっかい焼いたりしてよ！」

シンジはアタシの胸に顔をすり寄せながら、弱々しく呟く。

「ボクが守りたいのは、こんな抜け殻みたいなアスカじゃないんだ……」

ベッドに横たわったまま、何の反応を示さないアタシの体。

そんな光景をアタシの意識は中に浮いたまま、見ているだけしかできなかった。

ああ……。シンジはひとりで苦しんでいるのに。

シンジを優しく抱きしめてあげられたら。シンジに言葉をかけてあげられたら。

お願い、アタシの体。動いて！

すると、それまで動かなかったアタシの体が動き始めた。

アタシ、なんでシンジの首を絞めてるの！？

胸にすがりつくシンジを振り払い、馬乗りになってシンジの首を締め始めるアタシの体。

「アスカ……なんで、ボクの……事……嫌い……なのか」

アタシの体に黒い糸が巻きついてるのが見えた。  
その糸を使つて操つて居るのは、見た事のある顔　　アルバ教授だ  
つた。

「ふふ、これで決定的ですね、アス力君。これでシンジ君は他人が  
全く信じられなくなる」

アルバ教授はアタシに向かって勝ち誇つたような笑みを浮かべる。  
あいつ、アタシの事が見えてるの？

アタシはただ睨みつける事しかできなかった。

アルバ教授は首を絞める力を適度に緩めているのか、シンジの意識  
が途絶えることはない。

でも、シンジの瞳からは徐々に光が失われて行つた。

「アス力……もう疲れたよ……ボクを殺してよ」

ああ、シンジの心が完全に壊れてしまう……誰か、アルバ教授を止  
めて、助けて、誰か！

「諦めなさい。さあ、止めを刺しますよ」

「アタシは最後まで……いえ、最後を迎えても諦めない！」

「よーし！それでこそあたしの妹だ！」

殴られる音と共に、アルバ教授が床に崩れ落ちる。

アタシの体を操っていた黒い糸は、ヨシユアの短剣によって断ち切  
られた。

「な、なぜエステル君とヨシユア君がここに居るのですか！」

「アス力があたしに助けを求める声が聞こえたからよ！」

「く、くそつ、この空間を保つ魔力が……」

アルバ教授が憎々しげにそう呟くと、周りの景色が歪み始めた。  
この夢はアルバ教授によってつくられた悪夢なのね。  
まったく酷い手を使うんだから。  
ありがとう、助けに来てくれて、エステル……お姉ちゃん。

《ツァイス ツァンラートホテル》

「アスカ……」

「エステル……」

アタシが目を覚ますと、エステルがアタシの頭を撫でていてくれた。  
エステルの顔には涙の跡が残ってる。

「はは、甘えん坊のアスカを励まさないといけないあたしまで泣いちゃうなんて、どうしたんだろう」

「エステルって、夢の中まで助けに来るなんて、なんておせっかいなのよ」

「あはははは」

「あはははは」

アタシたちはお互い顔を見合わせて笑いだした。  
落ち着いたアタシは、シンジの事が気になった。多分アタシたちと同じように悪夢を見たんだろう。

「アタシ、シンジの部屋にいつてくる」

「今日だけは一緒に寝てもいいんじゃない？ 父さんもきつと認めるはずだし」

エステルのからかいの言葉を背にして、アタシはシンジとヨシユアが泊まっている向かいの部屋のドアをノックした。

「え、じゃあシンジはあれが夢だつてすぐにわかったの？」

アタシは部屋からシンジを呼び出して、自分の部屋に連れて行つた。

「だって、アスカがボクの事を突然嫌いになるなんて信じられなかったから」

シンジがキツパリと言うものだから、アタシは照れ臭くなってぶっきらぼうに言い返した。

「た、大した自信家ね」

「前までのボクなら、アスカは加持さんが好きだつて誤解してたけど、もうボクと婚約までしちゃったんだからさ」

シンジ。何また自爆してるのよ。

エステルにも黙ってたのに。

あ、エステルとヨシユアがいつの間にか仲良く二人でアタシたちを見てる。

あれはからかいの眼差しね。

アタシはシンジの頭を胸に抱き寄せた。

「ア、アスカ苦しいよ」

「うるさいわよ。あの夢を見たら、孤独に震えるシンジを抱きしめ

たくなつたのよ……本当はこうして欲しいんですよ」

アタシがそう言うと、シンジの抵抗がピツタリと止んだ。

「ア、アスカ、それ以上はダメだからね！」

エステルが顔を真っ赤にして叫んだ。

## 《結社のアジト》

「ぐぬぬぬぬ、また私の計画が失敗したというのですか！」

戻ってきたアルバ教授は憎々しげにそう呟いた。

「ふふ、教授は男女の恋愛に疎いんだから。あの子たちができている事に気づかずにこんな計画を立てるなんて」

ルシオラはそう言ってアルバ教授を嘲笑した。

## 外伝四話 王女救出作戦

### 《王都グランセル 遊撃士協会》

アスカ達がグランセル王城のデュナン公爵の夕食会に出発した後、あたし達は遊撃士協会の二階で作戦の細かな確認を行っていた。

「エステルさんとヨシユアさんまでこちらに駆け出して申し訳ありませんでした。何しろこちらでも人数的にギリギリですからね」

「いえ、別にそんなこと」

エルナンさんに謝られると逆に恐縮してしまうわね。

「それでは、エルベ離宮攻略作戦のチーム分けをお話します。チームはまず遠くで騒ぎを起こして敵を引きつける陽動、それを迎え撃つ要撃、さらに近くで騒ぎを起こして敵を混乱させるかく乱、人質を救出する突入の四チームに分けて行います」

エルナンさんがそう言うと、みんな騒ぎ始めた。

「八人で四チームに別れると言う事は、一チームが二人か三人になると言う事ですか？」

ヨシユアがそう言うと、エルナンさんは静かに首を振った。

「いえ、一チーム四人で行動して頂きます」

「えっ、計算が合わないんですけど……」

あたしがそう言うと、一階から人が昇ってくる気配がした。

「どうやら間に合ったようですね」

「……あ！」

姿を現したのは闘技大会で戦ったカプア一家の三人とレイヴンの三人だった。

「ボクっ娘が何でここに？」

「いいかげん、名前で呼べよ、怪力女！」

ヨシユアにちよっかいを出したジョゼットを見ると、つい悪態をとってしまうのよね。

揃ったあたし達に向かってエルナンさんは号令をかける。

「陽動部隊はジョセットさん、キールさん、ドルンさん、オリビエさんをお願いします」

「ふっ、心得た」

「まっ、軍から目を付けられている俺達が適任だな」

エルナンさんの指示にオリビエとキールさんはうなづく。

「要撃部隊はカルナさん、グラッセさん、アネラスさん、クルツさん」

「はい」

「気合入れて行くよ！」

「かく乱部隊はアガットさん、ディンさん、ロッコさん、レイスさん」

「おう！」

「ああーっ、やっぱり……」

つて事は突入部隊は……。

「突入部隊はエステルさん、ヨシユアさん、シェラザートさん、テイタさんをお願いします」

「うはあ、責任重大じゃない……大丈夫かな」

あたしがそう言っで弱音を吐くと、ヨシユアが笑って答える。

「心配するなんてエステルらしくないよ」

「……何よそれ、あたしがいつも能天気みたいじゃない」

あたしがムツとした顔で反論すると、ヨシユアは謝った。

「ごめんごめん、エステルが苦しい時も無理して元気を出しているのは知っているよ。だから僕はエステルのその笑顔を曇らせないようにしたいんだ。僕の元気の源だから」

ヨシユアの言葉を聞いてあたしは顔がかあつと赤くなるのを感じた。悔しいのであたしもヨシユアに言い返した。

「じゃあ、あたしからも一言いい？」

「なに？」

「ヨシユアも自分一人で何でも抱え込まないで、正直に話して欲しいの。ヨシユアがいくら強がったって、あたしにはお見通しなんだから！」

「えっ……？」

あたしがそう言っで、ヨシユアはポカンと驚いた顔になる。

「そうそう、私達がついているんだから」



シエラ姉も加わってそう励ますと、ヨシユアは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう」

「士気は十分に高まったようですね。それでは作戦開始と参りましょう。それではエステルさん、号令を」

「え、あたし!？」

突然、エルナンさんに指名されたあたしは驚いてしまった。

「こう言う事はエステルさんの方が相応しいと思ひまして。お願いできますか」

あたしはうなづくと、集まったみんなに向かって号令をかけた。

「それではこれより、エルベ離宮に捕らわれた人質解放作戦を決行する!」

「おーっ!」

あたしの号令に答えるみんなの声が部屋の中でこだました。  
頑張ろうね、ヨシユア。

## 《王都グランセル郊外 エルベ離宮前》

僕達はエルベ離宮の入口が見えるところで、他の部隊が動くのを待っていた。

しばらくすると、特務兵達が騒がしうになった。

いよいよ、ドルンさん達カプアー家とオリビエさんの陽動部隊が行

動を起こしたんだろう。

「大変です、東の湖の警備艇が空賊に襲われています!」

「中にはリユートをかき鳴らす変な男も混じっているとか……」

「面白い、私も行くでしょう」

特務兵の報告を聞いて、結社の幹部らしい男もエルベ離宮の中から姿を現して、陽動部隊が居る方へと向かって行った。

確か、ブルブランと言う名前だったと思う。

ジェニス学園の旧校舎で会ったような気がするけど、あの時はエステルとキスした事で頭がいっぱいだった。

エルベ離宮から特務兵達がぞろぞろと出て行ったけど、きっと要撃部隊のみんなが倒してくれるだろう。

でも、エルベ離宮にはまだそこそこの人数が警備についている。

次はアガットさんとレイヴン三人のかく乱部隊の出番だ。

「お前達、こんな所で何をしている!」

正門の前で座り込んでいるアガットさん達に特務兵が声をかけると四人ともケラケラと声を上げて笑い出した。

「ここで何をしようと俺達の勝手じゃ〜ん」

「そそ、あんた達に答える義務何か無いもんね」

「邪魔だからあっち行けよー」

「痛い目に遭いたくなかったらとっとと消えろ」

レイヴンの三人はいつものように、元レイヴンのアガットさんも演技が板についているような感じだった。

「何だと!」

特務兵は怒り出して四人を追いかけて回し始めた。

「エルベ離宮は女王様の意向で一般市民に開放されているって話だろ？」

そう言うアガットに続いてレイヴン達も一緒にエルベ離宮の正門から玄関前の庭園に侵入した。

「侵入者だ、直ちに排除しろ！」

エルベ離宮の本館からも特務兵達が飛び出してきて、玄関前の庭園は混乱のるつぼと化した。

「アガットさん達に注意がいつている今が突入のタイミングだね」  
「わかったわ！」

僕はエステル達に声をかけると、隠れていた茂みから姿を現してエルベ離宮の正門に向かって駆けだして行った。

後ろから、ティータを気遣いながらエステルやシェラさん達も続いて来る。

玄関前の庭園に居る特務兵達はアガットさん達に気を取られていたようで妨害は無かった。

そして、僕達は玄関からエルベ離宮の本館に入る事に成功した。

「まず、人質がどこにいるか確かめないと……」

「そうね」

僕の提案にみんな賛成して、手前の部屋から確認していく事にした。廊下や小部屋で特務兵の小隊と何度か出くわしたけど、上手く気絶

させることができた。

そして僕は離宮の一角にある談話室へと踏み込んだ。

「何だあ、お前達は？」

「遊撃士協会の者です。お聞きしたい事があります」

僕はそう言ってエステル達と一緒にすでに酔っぱらっていた特務兵の男を縛り上げた。

「わ、私は仲間ではありません！」

カウンターでお酒を出していた男の人が慌てて両手を上げる。

「わかっているわよ。この離宮で元々働いていた人でしょう？」

シエラさんがそう言うのと、その男の人はホッとしたように腕を降ろした。

「……私は執事のレイモンドと言います。姫様が来た事に浮かれて、特務兵達が姫様を監禁している事に気がついた時には私も人質にされていました」

そしてレイモンドさんは頭を抱えて溜息を吐いた。

「私は特務兵達の目を盗んで友達の記者に連絡したのですが、彼も捕まってしまって……」

僕はもしかしてと思って、レイモンドさんに聞いた。

「その記者さんの名前はもしかしてナイアルって言うんじゃないで

すか？」

「ああ、よく分かったね。後輩の子がエルベ離宮に行ったきり帰って来ないって心配してたから」

レイモンドさんの言葉を聞いて僕とエステルは顔を見合わせた。

「慎重なナイアルさんが捕まっちゃったのって……」

「ドロシーさんが居たから、放って置けなかったんだね」

そう呟くと、エステルは僕の目をじっと見つめて来た。

「エステル？」

「ヨシユア……」

僕は悲しげな目をしたエステルが何を訴えているのか分かった気がした。

でも、それは僕の錯覚だったんだ。

「ヨシユアが結社にさらわれたりしてもあたしが助けにいくからね！」

僕は笑顔でそう言ったエステルに思わず力が抜けてしまった。

「立場が逆じゃないの？ あんたらしいわ」

「エステルお姉ちゃん……」

「はは、ありがとう」

シエラさんとティータもあきれている前で僕は何とか作り笑いを浮かべてエステルに答えた。

「さてと、それじゃあ取り調べを始めましょうか」

シエラさんはそう言うと、ムチを縛られている特務兵の男に向かって構えた。

「い、一体何をするつもりだ！」

「ちよつと聞きたい事があるだけよ。素直に話せば痛い目にはあわないわよ」

すっかりノリノリになっているシエラさんを見て、僕達はお互いに顔を合わせてささやき合った。

「シエラ姉、絶対楽しんでるわよね？」

「うん、久しぶりの獲物に生き生きしている感じだね」

「ちよつと怖いです……」

僕達がボソボソ話している間にシエラさんのムチの音と特務兵の男の悲鳴が何回か室内に響き渡った。

レイモンドさんとティータはすっかりおびえてしまっているよ……。

「ふう、この男から引き出せる情報はこのぐらいね」

シエラさんがそう言って打ったムチを食らった特務兵の男は気絶してしまった。

シエラさんが取り調べによって得た情報によると、王女を含めた人質のみんなはエルベ離宮の本館の奥にある紋章の間に捕らえられていると言った。

しかし、部屋の鍵は外に出て行ってしまった結社の幹部ブルブランが持っていると言う。

僕達は困り果ててしまったけど、ティータだけは落ち着いていた。

「ジャーン、私が作った万能キーです！」

そう言っただけで、ティータが取り出したのは金色に光る金属でできたカギだった。

「この先端部分の金属がかぎ穴に合わせて形を変えるんですよ」

「凄いじゃない、ティータ！」

「えへへ」

エステルに頭をなでられてティータは嬉しそうにしている。

問題が無くなった僕達はエルベ離宮の警備についている特務兵達が混乱している間に急いで紋章の間へと向かった。

## 《エルベ離宮 紋章の間》

入口を守っていた特務兵達を倒したあたし達が部屋の中に入ると、部屋の中は怪しげな霧で充満していた。

「これは……？」

あたしの呟きに答えるように奥から声が聞こえて来た。

「ふふ、こうして人質を眠らせておけば逃げられる事もないと言う事よ」

この声は聞き覚えがある。  
そしてこの眠気を誘う霧……結社の幹部の一人、ルシオラさんの仕

業だ。

霧の中に居るうちにあたしの頭の中までぼーっとしてきたわ……。

「ええい、ハリケンメーカー！」

そう叫ぶティータの方に視線を向けると、扇風機のような機械が動き出すのが見えた。

あんな機械がティータのリュックの中に入っていたの？

あたしはぼう然とティータがルシオラさんの霧を吹き飛ばすのを見ていた。

あたし達の周りに満ちていた霧はすっかり晴れて眠気は吹き飛んで行った。

「ナイスよ、ティータ！」

「えへへ」

あたしが親指を立ててティータに向かって笑顔を送ると、ティータも照れ臭そうに笑った。

「あらあら、みんな私の術で幸せな夢を見ていたのに、覚ましてしまっってはかわいそうよ」

そう言つて優雅な笑みを浮かべるルシオラさん。

あたしの頭の中に以前にルシオラさんの術にかかって眠ってしまった時に出会った母さんの姿が浮かぶ。

あれはあたしの心の奥底の願い。

でも、あたしは夢の中で母さんと、いえ、もう一人の自分と約束したのよ。

夢の中に逃げ込まないで前を見て進むって！



「今度こそ僕達と勝負しろ、ルシオラさん！」

怒ったようにそう叫ぶヨシユアに、ルシオラさんは鼻で笑ったように見えた。

「私の任務は時間稼ぎ。人類補完計画を成功させるためのね」  
「結社は何を企んでいるんだ！」

ヨシユアがそう言って問い詰めると、ルシオラさんは静かに首を横に振った。

「私もくわしくは知らないわ。ただ私はあの人にもう一度会いたいだけ」

「姉さん、まだ団長の事を……」

シエラ姉が辛そうな顔でルシオラさんを見つめる。

「……だって、私自身に幸せな夢を見せる術をかける事は出来ないもの」

「でも、会えたとしてもそれは姉さんの心の中の団長じゃない」

ルシオラさんの呟きにシエラ姉はあわれんだ様子でため息をついた。

「ふふ、団長の魂はあの時私が奪ったのよ。そして今も私の手元に……」

うつとりとした目つきで虚空を見つめるルシオラさんにあたしは寒気のようなものを感じた。

そんなルシオラさんの姿が揺らいで行く。

「また逃げる気ですか！」

ルシオラさんはヨシユアの言葉に何も答えずに煙のように姿を消してしまった。

「お、俺はどうしてこんな所に……」

「ナイアル先輩！」

人質になっていた人々がうろたえながら目を覚ましたようだった。あたしは人質にされていたモルガン將軍の孫娘、リアン又ちゃんの事が気になって急いでリアン又ちゃんを捜した。

「あなたが、リアン又ちゃん？」

「うん、そうだよ」

あたしが声をかけた時、リアン又ちゃんは落ち着いていた。特務兵達にさらわれて心細い思いをしていると思ったのに、意外だった。

「私ね、夢の中でパパとママと一緒にだったから寂しくなかったよ！」

あたしは喜んだ顔でそう言うリアン又ちゃんに本当の事を言えなかった。

「姫様、御無事でなによりです」

あたしがリアン又ちゃんと話している間に、みんなはクローゼの無事を喜んでいた。

クローゼは以前のジェニス王立学園の制服では無くて、落ち着いたドレスを着ている。

まるでお姫様みたい……って本物のお姫様なんだっけ。

「ええっと、クローディア王女殿下と呼ばばいいのかな？」

そうあたしが質問すると、クローゼは首を横に振った。

「いいえ、以前のようにクローゼで結構ですよ」

「クローゼもお父さんとお母さんの夢を見たの？」

「ええ、私が1歳の時に事故で亡くなってしまったと聞かされてい  
ましたけど、写真は残っていましたから……」

クローゼはそう言っ胸に手を当てて目を閉じた。

「クローゼ、あの夢は……」

「わかっています。あの夢は私達を甘い世界に閉じ込めるために作  
られたもの……でも、自分を見つめ直す良い機会になりました」

そう言っあたしを見つめるクローゼの瞳は力強かった。

うん、クローゼは自分を見失っていない。

あたしは安心した。

「きゃあああ！」

ティータの悲鳴が上がった方を振り向くと、そこにはティータに大  
きな鎌を突き付けたレンが立っていた。

「はわわレンちゃん、何で……？」

おびえた瞳でティータがそう問いかけると、レンは不敵に笑う。

「ティータがレンを置いてどっかに行っちゃうから迎えに来たのよ」  
「レンちゃん、私もエステルお姉ちゃんとヨシユアお兄ちゃんのお手伝いがしたかったから……」

「やっぱり、ティータもレンの側から居なくなっちゃうんだ」

そして、レンはもつと大きい声で叫ぶ。

「ヨシユアみたいにレンを置いて行っちゃうんだ！」

「えっ？」

「やっぱり、僕は前に君に会ったことがあったんだね？」

あたしは驚いた声を上げてレンとヨシユアの話聞くことしかできなかった。

「ヨシユアは、レンの事をすっかり忘れて、エステルのお婿さんになっちゃって！ この浮気者！」

「僕が浮気？」

「だって、ヨシユアはレンの事、お嫁にもらってくれてるって約束したのよ！」

「ええっ！？」

「何だと？」

「それは本当ですか？」

「何ですって！？」

「本当なんですか？」

あたし以外にも驚いた声が部屋の方々から上がった。

「そんな……僕が結社に居た頃はまだ小さい子供だったし……よく覚えていないよ」

ヨシユアが戸惑ったようにそう答えると、レンは心の底から怒ったような顔になった。

「裏切り者のヨシユアなんて大嫌い！ エステルと一緒に首をはねてやるんだから！」

レンはそう言うのと、ティータを強引に連れて部屋の外に出て行った。

「待つて、レン！」

あたしはヨシユアと一緒に中庭に出ると、レンは大きなロボットの  
ような物の手のひらの上に立っていた。

そのロボットにはぐったりとしたティータが乗せられていた。

陽動や遊撃、かく乱に出ていたみんなも中庭に来ていたみたいだけど、そのロボットに手出しができないようだった。

「パテルⅡマテル、行くわよ！」

レンが命令すると、そのロボットは空高く浮かび上がって、王都の方へと飛び去ってしまった。

《王都グランセル郊外　キルシエ通り》

僕達はグランセル城に居るシンジ達と合流するため、エステルやクローゼ達と一緒にエルベ離宮からの道のりを走っていた。

「ヨシユア、レンの事を考えているの？」

「うん……」

どうやらエステルには僕の事はお見通しだったみたいだ。

「レンはきつとヨシユアの言葉を支えにしてきた部分もあったんだろっね」

「僕が結社に居た頃、レンの事はとても小さな女の子だとしか覚えてなかった」

「その時のヨシユアが10才ぐらいだとして、レンは6才ぐらい……その頃の子って、憧れとかでお嫁さんにして欲しいと言っちゃうんじゃないかな？」

「そう言うものなのかな？」

「あたしの友達もそんな感じよ。教会の日曜学校を卒業する年になると、みんな笑い話になってるけどね」

「エステルもそうだったの？」

「あたしは初恋を自覚したのは、マノリア村でヨシユアとキスしたときだったから……」

そう言つて顔を赤くして僕の方をチラリチラリと見るエステルはかわいくて。

「ふふ、お二人が羨ましいです」

「えっと、クローゼはシンジに……」

エステルが困つたような顔でクローゼに言い淀んだ。

「ええ、振られてしまいました。シンジさんとアスカさんの間には私がとても割つて入れないような特別な絆があるようですね」

「クローゼはシンジが初恋の相手だったの？」

「そうではないですけど……シンジさんの優しさにひかれてしまいました。リシャル大佐から帝国の皇子との縁談を強く勧められて

いて困っていたところでしたから」

「そっか、クローゼは姫様だもんね」

「お相手の皇子様がお優しい方だったらいいんですけどね」

クローゼが溜息と同時にそう言った途端、オリビエさんが大きなクシャミをした。

「おい、大事な作戦の最中に恋の話なんてしているんじゃない！」

話し込んでいた僕達は、アガットさんに怒られてしまった。

「そうね、アガットの恋人のティータがさらわれちゃったんだから、心配よね」

「バカやろう！ あの子は俺の恋人なんかじゃねえ……まあ、妹みたいなものだ」

エステルにからかわれたアガットさんは少し顔を赤くしてそう言った。

「いやはや、こんな時に遊んでいられるなんてまったく頼もしいやつらだぜ」

「そーですね、ナイアル先輩」

エステルのおかげで僕の暗い気持ちはずいぶんと明るくなれたけど、レンは僕に心をまた開いてくれるのだから。

それだけが不安だった。

僕達はグランセル市街を駆け抜け、アスカとシンジ達、救出された女王様との合流地点である西区画の大聖堂へと急いだ。

## SC 第零話 奇跡の戦士エヴァンゲリオン

- Writer Side -

### 《第三新東京市》

突如、市街地の中心部に現れた巨大な黒い球体に対して、ネルフは第十二使徒レリエルと断定し、エヴァ三機による迎撃を決定した。

作戦部長である葛城ミサトが初号機に遠距離からの攻撃の指示を下そうとする直前、

アスカの乗る式号機が初号機の前をさえぎり、第十二使徒レリエルの元に突撃した。

そして、式号機はレリエルの直下に生じた黒い影に沈み込んで行く。救出しようと駆けつけた、碇シンジが乗る初号機も共に黒い影に飲み込まれて消えてしまった。

「レイ。後退するわ。」

「待つて！まだ初号機と碇君が！」

「命令よ、下がりなさい。」

葛城ミサトと、零号機パイロット綾波レイの会話が続く中、

レリエルの直下に展開された黒い影から、初号機と式号機が飛び出し、

黒い影から少し離れた場所の路面に着地した。

エヴァ両機の無事に、発令所は歓喜に包まれたが、次の瞬間、皆が違和感を感じて首をかしげる。

初号機が銃みたいなのを装備している。式号機は長い棒のような武器を持っている。

黒い影に飲み込まれるまえには持っていなかったはずだ。

そして、モニターに映し出された初号機内の映像に発令所は凍りつ



いた。

十六歳に成長したシンジとアスカが二人乗りの操縦席で仲睦まじく座って居たのだ。

レリエルに飲み込まれる前は十四歳の中学生だった二人が。

さらに、式号機にも十六歳の黒髪で琥珀色の瞳を持つ少年と赤い髪とルビー色の瞳をもつ少女が座っていた。

- A s u k a   S i d e -

アタシはモニターに映っているネルフの発令所の面々が固まっている姿を見て、失笑を浮かべていた。

隣に座っているシンジも噴き出しそうになっているのをこらえている。

『な、何で初号機にアスカが乗ってるのよ！しかもシンジ君と一緒に！式号機は誰が動かしてるのよ！』

「自分の目で確認して見れば？」

アタシがそう言うと、ミサトは式号機の方に通信を切り替えたみたい。

- E s t e l l e   S i d e -

「どうやら、無事にアスカとシンジが居た世界に来れたみたいね。」

「うん、でもこれからが本番だよ。」

式号機の操縦席であたしがヨシユアと話していると、

通信モニターに黒い長い髪のおばさん、いやお姉さんの顔が浮かび上がった。

『あなたたち、なんで式号機を操縦しているの？アスカに関係があるわけ？』

お姉さんはあたしたちを警戒しているのか、睨みつけている。  
あたしたちは第一印象が大事だ、と言う事で、精一杯の笑顔をモニターに向けて、自己紹介をした。

「あたしはアスカのお姉さんのエステル・ブライトです。よろしく  
ー。」

「僕は同じく兄弟のヨシユア・ブライトです。」

『私は葛城ミサト。よろしくねん、じゃなくて！アスカはひとりっ  
子のはずよ！』

「まーまー、あの使徒って奴を倒した後、ゆっくりと説明するから  
さ。」

あたしはそう答えた後、モニターから聞こえる怒号は無視して、ア  
スカたちの乗る初号機を注視していた。

- Shinji Side -

初号機に乗るボクたちはスピーカー越しに聞こえるミサトさんの式  
号機への怒鳴り声を尻目に、  
使徒を倒すための行動を開始した。ボクが操縦桿を握り、アスカが  
魔法の詠唱を始める。

アスカとシンクロしているエヴァ初号機も、魔力の開放を始める。

「ヘルゲート！」

アスカの声と同時に、初号機の前方、レリエルの直下に暗黒の渦が  
発生する。

暗黒の渦は、レリエルの本体にダメージを与えたようだ。崩壊する  
虚数空間。

レリエルの影だった黒い球体と一緒に本体である直下の黒い影も跡

形もなく消えた。

- Y o s h a   S i d e -

僕は黒い球体と影が消え去るのを見て、使徒が倒された事に安心した。

五感を駆使して、念のため周辺の気配を探ってみる。

うん、使徒の気配はしないようだ。

スピーカー越しに相変わらず混乱した声が聞こえる。

『エ、エヴァが魔法を使うなんて、そんな非科学的な……』

『リ、リツコ！』

『先輩、しっかりしてください！』

どうやら僕たちの事を構っている暇が今のところないようだ。

でも、エヴァから降りたら簡単に信じてはもらえないだろうけど、説明しなければならない。

シンジ君のお父さん。僕たちの世界ではお世話になりました。

今度は僕たちがあなたたちの世界を救う番です。

未来のあなた方もそれを望んでいます。

僕は決意を固め、隣に座っているエステルの手を握りしめた。

## SC 第一話 最狂爆弾兵器J A改の恐怖

《初号機 操縦席》

『あなたたちがレリエルを通じて別世界で二年を過ごして戻って来た、ですって?』

『しかもその世界で未来でサードインパクトを起して時間をさかのぼった我々と会ったというのかね。』

『確かに、シンジ君とアスカのDNAは一致しているけど……。』

「モニターの向こうの発令所は混乱が続いているみたいだ。」

「そうだ。父さんから手紙を預かって来たんだ。」

「ボクはしまっていた紙を取り出した。」

『もうお前たちの無駄話に付き合っている暇はない。』

今まで口を開かなかった父さんがついに喋り出した。

ボクは紙をモニターの前で広げた。

発令所のモニターには、  
黙れ!

ゲンドウ

と書かれた紙が映し出されているはずだ。

『わかった、シンジ。お前の話を信用しよう。』

『碇!』

『司令!』

『問題無い。』

手紙一枚にこんなに効果があるなんて!

隣に座っているアスカは肩を震わせて笑いを堪えている。

『あはははー!』

式号機に繋がっているモニターの向こうでエステルが大笑いしている姿が見えた。

《弑号機 操縦席》

「あはははー！」

あたしは弑号機の中でモニター越しに交わされている会話がおかしくて、噴き出してしまった。

「エステル、もうちょっと礼儀正しくした方がいいよ。」

隣に座っているヨシユアが呆れ顔であたしにツツコミを入れてきた。『エステル、だっけ？あんたの事も聞かせてもらっわよ。』

モニター越しからちよつと苛立ったようなミサトさんの声が聞こえる。

とりあえず、あたしたちがいきなり処分される事は無くなったわね。

『じゃあ初号機と弑号機はケージに戻ってくれる？』

あたしはヨシユアと一緒に警戒しながら弑号機を降りた。

ケージではミサトさんが待っていた。

「ようこそ、ネルフへ。さあ、司令室へ案内するわ。」

アスカとシンジも合流して一緒に司令室への廊下を歩いて行く。

あたしたちに不信感を与えないようにするためか、ミサトさん以外の姿は無い。

「加持さん。隠れてないで出てきたらどうですか？」

ヨシユアが物陰に向かって声をかけると、物陰から無精ひげの男性

加持さんが出て来た。

「いやあ、気配を消したのに気づかれるとは、君は何者だい？」

「ただの元暗殺者ですよ。」

ヨシユアがニッコリ笑って答えるとミサトさんは悲鳴を上げた。

「ぎよえええ、暗殺者！？」

「ミサトさんの旦那の加持さんも似たような仕事してるんじゃない？」

「ぎよえええ、加持が旦那！？」

あーミサトさんが、完全に固まってしまったわ。

《ネルフ 碇ゲンドウの部屋『司令室』》

「盗聴器と監視カメラの類はここに無い。安心して話してくれたまえ。」

副司令がそう言うのと、今まで質問をしたくてウズウズしていたリツコが早速発言をする。

「じゃあ、まずはその二人がなぜ式号機を動かせるのか教えてもらいましょうか。」

なんなら、あなたたちを検査してもいいのよ。」

「エステルに触るな…。」

もしも、変な実験でもしてみろ…。」

ありとあらゆる方法を使ってあんたを八つ裂きにしてやる…。」

「ひいい。」

ヨシユアに睨まれたリツコが悲鳴を上げた。

「じゃ、じゃあなぜエヴァンゲリオンが改造されているのかしら？」

リツコは質問の矛先を変えたようだ。

「例えば、戦車に運転手と砲撃手が存在するように、ひとりが防御、もう片方が攻撃に専念できる。」

回避行動に集中しながら魔法の詠唱に集中することができるわけ。ひとり乗りより合理的でしょう？」

もつとも、アタシたちみたいに気持ちに通じ合っていないと乗りこなせないけど。ねシンジ？」

アタシはシンジの腕に自分の腕を絡ませながらそう話した。

「誰が、そんな改造をしたのかしら。」

「それは私たちよ。」

アタシたちがその声が聞こえた入口の方に視線を送る。

「ユ、ユイーーー!!」

碇司令は椅子を蹴飛ばして立ちあがり、凄い勢いでユイさんの元に駆けつけたわ。

でも、ユイさんは抱きつこうとした碇司令に平手打ちを喰らわせた。「ゲンドウさん！今までシンジやリツコさんたちに酷いことをした

事を反省しなさい！」

「すまない。」

「じゃ、許す。」

と言ってユイさんは背伸びして碇司令にキス。

司令室の中は凍りつく人、睨みつける人、反応は様々だったわ。

<編集カット部分>詳しくはこのページの一番下をご覧ください。

《第三新東京市 コンフォート17》

飛ばされた世界の事とか、新しくなったエヴァの説明は母さんに任せて、

ボクたちはミサトさんの部屋から引越をしていた。

ボクはネルフに戻って来た日から、アスカと二人暮らしをするようになったけど、

寝るとき以外は結局、以前カシウスさんの家で暮らしていたように四人で居ることが多かった。

アスカは父さんに頼んで、リビングの壁をぶち抜いて一つの部屋にしちゃうし。

でも、カシウスさんに拾われた十四歳の頃と違うのは、

アスカの側に居るのがエステルじゃなくて、ボクって事かな。

「シンジ。ハンバーグ食べさせて。あーん。」

ボクはハンバーグを切り分けて、息を吹きかけて冷ましてからアスカの口に運んであげる。

「ねえ、アスカ。どーしてあたしたちの前でそう言う事するのよ。」

「バカね。エステル。見せつけるために決まってるじゃない。二人きりでやるより、

誰かの視線を感じていた方がテンションが上がるのよね。」

「アスカ。恥ずかしいよ。もしかして、そういう趣味……。」

「シンジ、それ以上は言わない方がいいよ。」

「そ、そうだねヨシユア。」

「エステルも、来週から高校に通うようになったら、他の女がヨシユアにちよつかいを出さないように、たつぷりと見せつけてやりなさいよ。」

「そ、そうかな……。ヨ、ヨシユア。」

「はい、エステル。口を開いて。」

「うん、……おいしい。」

ボクたちの夕食の食卓には、巨大なハンバーグが中央の大皿に乗せられるのが定番になった。

ゆつくりと時間をかけた夕食が終わった後、二人でソファーに腰かける。

アスカはボクの肩にそつと頭を乗せていた。

向かい側のソファーに目を向けると、ヨシユアもエステルと肩を寄せ合って居た。

ボクたちは特に喋らなかつた。体がそつと触れあっているだけで幸せだ。

「あ、お風呂が沸いたみたいね。エステル、行こう。」

アスカとエステルがバスルームに行くと、部屋にはボクとヨシユアが取り残される。

ボクは煩惱を抑えながら夕食の後片付けをする。

「アスカって、スタイルいいし可愛いし。あたしが男だったら絶対惚れてたね。」

「エステルだつてさ……。」

バスルームから二人の話声が聞こえてくる。大きな声で話さないで欲しいな。

ヨシユアも読書をしているけど、あまり落ち着いていないみたいだ。「シンジ〜 お風呂空いたわよ。」

アスカはお風呂上がりにはバスタオル一枚というスタイルで、ボクを挑発してくる。

最近エステルも影響を受けたのか、同じ服装で……。

でも、本当はバスタオルの中は寝巻に着替えている事を知っている。



でも、万一何も着てなかったら……。エルモ温泉の時の事を思い出すと興奮してしまう。

「アタシの体、ナマで見てみる？あはっ、一回見せちゃったんだっけ。」

ボクは顔を真っ赤にしてバスルームに駆けていく。

残ったヨシユアはもつと我慢させられるんだろっね。ごめん。

「じゃあシンジ、おやすみのキス。」

キスが終わると、アスカが先にベッドに入って、ボクを隣に招き入れる。

昔はエステルが悪夢にうなされるアスカを抱きしめて寝ていたけど、こっちの世界に戻ってきてからは、ボクが隣で寝ている。

もう悪夢は見なくなっただけど、寂しいから、だってさ。

ボクとアスカはキス以上の関係にはまだ行っていない。

でも、アスカが隣に居ると、ボクはドキドキしてなかなか眠れない。

「うにゅ〜シンジイ。」

寝言なのか、そう言っただけでアスカがボクに抱きついてくると、

アスカに嫌われてしまうんじゃないかという不安はすっかり消えて気持ち良く眠れるんだ。

### 《日本重化学工業共同体 松代試験場》

次の日の朝。松代で第十三使徒バルディエルがジェットアローン改に寄生したって一報が飛び込んできた。

ボクたちはエヴァに乗り込み、飛行モードで松代に向かった。

ボクたちが到着すると、巨大ロボット『ジェットアローン改』は突然、腕を伸ばしてきた。

間一髪A・T・フィールドを展開して、腕の攻撃を弾き飛ばす。

『シンジ君。ジェットアローンの本体に強い衝撃を加えると、爆発する恐れがあります。』

発令所にはミサトさんもリツコさんも居ないので、マヤさんがモニターに映し出されている。

『ジェットアローン改をエヴァ両機で持ち上げ、飛行して上空高くで爆発させるというのが今回の作戦です。』

『君たちにはかなり危険な任務を押しつけて、すまん。』

『炉心融解まで後二十分！』

「シンジ！防御は任せるわ！アタシはアイツの肩を捕まえる！」

ボクの乗る初号機は伸びるジェットアローン改の腕に腕をA・T・フィールドの上からつかまれてしまった。

高圧電流が放出されたけど、A・T・フィールドのおかげでダメージはない。

アスカは攻撃をもとめせずに突き進んでいく。エステルの操る式号機と一緒に。

ジェットアローン改の肩をつかんだ時には敵の腕は根元から折れてしまっていたけど、

危険な本体が残っている事には変わりはない。

「よし、持ち上げるわよ！飛行モードに移行。」

だけど、ジェットアローン改は全く浮上しなかった。

「な、なんで持ちあがらないのよ！エステル、出力最大にしてるわよね！」

『ジェットアローン改の体重が重すぎる！？』

『仕方ない。A・T・フィールドがあればエヴァは爆発に耐えられる。』

通信スピーカーから流れる父さんの声にボクは頭を殴られたようなショックを受けた。

ミサトさんが、リツコさんが、周りに居る人たちが一瞬にして消え去ってしまうイメージが頭に浮かぶ。

ボクの頭は悪い思考に支配されて、それ以外何も考えられなくなった。

## SC 第二話 敵はネルフにあり

《日本重化学工業共同体 松代試験場》

碇司令の声が聞こえた途端、シンジの瞳から光が失われた。

アタシは慌ててA・T・フィールドを張り直す。

「ボクがダメだからみんな死んでしまう……死んでしまう……。」

「シンジ、しっかりしてよ！」

アタシが呼びかけてもシンジは全く反応を示さない。

見ているアタシの方も胸が張り裂けそう。

『戦いには犠牲がつきものだ。諦めろ。』

発令所から聞こえる碇司令の声にシンジの体がビクンと震えて崩れ落ちた。

ああ……これじゃあ使徒を倒してもシンジの心が……これまでの……？

『諦めるんじゃないわよ！』

式号機からの通信でエステルの声が聞こえた。

『最後まで、みんなが助かる方法を考えるのよ！』

下ばかりみてイジイジしない！』

シンジが体を起こした。

「そうだ……助かる方法を考えるんだ。」

「シンジ！」

目に光を取り戻したシンジを見てアタシはうれし涙を流した。

あーあ。やっぱりエステル姉さんの輝きにはかなわないか。

下ばかり見てないで……下……地下！

「思いついたわ！」

「ええっ、本当？」

「シンジ、エヴァの操縦をお願い。……マヤ、ミサトに連絡して、パーティー会場に居る人たちをシエルターに避難させて。」

『でも、アス力。あのシエルターでは爆発にはとても耐えられない』

わよ。』

「大丈夫。アタシを信じて。シエルターへの避難が完了したらアタシに教えて。」

「さあ、シンジ。ジェットアローン改を抑え込むわよ。」

「うん。頑張るよ、アスカ。」

初号機と貳号機で両腕の無くなったジェットアローン改を抑え込む。そして、数分後。

『シエルターへの避難が完了したわ。』

発令所から待ちに待った通信が入った。

『マヤさん、車に乗り込んで逃げようと駐車場に向かっている人が居ます。連れ戻すように伝えてください。』

ヨシユアは研ぎ澄まされた感覚から人の気配を感じ取ったようだ。

『……ごめんなさい。今度こそ避難は完了したわ。』

よかった。ひとりでも死者が出たことが分かったら、シンジの事だから落ち込むに決まってるわ。

『炉心融解まで後五分。』

「シンジ。アタシは魔法の詠唱に集中するからよろしく。」

初号機から魔力が解放されるのを感じる。

「アースウォール！」

アタシはシエルターを中心とした一帯にアースウォールの魔法をかけた。

この魔法は敵の攻撃を一回だけ完全に防いでくれる。

エヴァに乗っているからってシエルター全体にかけるとは思わなかったけど。

その後、ジェットアローンは炉心融解して、パーティー会場本館や周囲の建物は消え去ったけど、

シエルターは無傷で、救助したみんなに感謝されたわ。

「シンジ、もっと喜ばないよ、ホラホラ。」

アタシはシンジの腕をつかんで思いつき振り回した。

ちよっとオーバーかもしれないけど、子供のように喜んで見せた方

がシンジは嬉しいと思うから。  
ご褒美よ。ご褒美。

《式号機 操縦席》

ジェットアローン改の事件以降、シンジは初号機に乗る事を拒否している。

碇司令に言われたことが堪えているようだ。

『シンジ。私の立場も分かってくれ。』

『そうよ、シンジ君。あれは仕方がないことだったのよ。』

発令所ではミサトさんや碇司令が懸命に説得をしている。

『ミサトさんだって、使徒に取りこまれたアス力を見捨てようとしたくせに！』

やれやれ。シンジは吹っ切れたと思ったのにまだ拘っているのか。意外と頑固だな。

「僕はあの爆発で赤の他人を助けようと全然思わなかった。」

僕は式号機の通信マイクに向かって、発令所に聞こえるように話しかける。

隣に座っているエステルに視線を送る。

「こういう時、自分がたまらなく嫌になる。人として不完全じゃないか、

心のどこかが壊れているのかもしれない。いや、すでに壊れていて人形なのかも……。」

エステルはコンソールを激しく叩いて怒って叱り飛ばした。

「そんなことない！この五年間、あたしはヨシユアの事をずっと見てきた！

良いところ、悪いところは誰よりも知っている自信がある！

たぶん、ヨシユア本人よりもね！あたしを差し置いて、勝手な事いうんじゃないわよ！」

『そ、そうだよ！ヨシユアは人形じゃない。ひとりの人間なんだ。』  
発令所からシンジの慌てた声が聞こえて来た。もうひと押しだね。』

「じゃあ、碇司令やミサトさんも同じ痛みを感じているわけだよね人間だから。」

『あつ。』

『ヨシユアも人が悪いわね。二年前と同じ場面を再現してシンジを騙すなんてさ。』

「あたしも危うく騙されるところだったけど、成長したものね。」

「調子に乗らないの。」

エステルにツツコミを入れたとき、僕は邪悪な気配が近づいているのを感じた。

「ミサトさん、北東の方向から敵が近づいてきます！」

『使徒！？レーダーに引つ掛からなかったの？』

でも、ヨシユア君のおかげで絶対防衛線は突破されずに済みそうだわ。』

「さあ、シンジ。二人の愛の力で使徒を倒すわよ！」

アスカとシンジは元気に初号機に乗り込んでいった。

使徒ゼルエル戦はあっさりと決着がついた。

僕たちのA・T・フィールドは破られなかったし、使徒のA・T・フィールドはあっさり中和されて、

固い装甲に守られていたコアも式号機の一突きで粉碎。

S2機関も動力がセプチウムの新エヴァには必要なかった。

《第三新東京市 焼き肉チエーン店 角》

使徒を倒したあたしたちは、ミサトさんとリツコさんに連れられて焼肉屋に入った。

でも座席はあたしたち四人組とミサト・リツコ組とは別。

「ねえ、シンジ。この肉が良い具合に焼けているわよ。あーん。」

ゴックン。

「ア、アスカ。アスカはタン塩が好きだったよね。はい、あ、あーん。」

ゴックン。

シンジもちよつと照れがあるけど、アスカの求めに応じているみたいね……。

あたしの前に肉が差し出された。パク。

あたしはヨシユアのつかんでいる肉を食べてあげた。

「えーい、お返し！」

「ごほつ、エ、エステル、一時に何枚も口には入らないよ。」

「どーだ、参ったか。」

「勝ち負けの問題じゃないと思うんだけど……。」

あたしがヨシユアに肉を食べさせて満足していると、視界の隅にとんでもない光景が飛び込んできた。

「シンジ。頬つぺたにご飯粒が着いちゃった。取って。」

シンジが手を伸ばして取ろうとすると、

「まだ分かってないわね。口で取って、く・ち・で！」

「う、うん……。」

そう言つてシンジはアスカに顔を近づけていって……。ペロリ。

「はは、あそこまでとは参ったね。エステル。」

ヨシユアはそう言つて、あたしの指先についたご飯粒を眺めている。「ばれてるか……。」

### 《第三新東京市 コンフォート17》

僕たち四人が焼肉屋で食事を終えて公園の前を通りかかると、

公園の中から僕たちを探るような視線を感じた。

「そこに隠れている人。出てきてください。」

すると、学生服を着た青い髪の少女が出て来た。確か……綾波レイさん、だったかな。

「私は私の碇君を取り戻しに来たの。」

「綾波!?!」

「碇君。私と心と体も一つになりました。それはとても気持ちの

いいことなのよ。」

「な、なにを言い出すんだ……。。」

「碇君は私に笑って欲しいって、優しい言葉を掛けてくれたわ。

私の部屋で私の裸を見た。そして倒れかかって来た。本当の事よ。」

「そっか、シンジは誰にでも優しいんだよね。ファーストにも手を  
出していたんだ。」

「アスカ！アスカー！」

アスカは泣きながら走り去ってしまった……。



### SC 第三話 幸福な死を、カオル君に。

《第三新東京市 コンフォート17》

「……どういうこと？」

アスカが走り去った後、あたしたちはシンジに詰め寄った。

「綾波が誤解させるような言葉を言うから悪いんだ。

押し倒したって、あれはつまづいただけだし、ボクが来る前から裸で居たじゃないか。」

シンジの話を聞くと、綾波って子は起こったことの大部分を省略して、

自分の都合の良い部分だけを断片的に喋っただけみたい。

「アスカ、覚悟しなさいよ！首根っこを掴んでも絶対にシンジと仲直りさせてやるんだから！」

あたしはアスカが走り去った方向を見つめて、拳を握りしめた。

アスカは公園の裏山の林の中に居た。

「ゲゲ、エステル！何でここがわかったの？」

アスカはあたしたちの姿を見つけると逃げようとした。

「こら〜待ちなさい！」

「僕から逃げる事は出来ないよ。」

「ヨシユア、ずるい〜。」

ヨシユアがアスカの逃げ道に先回りしたみたいだ。

あたしたちはアスカを連れて、家に戻ったんだけど……。

「嫌。いくら好きっていわれても信じられない。」

「アスカ……。」

「触るな、バカシンジ！」

アスカはずっと部屋に籠りっぱなしになった。

あたしたちは、すっかり輝きを失ってしまった。

いつも前向きなあたしも、今回ばかりは堪えたわ。

## 《ネルフ 発令所》

衛星軌道上に第十五使徒アラエルが出現したから、アタシは否応なく部屋から引っ張り出されて、ネルフの発令所まで連行された。

初号機はアタシが心を閉ざしている状態だから出撃を見合わせ、式号機が超長距離攻撃で倒すことになった。

だけど、攻撃は使徒のA・T・フィールドに阻まれて効かなかった。飛行モードに移行して、接近して使徒を倒すことになったけど、エステルが悲鳴を上げて、式号機はコントロールを失って墜落してしまった。

どうやら、エヴァが飛行した頃に使徒から光線のようなものが照射されて、

エステルは精神的なダメージを負ったらしい。

『式号機の回収、急いで！』

式号機が回収された後、使徒からの攻撃は収まったみたい。

「どうしよう。あたしの心の中、ヨシユアに知られちゃった。」

エステルは明るさの中に隠していた心の傷、

自分の身代わりになって時計台のがれきの下で死んだお母さん、レナさんの事をアタシ以外の人には話していないけど、ヨシユアに知られてしまったらしい。

「使徒の攻撃は精神的なもので、A・T・フィールドでも防げないようだな。」

「式号機をメイン操縦していたエステルだけが精神汚染を受けたようです。」

冬月副司令とリツコがぼそぼそ喋っている。

「エヴァ二機のうち、片方が使徒の攻撃を受けている間に、もう片方が使徒のA・T・フィールドを打ち破る作戦でいくぞ。」

「ああ。問題無い。」

「でも、エステルちゃんは大丈夫なの？」

『あたしは、もう大丈夫……。ヨシユアは、暗いあたしも受け入れ

てくれたから。」

式号機からエステルの落ち着いた声が聞こえる。

「初号機は……でられるのかしら。」

ミサトが腕組みをしながら呟いた。

「囃役は、ボクにやらせてください！」

シンジは大声でそう宣言した後、俯いているアタシに声を掛けた。

「……アスカ、ボクと一緒に初号機に乗ってほしいんだ。お願いだから。」

#### 《初号機 操縦席》

アタシは黙ってシンジの後ろから初号機に乗り込んだ。

「さあ。使徒！ボクの心を覗くなら覗け！隅々まで！」

使徒の体から光線が照射される。

シンジの心がアタシの中に入ってくる……。

絶対に離さない、アスカを見捨てるなんてできないよ！

アスカの笑顔も眩しかった。蒼い瞳が輝いて。最近見てないな、

アスカの笑顔。また見たいな。

太陽だね！？ボクの太陽を奪いに来たのか！

アスカはボクの心を輝かせる太陽なんだよ……。

アスカが撃ち殺されるなんて嫌だ。アスカを守りたい守りたい守りたい守りたい守りたい。また見たいな。

これは誓いのキス。ボクとアスカが婚約したって事だよ。

シンジはアタシの事、こんなに思っていてくれたんだ。

嬉しさのあまりアタシは座席を乗り越えて、シンジに抱きついてしまった。

「シンジ……信じてあげられなくてごめんね。それよりも嬉しい、嬉しいのよ！」

「アスカ……こんな方法で伝えてしまつてゴメン。でも、ボクもほ

つとしたよ。」

その後、式号機がロンギヌスの槍を投げて、使徒は殲滅された。

### 《第三新東京市 コンフォート17》

使徒を倒して、あたしたちは家に戻ったんだけど、

綾波さんもシンジに付きまとい、家まで来てしまっていた。

あたしたちは綾波さんをリビングに案内して、ゆっくりと話し合いをすることにした。

「綾波。一方的な思い込みを押しつけるのはダメだよ。」

「碇君が私に優しくしてくれたことは、本当じゃないの？」

ヨシユアが割って入って綾波さんに話しかけた。

「愛には二種類の愛がある。他人に与える愛と、自分のための愛。

シンジが綾波さんにあげた愛は、前者の方、慈愛の心だと思うよ。」

「私は碇君が求める存在にはなれないというの。セカンドとは違うというの。」

「綾波さんの気持ちもわかる。愛とは抑えられない感情だから。

きつと、すぐにでも綾波さんの愛を受け取ってくれる人が現れるはずさ。」

「私はもうエヴァのパイロットとしての価値が無いの。

こんな私の愛を受け取ってくれる人なんていない。」

綾波さんは涙を流しながら暗い顔をして俯いてしまった。

ピンポン。玄関のチャイムが鳴る。ドアが勝手に開くと、

第壱中学校の制服を着た銀髪で赤い目をした男の子が入ってくる。

「こんばんは、みなさん、お揃いだね。」

「あなた、私と同じ感じがする。何故？」

男の子にいきなり腕をつかまれた綾波さんは顔をあげて問いかけた。

「俺はフォース・チルドレン、渚カオル。君と同じ造られた存在さ。」

「私が造られた存在……？」

「君は第二使徒リリスの魂を肉体に封じ込めるために、碇ユイ博士

の遺伝子を使つて造られた存在。

俺は第一使徒アダムの魂を肉体に封じ込めるために造られた存在。

……第十七使徒タブリス。」

渚君は、ひとりだけ冷静なヨシユアを見て、興味を持ったのか、視線を向けて話しかけた。

「おや、君は俺が来るってことがわかつていたのかい？」

「うん、いつも感じている使徒の気配がしたからね。」

渚君は納得したように軽くうなずいて、こう言った。

「俺は自分の意思で、君たちに殺されに来たのさ。」

「なぜ、カオル君が死ななくちゃならないんだよ！同じ人間なのに！」

シンジが身を乗り出して叫ぶように言った。

「俺たち使徒と君たちリリンはどちらかしか生きられないらしいよ。俺にとつて生と死は等価値なんだ。君たちが生き延びるために、殺してくれ。」

「私も渚君も死ななければいけないの……？」

綾波さんはまた赤い目から大粒の涙を流している。

「アンタ、バカア！？何でそうなるのよ、納得できる理由を説明しなさい！」

アスカが渚君を指差して詰問をする。

「なぜって……ゼーレの老人たちがそう言ってるし……はは、疑ったことすらなかったな。」

「アンタ、底抜けのバカね。いいわ、死刑執行人、惣流・アスカ・ラングレーが、

綾波レイと渚カオルに死を与えるわ！」

「ア、アスカ。人殺しなんて止めてよ！」

シンジがアスカに駆けよつて必死の形相でアスカを引っ張っている。

「アタシが言ってるのは、レイと渚が婚約するってことよ！」

「婚約！？」

「そ。結婚は人生の墓場っていうじゃない！これでアンタたちは死

「んだのよ！」

「そうか、俺は死んだのか。もう俺はリリンに仇なす存在じゃないんだね。」

渚君は凄い無垢なんじゃないかとあたしはため息をつきながら思った。

「パンパカパーン！このアタシが婚約初心者のアンタたちにありがたい講義をしてあげるわ。」

アスカは、綾波さんと渚君を隣り合わせに、あたしとヨシユアに近づくように、そしてシンジを手招きした。

「じゃあ、ファースト、ううん、ユイママの子供ならアタシの妹だからレイって呼ぶわね、準備はいいわね。」

「はい。アスカお姉ちゃん。」

アスカは出前で取ったピザを一切れ、シンジの前に持って行って、「渚、ピザをレイの口の前に持って行って、あーん。と言うのよ。」

「こ、こうかい、惣流さん。」

「まあ、初めてにしては筋がいいわね。」

「リリンの行動には興味深いものがあるね。」

「さあ、次はキスの練習よ！キスをするときは、鼻息がこそばゆくならないようにね。」

「じゃ、エステルにヨシユア！お手本を見せるのよ！」

「あうあう。アスカとシンジ以外に見られるのは恥ずかしいよ。」

あたしがとまどっていると、ヨシユアがあたしの唇を奪った。

アスカはシンジの唇を奪っていた。

「行くよ、レイ君。」

コクリ。

綾波さんは黙ってうなづいて唇を重ねた。わずかに触れ合うだけのキス。

「……なんか、唇と胸が熱くなってきたわ。」

「そうよ、レイ！それが恋なのよ。さあ、復習よ、もう一回！」

《ネルフ 発令所》

ネルフでは、コンフォート17にパターン青が検出されパニックになっていた。

発令所から連絡を受けたアタシが渚のヤツに相談したら、渚のパターン青の反応が消えたみたい。

そういえば、表向きはフォースチルドレンとしてネルフに来たんだから、

普通の人間としても振る舞えるわよね。

「第十七使徒タブリスはコンフォート17で殲滅したとゼーレには報告する。」

レイと渚と一緒に来たアタシたち四人は、

レイと渚が二人でエントリープラグに入れば、

零号機でもアタシたちと同じように攻撃と防御が同時に出来るようになるから、

エヴァ零号機のレギュラーへの復帰を宣言された。

アタシたちはレイと喜びを分かち合ったわ。

その時、第十六使徒アルミサエルが出現し、警報がネルフに鳴り響いた。

さっそくデビューした零号機が偵察行動に出る事になった。

「レイ、帰ったら婚約者講座の続きよ！次はポッキーだからね！」

アタシは出撃していくレイに元気に声を掛けた。

《初号機 操縦席》

第十六使徒アルミサエルは出現した後、環の状態で上空に漂っているだけだったけど、

零号機が出撃すると形を変えて、その矛先を零号機に向けた。

使徒は零号機のA・T・フィールドを突き破って、零号機に食い込んだ。

『使徒と零号機の物理的融合度、9・7%！』  
オペレーターのマヤさんが警告の声をあげる。

ボクとアスカは顔を居合わせて、零号機救出のための出撃準備を待った。

『大丈夫です。碇司令。問題ありません。』

『そうか。それならば初号機と弐号機はそのまま待機。』

「父さん！？綾波たちを助けないの!？」

ボクは驚いて抗議した。

『レイと渚君には何か考えがあるようだ。やらせてみよう。』

『零号機の方から使徒に干渉している模様です！浸食率が増大しています！』

『まさか！零号機が使徒を取り込もうとしているの?』

『アルミサエル、あなたも寂しかったのね。いいわ、私たちと一つになりましょう。』

『俺たちのエヴァと一つになろう。』

零号機のエントリープラグから綾波とカオル君の優し声が聞こえてくる。

『使徒のパターン青、消失。零号機との融合を果たした模様です。』

『零号機がS2機関を有することになるとはな。』

『ああ、これでユイの計画の実行可能性が高まった。サードインパクトは確実に起こさねばならん。』

最後の使徒が居なくなった。いよいよ最終決戦だ。

ボクは激しい胸の高鳴りを感じた。



## SC 最終話 明るい未来のための逆行

### 《ネルフ 作戦会議室》

第十六使徒アルミスエルが倒された直後、アタシたちやネルフの幹部クラスの関係者は作戦司令室に召集された。

集まったメンバーには誰一人例外無く緊張感が漂っている。全員集まったのを確認すると、碇司令が口を開いた。

「とうとう、死海文書に記されたすべての使徒が倒された。」

「ゼーレはきつと渚君を始末するとともにサードインパクトを起こそうとここに量産型エヴァを送り込んでくるはずだ。」

「我々は、潜水艦に乗り込み、サードインパクトを利用して二年前の並行世界 リベール王国ヴァレリア湖の湖底に跳躍する。」

碇司令と冬月副司令の説明に声を挟む人は居なくて、みんな必死に耳を傾けていた。

「ここにいるメンバーには、シンジ君たちが使徒レリエル戦から帰還した後にその概要を伝えてはいるが、

向こうの世界へ跳躍したものは、二度とこちらの世界へ戻れない。また残念ながら同じ世界に同じ人間が存在することはできない。」

「あれからこちらの世界に残りたいと気が変わった者は、辞退することもできる。恥ずべきことではない。名乗り出たまえ。」

碇司令のこの言葉に、辞退を名乗り出る人は居なかった。

「葛城君。やはり君はリベール王国に行ってくれるのかね。」

「はい。副司令の分まで責務を果たす所存です。それと……姉としてシンジ君とアスカに誠意を示す最後のチャンスですから。」

「この加持リョウジも同じ気持ちです。」

「技術面では私がサポートします。」

「そうか……では私が行く必要は無いな。葛城君でも大丈夫だ。」

「あなた？」

ユイさんは碇司令のこの発言に驚いて目を丸した。

アタシも同感だった。何を言い出すんだろう？

「私は傷つける事しかできなかった。今まですまなかったな。」

そう言つて碇司令はこめかみに銃を当てた。

司令が銃の引き金を引く……。

でも、その時銃声が響いて、司令の手から銃がこぼれ落ちた。

「司令！」

「銃が暴発したのか!？」

「シンジ君!？」

シンジがいつの間にか銃を抜いていた。

「右手だけを狙って打ったのか!」

「腕をあげたな、シンジ君。」

「父さん。今度こそ、死んだ気になって協力してよ。」

「ああ……問題無い。」

「そうよ。悪党を騙せるのは、悪人面している司令しかないわよ。」

「調子に乗るんじゃないの。アスカ。」

ヨシユアはこっそりと司令の背後に忍び寄って居たみたいだけど、出番が無かったわね。

作戦会議室は、別れを惜しむ人たちの声で満ちていた。

「シンジ君。アスカ。今度こそ本当にお別れね。」

ミサトが目には涙を浮かべて近づいて来た。

自分の将来の人生を捨ててまで別世界に行くのだから、今度こそ偽善では無いと信じたい。

アタシは素直にミサトに抱きしめられた。

「向こうに言ったら加持のヤツと仲良くすることにするわ。……も  
っとも、あいつが浮気しなければの話だけだね。」

「ミサトさんたちなら大丈夫ですよ。ボクたちに愛の結晶を見せて  
もらったし。」

「赤ん坊をダシにしてアタシたちを説得するんだもの。……もしか  
して、もう妊娠しちゃってるんじゃないでしょうね。」

「あはは……シタことはあるけど、まだ妊娠はしてないと思うわ……  
」。

「まったく、ズボラなんだから。」

「……ガサツでしょ。」

「あーら、いつの間にかエステルちゃんとヨシユア君も来てたのね  
……キツイツツコミね。」

こうして、ミサトをからかうことができるのもこれが最後か……。

アタシがそんな事を考えていると、ネルフに警報が鳴り響いた。

「ゼーレが動き出したか。跳躍するメンバーは、ただちにセントラ  
ルドグマの潜水艦にむかえ。」

「オーバー・ザ・レインボウ艦長！」

ミサトさんは作戦会議室に入って来た人影を見て声をあげる。

「ネルフには艦隊司令の経験者がいないとのことだな。ワシが引っぱり出されたわけだ。」

まさか虹だけではなく次元まで越えるとはおもわなんだ。」

ネルフ本部は慌ただしくなった。発令所に向かうのは冬月副指令、ユイさん、オペレーターのメガネとロン毛。

それ以外のネルフ幹部は職員を伴ってこぞって潜水艦に乗り込むみたいだ。

#### 《初号機 操縦席》

『日本政府よりA - 801が発令されました。』

『ネルフの特例による法的保護の破棄及び指揮権の日本国政府への委譲です。』

『よし、作戦どおりセントラルドグマに通じる隔壁を全面開放。敵を招き入れる。』

『MAGI、ハッキングを受けています。』

『防壁を展開します……ダメです、乗っ取られました!!』

青葉さんの叫び声の直後、モニターに、バイザーを着けた白髪のお爺さんが大写しになる。

『ごきげんよう、ネルフの諸君。潜水艦に乗って逃げ支度かね。』

MAGIが支配下に置かれているので、こちらから返事は出来ない。でも、空調などはそのまま動いているようだ。

『セントラルドグマを開放して、ゼーレに降伏の意を示すつもりだったのかな？まあいい、命だけは助けよう。』

そこで新たな人類の指導者の誕生を見ているがいい。』

モニターに白いエヴァンゲリオンが空中を移動している姿が映し出された。

『我々ゼーレによる人類補完計画の遂行。その隠れ蓑としてネルフは役に立ってくれた。もう役目は終わった。』

『だ、そうですよ、みなさん。』

『なに、それはどういうことだ？』

モニターのお爺さんが振り返り、移動したカメラの視線の先にはカシウスさんが悠然と立っていた。

『この会話は世界中のモニターに映像と音声配信されているということです。』

繁華街のモニター前などでは、貴方の姿にたくさんの人々が足を止めているでしょうなあ。』

モニターの向こうでは銃を突きつけられて囲まれているゼーレの幹部たちの姿が映し出されていた。

『キール・ローレンツ。民間人の平和を脅かした罪により拘束する。』

『まったく、父さんたらおいしいところばかり毎度毎度もっていくんだから、納得いかなーい！』

『まあ、気持ちわかるよ。』

式号機からエステルとヨシユアの声が聞こえる。ということは、機能が回復してきているのかな？

『ふふふ。MAGIが無くても、私達にはカペルがある！』

エリカさんが自信満々に宣言する。

そういえばエリカさんもラッセル博士も、反対を押し切ってリベール王国から着いて来た（多分好奇心だらうけど）けど、

今まで本編では出番が無かったから、うっぴんが溜っていたんだろ  
うな……ん、本編とか出番って何だろう？

カペルのサポートによってMAGIはコントロールを取り戻している。  
く。

『日本政府より、A-801が撤回され、Z-801が発令されました。』

『ゼーレの特例による法的保護の破棄及び組織の即時壊滅の作戦コードです。』

『おのれ、貴様の仕業か、カシウス・ブライト!』

青葉さんと日向さんの報告を聞いたキールはモニターの向こうで悔しがっている。

『エヴァンゲリオン量産機は出撃された。もう引き返せませんよ。さあ、我々と一緒に奇跡が起こる瞬間を見届けようではありませんか。』

『量産機9機、日本の領空に侵入しました。』

『もうお別れなのね。せつかくあなたたちと心が通じ合えたのに。』

「レイ……。」

ボクの隣に座ってるアスカはとても悲しそうな顔をしていた。

『アスカお姉ちゃん。最後に碇君が太陽のようだって言っているとびきりの笑顔を私に見せて。』

「グス……でも、アタシ、悲しくて……」

『大丈夫。きっといつかまた会える。そう信じて、楽しいことを考えて。』

「そうね。今度会った時はまたゆっくりおしゃべりしましょう。」

『ちょっと、綾波さん。あたしも居るんだからねっ!』



『ごめんなさい、エステル……さん。私、あなたとそんなに話したこと無かったから。』

『じゃあ、ほれほれ、あたしの笑顔を見せてあげよう。ピースピース。』

『エステル、Vサインだなんて……もう子供じゃないんだから。』

「……アスカ。」

「……うん、シンジ。」

ボクはアスカと一緒にモニターに向かって精一杯の笑顔をした。

『あなたたちの笑顔を見ると……心がポカポカする。』

「って、なんでアタシたちの顔が発令所正面の大モニターに映し出されているのよ！」

『まあいいじゃない。減るもんじゃないし。私も加持も旅立つ前に良いものを見させてもらったわ。』

あ、この映像はさすがに世界には送信されてないわよ。ラブレターが来ちゃったら困るものね。アスカ』

ネルフ全体に笑い声が響き渡ってる感じがする。最終決戦なのに和やかな空気。誰もが成功を信じてる。頼んだよ、綾波。

『さて、そろそろ自動行動プログラムによって制御されている量産機が本部に着くころだ。頼むよ。』

「クロックアップ改！」（SPD+50%）

『クレスト！』（DEF+25%）

『エヴァ量産機の輸送機がネルフ本部上空、セントラルドグマの直上に到着。量産機の投下が開始されました。』

量産機が着水する音が聞こえる。量産機は零号機以外は相手にしないようだ。零号機を取り囲んで剣を構えている。

『パイロットとエヴァのシンクロを全面カット、急いで！』

『エヴァ、アルサミエル、あなたたちだけに痛い思いをさせてごめんね。』

零号機はコントロールを解かれ、棒立ちになった。無抵抗の零号機に9体の量産機が攻撃を加えて行く。

さすがに1対9では攻撃をかわしきれない。まだ綾波とカオル君はボクたちのようなA・T・フィールドは使いこなせない。

「ティア・オル！」（HP完全回復）

『ティア・オル！』（HP完全回復）

ボクたちは魔法で傷ついた零号機を回復させながら、零号機の攻撃に夢中になっている量産機にダメージを与えて行く。

「くそ、敵のA・T・フィールドは貫通してダメージを与えられるけど、九体は多すぎる……。」

すると、正面のゲートが開いてロボットが出て来た。

『戦略自衛隊から援軍に参りました、トライデント三機。霧島マナ以下三名が戦闘に加わります。』

ボクと同じぐらいの歳だと思う女の子の声が通信スピーカーから聞こえた。これで少しは楽になる。でもまだ足りない。

すると、さらにゲートの奥から製作者の美意識を疑いたくなるような奇妙なデザインのロボットが九体も出て来た。

『行け！ジェットアローン改式式たち！』

『時田シロウ博士！？』

『はは、葛城さん、あの時はご迷惑をおかけしました。今度の動力は大型電池です。戦闘も十五分は可能です。』

『ゼーレもアレが兵器だとは見抜けなかったみたいよ。』

『シンジ……。』

『アスカ！落ち込みたいのはわかるけど、今はダメだよ。』

『あははははー！前のよりおもしろい形！』

『エステル、笑ってる場合じゃないよ。』

足を引っ張りに来たのかな……。

ジェットアローン改式も、エヴァ量産機にダメージを与えられる威力の攻撃ができるみたいだ。ムチによる電撃攻撃。

零号機に対する攻撃も中断されて、一石二鳥だった。二度の大失敗にめげない時田シロウ博士、意外と凄い人なのかも。

ダメージを受けた九体のエヴァ量産機の動きが止まった。

『潜水艦デロリアン、エヴァ零号機付近に向かって発進せよ！』

『オーバー・ザ・レインボウ艦長、なんでこの潜水艦の名前をデロリアンに代えちゃったのよ？』

『フン。セカンドインパクト後に生まれた若造にはわからないだろうがな。タイムマシンはデロリアンと決まっているのだ。』

『セカンドインパクト前に放映された映画の影響らしいわよ、ミサト。』

潜水艦やえしお……じゃなかった、デロリアンはネルフのみんなを乗せて零号機の足元にたどりついた。

『エヴァ量産機、再起動しました！』

装備していた武器を失った量産機たちの攻撃は零号機のA・T・フィールドで防げると思うけど、用心を重ねて様子を見る事になった。

『量産機から翼のようなものが伸びています。攻撃する気配は感じられません！』

『零号機、再シンクロ開始!』

再起動を果たした零号機の通信モニターが復活した。綾波とカオル君は悲しいのを我慢してボクたちに笑顔を見せている。

『……これ以上通信をしていると、泣いてしまいそうだから、切るわ。……さようなら、碇君、アスカお姉ちゃん。』

エヴァ零号機は潜水艦デロリアンをそつとつまみ上げると、はりつけにされていた白い巨人の元へ歩いて行く。

量産機も遠巻きにそれについていく。

零号機の手が白い巨人に触れると、両方とも早い速度で上昇していく。量産機も周りを取り囲む形で飛びはじめた。

そしてその姿が豆粒のように小さくなって行って……見えなくなつた。

『エヴァ零号機、量産機、潜水艦デロリアン……。すべてのロストを確認しました。』

「零号機が消える瞬間は見れなかったね、アスカ。」

「綺麗な飛行機雲……。」

青空には、エヴァ零号機と量産機の軌跡が十筋、刻まれていた。

これで、二つの世界を行き来したボクたちの物語はおしまい。

これから、ボクとアスカとエステルとヨシユアは高校生として第三新東京市で暮らしていくんだ。

まず勉強の遅れを取り戻さないとね。将来の事について考えるのはそれからでも遅くないから。

ボクは料理で人を喜ばせる仕事に就きたいと思ってる。漠然とだけどね。

アスカは……どんな仕事に就くんだろう。アスカは頭が良いからいろんな仕事につけるよね。今度聞いてみよう。

## SC 外伝一話 アスカとエステルのバレンタイン

《第三新東京市 市街》

暦の上では二月。お店はどこもかしこもバレンタインセールの中。最中。

アタシとエステルは洋服や小物の店をウィンドウショッピングしていた。

「なんで、最近チョコをたくさん売ってるの？」

お店の様子を不思議に思ったのか、エステルが質問してきた。

「バレンタインを知らないの？」

アタシは呆れながらも、バレンタインの事を説明してあげた。

「いいなー、あたし、チョコ食べるの好きだよ。ヨシユアに作ってもらおう。」

「バカ。女の子の方が作るのよ。」

「えー。面倒だなあ。」

エステルはふくれて答えた。

「ちょうどいいわ。明日はバレンタインだし、手作りのチョコをつくりましょ。」

アタシはチョコレートの材料を買っているあたりから、気づいてしまった。

そういえば、今までシンジにはチョコをあげてなかった。

アタシたちが十四歳の時から二年間暮らしていたリベール王国ではそんな風習なかったし。

料理やお菓子作りの腕もシンジと一緒に食事当番をしているうちにそれなりに上がって、

シンジにおいしいチョコを作ってあげられる自信がある。

そして、シンジはあたらしいアタシの魅力に気づくはず……。

でも、シンジと一緒に作ったら驚かす意味が無いわね。シンジたちを家から遠ざけておかないと。

「はいはい。シンジ君とヨシユア君にはネルフで特別な検査と云ってあげるわよ。」

ミサトにはかなり不自然な命令をでっちあげてもらった。

碇司令まで了解してくれるなんて、『碇アス力計画』はユイさんの手でかなり進行しているようね。



あたしたちは、キッチンに入ると早速エプロンをしてチョコ作りを開始した。

「どんなチョコを作るの？」

「そうね、ガトーショコラとかはまだアタシにも難しいから、ハート型のチョコにしようか。」

あたしたちは、ハートの型ぬき、オーブンシート、ボウル、ゴムベラ、包丁、温度計などを用意していく。

「まず、チョコを刻むのよ。」

あたしとアスカは包丁で買ってきた板チョコを刻んで行く。

「次は、湯せんをするわよ。」

「湯せん？」

「刻んだチョコをボウルに入れてかき混ぜるのよ。」

「あー面白そう、あたしもやってみたい！」

あたしはアスカからボウルを受け取ると、思いっきりかき混ぜた。

「ちょ、ちょっとエステル、手加減なさいよ、チョコがこぼれちゃうじゃない！」

「あーあ、チョコまみれになっちゃった。」

チョコまみれになったアスカはあたしからボウルを取り返して、ゴムベラでダマが残っていないか確かめていた。

「エステルがこぼしたせいで、量が減っちゃったじゃないの。」

「あはは。まだ残ってるからいいじゃん。」

「全く。お湯も入っちゃって、これじゃあテンパリングしても固さにムラが残っちゃうじゃない。」

「テンパリング？」

「チョコを滑らかに固める事よ。ココアパウダーをまぶして……、さあ型に入れるわよ。」

アスカはオーブンシートを丸めてコルネを作り、チョコを絞り出して型に入れていく。

「ふう。ギリギリ間に合ったわね。エステルがこぼさなければ、もうちょっと厚く作れたのに。薄っぺらになっちゃったじゃないの。」

「すぐ食べられるの？」

「全く。エステルは色気よりも食い気なんだから。冷蔵庫で固めるの。」

アタシたちもチョコまみれになっちゃったし、お風呂に入りましょ。

「

あたしはアスカと一緒にお風呂でチョコを洗い流すと、チョコの事

が気になって、先に冷蔵庫の方へ駆けて行つた。

あたしは冷蔵庫を開けると、自分の分のチョコを取り出して、食べてみた。

「うーん。ちょっと柔らかいところがあったり、固いところがあったり……。」

あたしは、隣にあるチョコに目を向けた。

「アスカの方はどうなんだろ。やっぱり同じかな。……一口だけならいいよね。」

パクッ。

「ああー！エステル、何してんのよ！」

とても怒つたアスカはあたしを殴つた。グーで殴つた。

「なにすんのよ！父さんにも殴られたこと無いのに！」

あたしが怒鳴り返してもアスカはアタシの方を見ていなかった。

「えーん。シンジにあげるチョコなのにい。」

アスカの宝石のように綺麗な蒼い目から涙があふれ出した。

「ごめん、アスカ泣かないで。」

アスカは肩にかけたあたしの手を振り払って、外に出て行ってしま

った。

《第三新東京市 後のチルドレン公園》

ボクはアスカが泣きながら家を出ていったとエステルから聞いて、ユニゾンの時にアスカが居た公園へと向かった。

入口にはミサトさんが立っていた。

「シンちゃん、遅いわよ。アスカなら泣きながら公園に入って行っただよ。」

「仮にでもボクたちの保護者を名乗って居たのに、結局フォローはしないんですね。」

ボクが皮肉たつぷりにそう答えると、ミサトさんはバツが悪そうに俯いた。

「あはは。だってさ、シンちゃんが慰めた方が面白そう……あわね。」

……本音はそれかい。

「男の子として、頑張るのよ。」

ミサトさんはまだボクの後ろの方で騒いでいた。

ボクは公園の奥で膝を抱え込んで座っているアスカを見つけて声を

掛けた。

「アスカ、話はエステルから聞いたよ。」

「ごめんね。シンジ。せっかく恋人になって初めてチョコをあげるはずだったのに。」

参ったな……何と言えばアスカが元気になるかわからないよ。

「おい。アスカ、シンジ。」

公園の入り口の方からエステルがこっちに駆けて来るのがみえた。

後ろにはヨシユアが買い物袋を持って涼しい顔でついてきている。

ヨシユア……ボクの事を尾行したな。

エステルは落ち込んでいるアスカの腕を引っ張って強引に立ちあがらせた。

「こら、アスカ。材料を集めて来たわよ。バレンタインはまだ明日じゃない。」

そう簡単に諦めるんじゃないわよ!」

翌日。ボクはアスカのチョコがもらえて、めでたし、めでたし。のはずだったんだけど……。

「……で、エステルは自分で食べちゃったんだ。」

「チョコが好きだから、つい……。」

「ヨシュア……。同情するよ……。」

エステルは味見のつもりが全部食べてしまったらしい。四人分をペロリと。

ヨシュアは冷静に見えるけど、かなり落ち込んでると思う。エステルの鈍感さを恨むよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1124/>

---

『僕のアスカ。太陽のような君。』 & 『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セット

2011年11月17日18時01分発行